

里慣るゝ黄昏時の子規きかず顔にて又名のらせむ(異本)

引きかへて花見の春は夜はなく月見む秋は晝なからなむ(異本)

かうした心持は、源氏物語において、われ／＼の到底求め難いものであつた。單純な滑稽や機智は、深刻な個性を通ずる時、可笑味となつて生れ出る。西行の作は、このことを實證してゐる。

第五、信仰の人西行。

これは、西行論の最後の問題、最も重大な問題、解決難の問題かも知れない。全く、緇衣をまとつた西行の姿が、わたくしの心に雲に聳ゆる雪山の如く映る時がある。その境地は、到底、わたくしの様な無信仰者の覬覦を許されない神祕的世界かも知れない。しかしながら、なほ、時にそれは極く近い境地で、ふつとそのままわが心の中にも映り得るやうな姿として、わたくしに觀ぜられるのも、結極、幻想の一種にすぎないのであらうか。覺束ない足取ながら、わたくしは、その閃影を捕捉しなければならぬ。

さらに想へば、西行の一生そのものが、いかに時代の大推移を象徴してゐることであらう。「凡そ物の心を知りしよりこのかた、四十あまりの春秋を送れる間に世の不思議を見ること度々になりぬ」と言つた長明に増して、西行の體驗はなほ一層大きい。また、甚だ深い。

何事も變りゆく世の中に同じ影にも澄める月かな(異本)

かうした傍觀的なおちつきを得るまでには、かれは限られぬ人生の曲折を経なければならなかつたのだ。

わたくしは、更に、かれの様々の時、様々の場合に詠んだ作をしみ／＼した氣持で思ひ浮べて來る。

野邊によりて茂き淺茅を分け入れれば君が住みける礎の跡(山家集)

これや見し昔住みける宿ならん蓬の露に月のかゝれる(山家集)

他人の家とわが家との別ちもなく亂世は、すべてを破壊してゆく。ましてや治承四年には福原遷都といふ如き、未曾有の事變が持ち上つてきた。

露しげく淺茅繁れる野となりてありし都は見し心地せぬ(山家集)

雲の上や古き都になりにけりすむらん月の影はかはらで(山家集)

保元・平治・源頼政の叛亂と相續く戦ひは犠牲者を限りなく生み出す。

世の中を思へばなべて散る花の我が身をさてもいづちかはせん(山家集)

年月をいかでわが身に送りけむ昨日の人も今日は逝き世に(異本)

心なき人すら、無常觀を抱かずには居られないほどのあさましき世相である。

天台宗の教理の中に淨土欣求の觀念の萌したことは紫式部論の中で述べておいた。その後良忍上人があつた。上人は天治元年(西行七歳)の交、京都に念佛の功徳を遊説し、禁裡に念佛會を營み鳥羽

上皇その他に大きい感化を齎した。かの浄土宗の祖師法然の生誕は、恰も西行十六歳の年に相當してゐる。しかも、法然が、惠心の「往生要集」などより開悟した念佛爲本の教義は、法成寺の金堂供養を觀て茫然と現世に浄土の幻を描いてゐる氣持とは、甚だ遠いものであつた。すなはち、惠心の言つた様に、不浄、苦相、無常相こそ現世の實相であつて、かゝる穢土的現世を厭離して亡後の往生極樂を望見する所に念佛の意味があるのである。法然は、この場合、特に、彌陀の本願をつよく身に觀ずる法悦を説き、これに對する感謝の方面をも説いたために、惠心の教義に一層の深味を帶びしめた。かくてかれの「撰擇集」は、純粹に浄土宗確立を裏づけ得たのであつた。

法然の弟子に親鸞があつた。浄土眞宗を開きその結果更に鎌倉から室町時代に及んで浄土思想の普及に驚くべきものがあつた。こゝにも西行が、法然等の浄土教の影響をうけた點はこれを免れ得ない。

しかるに西行の傳記は、かれと高野山との關係の最も深甚であることを語つてゐる。家集の詞書によつても、かれは、高野山と京都との間を幾度も往復してゐた。かの

深せてなほ山深く分け入らむ憂き事さかぬ所ありやと

といふ作も、高野から友に送つたものである。待賢門院の女房達が出家して隠棲した仁和寺、烏羽院

皇女の命によつて西行の建立した蓮華乘院、西行の四國旅行に暫く止錫した讃岐善通寺、また西行の臨終の地となつた河内の弘川寺——これから何れとして眞言宗の寺院でないものはない。

住むことは所柄ぞと言ひ乍高野は物の哀れなるべき(山家集)

高野にこもりたりける頃草の庵に花のちりつみければ

散る花の庵の上を吹くならば風入るまじく周圍かこはむ(山家集)

と詠んだかれの氣持にも、高野山に對する親炙の念が出てゐる。

こゝに眞言宗に、弘法大師以後の名僧と稱された覺鑊といふ高僧があつた。覺鑊が傳法院を高野の一角に建て、徳望天下に普き時、西行は未だ廿歳前後であつたが、西行が出家後高野に登つた理由に、この覺鑊(興教大師)の影響を忘れることは出来まい。かつ當時の眞言宗を見るに、源信と時を同じうした深覺は、高野に餘生を送つて念佛を事としたと言はれ、下つて、明算、良禪は當時、高野山における浄土思想の普及者として名高い人々だつた。その門下には、一方源空の説を奉じた者すら出て來た。もつて覺鑊も甚だ時代の流を享け得てゐたことを推測出来るであらう。

西行は、仁安二年(五十歳の年)旅行を思ひ立つて加茂の御神に暫しの暇乞ひをしてから四國に向つた。それには崇徳上皇の白峰御陵に詣つて

よしや君昔の玉の床とてもかゝらむ後は何にかはせむ(異本)

と幽魂を御慰め申しよとの目的と、今一つは眞言の開祖弘法大師の遺跡を遍歴してその遺徳を心深く滲ましめたいといふ考との二つの目的があつたらしい。この旅は前後四五年もかゝつてゐる。

今よりは厭はし命あればこそかゝる住居のあはれをも知れ(異本)

折しもあれ嬉しくも雪の埋むかな來籠りなんと思ふ山路を(異本)

とも歌つてゐるほど、その旅には樂母しい心持をつゞけてゆくことが出来た。

元來惠心の淨土教の骨子は、往生極樂を求める様々の方法の中から大菩提心、護三業、深信、至誠、常念佛及び願の六を抜出し大要を定めた點にある。この六事を教理上から究明すれば様々の問題を生ずるであらうが、深信・至誠・常念を以て念佛行善を果し、護三業にて止善を遂げ、大菩提心と願を以てその兩善を往生に轉向しようとするその行き方は、西行の修行法と一味相通する所ではなからうか。西行は、疑ひなく終生、大菩提心と願とを重んじて念佛をつゞけて行つてゐる。

西行はまた、兼好や芭蕉の様に、神を崇敬した。殊に伊勢神宮には幾度か參詣したらしく、神宮の畔のそこやこゝに庵を結んでゐたこともある。

高野山を住み憂かれて後、伊勢國二見浦の山寺に侍りけるに大神宮の

御山をば神路山と申す、大日の垂跡を思ひて詠み侍りける

深く入りて神路の奥を尋ねれば又上もなき峰の松風(追而加書)

といふ様な詞書き通り、かれにも習合神道の信仰があつた。内宮は胎藏界の大日、その玉垣・水垣・荒垣は正に四重の曼陀羅であると思はれた。外宮は金剛界の大日、これまた安養淨土へ往生する導師と考へられた。

初春を隈なく照らす影を見て月にまづ知る御裳濯の岸(追而加書)

岩戸あけし天つ命の其の上に櫻を誰か植え始めけん(追而加書)

神風に心安くぞまかせつる櫻の宮の花の盛りを——櫻の宮にて(追而加書)

かうした叙景的のもの以外に

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼる(山家集)

宮柱下つ岩根に敷き立てゝ露も曇らぬ日の御影かな(追而加書)

神路山月さやかなる甲斐ありて天の下をば照らすなりけり(追而加書)

神葉に心をかけんゆふしての思へば神も佛なりけり(追而加書)

の如き神を詠んだ観念的の作もある。その間、神官と歌會を催したり、都の知るべに歌を送つたりしてゐる。弟子の蓮阿と二見が浦に庵を結んでゐたといふも、神宮と程近い地であつたためてはあるまいか。日本は神國だ、佛法の佛法となるは皆わが神の力、王法の王法となるも神力の擁護にある。一

天の主、萬乗の寶位と仰ぎ奉る天子は、恭くも伊勢大神の御流れてあり、藤氏の長者天下の攝政といつかれ給ふも、春日明神の御末に當つてゐられる」といふ如き、極めてシムブルな尊崇の念と、信仰を持つてゐた點も、あながち否定されまい。山家集中の神祇十首の如きも、套習的のものと云へばそれ迄であるが、かうした觀念的の詠そのものが却て、かれと尊神の心との關係を語つてゐるのではあるまいか。

その他に、歌神住吉に詣つての作、熊野の神を讃へた作などがあり、加茂の神はこれを特に尊崇してゐたものらしく、その附近に庵を結んでゐたこともあり、四國旅行に立つ時には、「かしてまるしての涙のかゝるかな又いつかはと思ふ心に」と暇乞の歌を奉納さへしてゐる。

欣求淨土の觀念——わたくしは、これを基本として、迄、淨土宗、眞言宗、神道などが、西行と係はる所を述べて來た。更に、わたくしは、かれを往生極樂の信念を抱き得た修行者と斷じようと思ふ。

それは、自ら西方淨土への往生を意味する西行といふ法名を持ち、弟子にも西住といふ法名をつけしめた事實に徴しても、明確な批判であらう。歌の中にも、つぎの様なものがある。

西を待つ心に藤のかけてこそ其の紫の雲を思はめ(山家集)

山の端に隠るゝ月を眺むれば我も心の西に入るかな(山家集)

西へ行く月をや他處に思ふらむ心に入らぬ人のためには(追而加書)

入日さす山のあなたは知らねども心をぞかねて送り置きつる(異本)

夢醒むる鐘の響に打ちそへて十度の御名を稱へつるかな(異本)

慈母の膝を求める嬰兒のやうにかれは西方を望む。「十度の御名を稱へつるかな」そこには少しの涸濁の念すら感ぜられぬ。しかし、今のわたくしに、なほ西行を以て、佛學における高德など、想像しかねる理由は、たゞわたくし一個の氣持にのみよるのであらうか。西行が覺鑊や法然の餘德をうけて、精神修行の末、大悟徹底した大出家と考へられないのは、わたくし一人の偏見であらうか。つねく、世に僧正とか法師とか呼ばれる高僧よりも、西行の方が、より深い正覺者であり、人間的宗教道の實現者と考へようとするわたくしの禮讚は、やはり迷ひの心からなのだらうか。

深草元政上人の西行傳の中には、つぎの様な一句があるさうである。

西行嘗曰、和歌者禪定之修業也。又曰、我由和歌得佛法也

すべての物が佛敎的色彩と佛敎的影響をおびて來た時代、歌道を佛道の方便と考へる如きは、決して異とするに足らない。西行にあらずとも、國行朝臣とか永縁僧正なども、和歌に依て信仰を深め得たといふ逸話のあつた時代なのであるから。

しかし、この場合わたくしは、それを次の如く言ひたい。西行は、念佛修行者と同じやうに、歌を詠みながらも禪定の修業の出来た人であつたと。詠出した対象は、花月を出てなかつたかも知れないが、その刹那のたましいは、彌陀の名號を稱する心にも似て澄み切つてゐた。かつ、輝き出てゐた。

牡鹿鳴く小倉の山の裾近み唯獨りすむ我が心かな(山家集)

小倉山の山麓の淋しい淋しい草庵のくらし、しかし寂寥は、すてにかれを驅つて狂暴には導かない。

「唯ひとりすむ我がこゝろかな」——それは、草庵の生活を噛みしめて味はひ盡した純法悦の境ではあるまいか。

訪ふ人も思ひ絶えたる山里の寂しさ無くば住み憂からまし(異本)

人生の眞味は、遂に孤寥の中にある、寂寥の内にある。愛もこゝ迄深化されてこそ始めてその意味を發揮しうるであらう。「寂しさ無くば住みうからまし」——さうである。それは決して消極的態度から生み出されたものでは無い。崇高な肯定の賜物である。

吉野山花を長閑に見ましやは憂きが嬉しき我が身なりけり(山家集)

徒らに外に外にと求めた心は、たちまちに内化して行つた。以前、寂寥に大きい意味を見出だしたかれは、憂愁の中に、なほ一層の大きい法悦を知るやうになつた。

小山田の庵近く鳴く鹿の音に驚かされて驚かすかな(異本)

山家の生活は、こゝに極めて自然らしいものになつてきてゐる。動物と人間の差別は、すてにとり去られて、両者は共に大自然の中に融合してしまつてゐる。そのリズムもそのまゝによく出てゐるではないか。

世を捨て、谷底に棲む人見よと峰の木の間を出づる月影(山家集)

朗々たる月光が、かつては煩惱の泉であつたこともあつた。しかし、月の光りは静かに西行の心近づいて來た。月は眞如の相を、谷底にすむ人の心の中にも示顯する。

波高き芦屋の沖を歸る舟の事無くて世を過ぎんと思ふ(山家集)

果敢なしな千年思ひし昔をも夢の中にて過ぎにける世は(山家集)

月にいかで昔の事を語らせて影に添ひつゝ立ちも離れじ(山家集)

これらは何とした静寂に包まれた世界であらう。永遠の行脚者が、ふと振返つて積雪の野に残した己

が足跡を眺めた刹那、詠嘆したそのまゝの聲のやうに。

待たれつる入相の鐘の音すなり明日もや生らば聞かんとすらむ(異本)

吳竹の今幾度か起き臥して庵いばりの窓をあげおろすべき(山家集)

散ると見て又咲く花のほひにも後れ先立つ例ありけり(異本)

いつか我昔の人と言はるべき重なる年を送り迎へて(山家集)

死は、萬人の上に残りなく落ちくる事實、しかし秋枯れはてた木も春には芽吹く。人間の生死もすべて、そのやうに自然。

うら／＼と死なむずるなと思ひとけば心のやがてさぞと答ふる(山家集)

その折の蓬がもとの枕にもかくこそ虫の音にはむつれめ(異本)

跡忍ぶ人にさへ又別るべきその目をかねて知る涙かな(山家集)

これらの心境は決して厭世ではない。その涙も、世の悲哀のための涙ではない。生死の境を超越した物心一如の涅槃の世界に見る憂はしみであり涙である。

しかし猶ほ、こゝに佇立して、更に晩年の西行の心境を窺ひたい。源頼朝に向つて弓矢の道を説い

た六十九歳の西行、御裳濯歌合を後生大事に笈に入れて奥州下りを志した七十歳の西行、宮河歌合に定家の判を得て、弘川寺の病床にありながら頬笑んだ七十二歳の西行、また、定家からの「君はまづ浮世の夢はさめぬとも思ひあはせむ後の春秋」といふ歌に、「春秋を君思ひ出せば我は又月と花とを眺めおかなん」となほ花月への愛着を以て答へた西行、——その俯たるや決して親鸞、道元、日蓮の見せてくれた相てはなかつた。兩者の間にはかなりの距離がある。西行はかつて

浮かれ出づる心は身にも叶はねば如何なりとても如何にかはせむ(山家集)

捨て、後は紛れし方は覺えぬを心のみをば世にあらせける(山家集)

と、斷ち難き煩惱を赤裸に詠出し得る人であつた。また、

浅く出てし心の水や湛ふらむすみゆくまゝに深くなるかな(異本)

と、道心の逐年に深まりゆく心境(歌題による)を、詠出するかれてもあつた。否、

我無くば此の里人や秋深き露を袂にかけて忍ばむ(山家集)

とさへ、己れを慕うてやまない庵近くの里人を思うて、口荒む程のかれてもあつた。

しかも、日蓮の心境と離れた處に西行の巍然として立つ姿を認めるわたくしが、西行僧都、西行上人などの敬稱を以てかれを呼ぶよりも、かれに對して歌人西行といふ呼名の如何にふさはしいかを思ふのは、わたし一個の感じからであらうか。「渠や遂に自我を没却して廣大なる自然と冥合すること能

はず、いつまでも己と世とを對立せしめて世は即ち己なることを思はず」と西行を論じたのは、藤岡作太郎博士だつた。歌人西行と呼ぶわたくしなからも、この批判に接する時やはりそれを反暴しようとするそれも、結極わたくしの主觀からのみであらうか。

眞鸞、道元、日蓮——易行道をとる人、難行道を歩む人、悟脱の峰に登るには様々の路程があらう。わが西行の歩み登つた地點、それは果してこれと同じ峰ではなかつたのだらうか。眞鸞と西行との立つた地點は、しかく隔つてゐるのだらうか。最後にわたくしは、潔くこれを否定するものである。(ここに、諸君が、折あらば西行の定家に歌判依頼について送つた書信を一讀されることを望んでおかう。)

建久元年、西行は七十三歳の年齢を迎へた。かれは前年來、河内の弘川寺に、その老衰の身を横たへてゐた。その二月十六日、わが歌人西行は病軀つので、遂に眠るが如くその寺において遠逝した。かれは、かつて、

願はくは花の本にて春死なむその二月の望月の頃

といつたが、その期待どほり折しも寺庭には、花が音もなく一片二片ひらくと散つて居つた。(もつとも歿年、寂した土地、これらについては異説があつて必ずしも一定してゐない)

兼好

西行の寂した後鳥羽天皇の建久元年から、土御門・順徳・仲恭・後堀河・四條・後嵯峨・後深草・龜山の八帝の御代を経た後宇多帝の時代、弘安六年（弘安五年説もある）のこと、治部少輔であつた卜部兼顯に、第三番目の男子が生れた。それが、わたくしのつねに敬愛してやまない兼好であつた。建久からこの弘安までは、約一百年間、僅か一世紀に相當する年數、しかも、その間における政治、宗教、社會上における變化——それは實に甚大なものであつた。わが文化史上、大化改新以後見ることの出來ない程の大變動が、その時代を契機として起つて來て、舞臺は一廻轉したのである。

頼朝が六十六箇國の總追捕使となつたのは、あたかも西行の入寂した年であり、その翌々年には鎌倉幕府と稱する、千數百年來の政治組織に大革命が實現された。時に、京都には、關白兼實があつたが、われ／＼は御堂關白の俣をすてにその何處に忍ぶことが出來るであらうか。平清盛二十數年前武家の身として太政大臣の榮職を極め横暴の限りを盡したけれど、その六波羅の役所は京洛の中にあつ

たために、なほ、組織の上に大革命を遂げることを得なかつた。鎌倉において頼朝は薨じた。しかしそれがために幕府における動搖は寸分無かつたのみか、新武家政治の基礎はその後も日に月に固まつていつた。承久元年實朝の弑殺されると共に源氏將軍の後繼者は斷られたけれども、かへつて、これも北條執權の基礎を強固にするに過ぎなかつた。承久の亂における皇室の御不詳事、後嵯峨法皇の兩統（持明院統及び大覺寺統）迭立の御遺詔の如き、何れとして貴族の勢力失墜に原因をもたないものはない。弘安四年（兼好の生年の前々年）は人も知る元兵の大襲來の年であるが、北條時宗の沈勇、部下の豪毅よく大軍を塵殺したことは、まづ、貴族に對し武家の勝利を世人に確認せしめたものだと言つていい。兼好は、その間に、一右京大夫の孫、一治部少輔の子、一民部大輔の弟として生を享けたのである。かれの環境たる公家階級には、その後永く灰色の空氣が纏ひつづけてゐた。

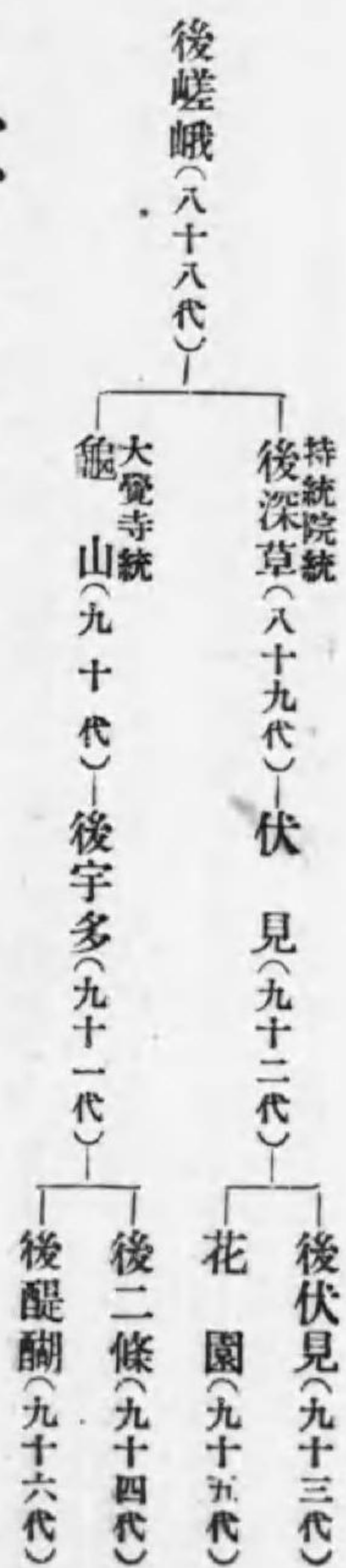
かくて、政治組織の革新は、到るところ社會狀態の上に、大きい影響を印していつた。テモクラシムの思想の現代に跡づけたものとは性質は違ふけれど、新階級の勃興には到るところに價值轉換の悲劇が起つて來た。天台眞言的舊宗教が、時流に不適切なものとなりきつたのもその一事實である。武士道と稱せられる新規範が、武家及その他の階級にまで迎へられてきたこともその一結果である。さて浄土宗を開いた源空は、一時土佐に流されたけれども、欣求浄土の思想は、眞鸞に浄土眞宗を起さしめ、恰も野火の燃え移るやうに稱名の聲は、全國に普及していつた。榮西と道元の開祖となつた新

宗教禪宗兩派が、また武士の信仰を集めて鎌倉中心に流布して、わが民族の上に新精神を齎したことは特筆すべきことである。なほ、われ／＼は、こゝに日蓮の出現を度外視することは出来ない。それは、漸く圓熟しかけて來た國民精神の曙光と見るべきものであつた。傳統を破壊し、習性を放棄し、たゞ己が信念の教示によつて、素手のまゝ生命力に透徹しようとする要求——それは貴族階級破滅の空氣の中に、先覺者のみ抱いたものであつたが、かくて遂にはそれがすべての階級に亘つて行つた。さて卜部兼好の家柄は、代々神祇職であつた。仲哀天皇の世、その先祖に龜卜に長けてゐた命があつて、始めてこの卜部氏といふ姓を賜はつたのである。紫式部のゐた時代、その子孫に卜部兼延といふ神祇伯があつた。この名の兼といふ文字は、帝の御諱である懷仁の、かねの訓音を賜はつたものである。それがため兼好といふやうに、その直系の者には盡く、兼といふ文字を使つて命名された。なほ、兼延以來、京都の吉田神社に關係してゐた結果、吉田兼好などと吉田氏を以て呼ばれるやうにもなつてゐた。要するに、兼好の祖父は次男であつたために神祇大副の職はつげなかつたけれど兼好には宗教家の血液が入つてゐる。當時、神佛合體の巧みに實現された世であつたから、神官と雖も、佛學を窮めるものも多かつた。尊卑分脈を見ると、兼好の長兄は、慈遍大僧正と言ふ高德である。しかも神道に關する神風和記といふやうな著を、南朝の後村上天皇に撰進してゐる。何れにせよ、卜部家は、宗教並びに文史に縁のある家系だと斷じてよい。母系に就ては、紫式部や西行の場合のやうに今

檢べる便がこゝに無い。

兼好の遺著としては、いふ迄もなく第一に徒然草、つぎに兼好法師集（類從二五六）また、顯基甲納言記などをあげることが出来る。徒然草——と、かう思ひ見る時に、私には自ら、西行と芭蕉の姿が思ひ浮べられる。のみならず、多くの追慕者を現代に持つてゐる西行と芭蕉とに比して、あまりに投げ捨てられたまゝの兼好の著述に就て考へ及ぼさざるを得ない。否、徒然草は、山家集や芭蕉句集に比して、より廣く地方の書架に備へられてあるかも知らない。しかし、もし徒然草の行文が、國文の入門的のものでなかつたと假定したらどうだらう。私は、わづか廿歳前後の青年の手に、徒然草の載せられてゐることは、しば／＼認めるけれど、いまだ、成年の人の徒然草を座右に備へて愛讀する者を餘り耳にしない。かの政界の後藤新平男が、徒然草を愛讀書の中に數へてゐたのさへ、私には却てある奇異に感ぜさせられる程であつた。しかし、徒然草は到底、青年輩に玩味され得るとき隨筆ではないのである。兼好が、西行や芭蕉と並べられて、追慕されないとはいふことには、無論他に充分の理由もある。しかし、わたくしはとりあへず、成年の人々に再度この徒然草の味讀を御す、めしたい。兼好の遺作は、はたして西行の歌や、芭蕉の句に比して劣つてゐるだらうか、はたまた、兼好の人格は、西行・芭蕉に比して低劣であるだらうか——それをその機會に再考して頂きたいのである。

兼好生誕の翌年には、時宗が卒して、後には、僅か十四歳の貞時が執權を繼がねばならなかつた。この以後、北條氏の施政も昔日の偉を失つて來たけれど、一方、朝廷においても兩統迭立の定めが設けられ、この兩統間の御内証は、朝廷の威力をいよゝ衰へしめた。つぎにこれを御系圖で表はして見ると、



思へば對立といふ語は、いかにもよく、當代の特色を語つてゐるではないか。公武の對立、舊新兩佛敎の對立、そして兩皇統の對立――なほいくらもあるであらう。わたくしは、それをまた、兼好の性格にもはつきりと認めようとするものである。

あたかも、兼好六歳の時、(正應元年)には、大覺寺統の後宇多帝の御後繼として、持明院統の伏見天皇が御即位されてゐる。當時の朝廷は多端であつた。その年の十月の如き、鎌倉の親王將軍、惟康親王が、貞時のために逐はれて京都に歸り給ひ、翌年三月には、淺原爲頼が徒らに禁中に亂入して來た。更に、その翌々年には興福寺の僧徒が神木を奉じて嗷訴するといふやうな事件迄勃發した。これ

を以て世の亂脈思ふべきであるが、兼好は、その後程遠からず、一瀧口として宮中に奉仕する身となつたのである。兼好が一生における出發點は、弓箭を帶する一武士としてあつたこと、かの西行の運命に似てゐる。

當時二條河原に、つぎの様な時世を摘發した落首があつた。
このころ都に はやるもの。夜討、強盜、謀論旨。召人、早馬、虚騒動。生頸、還俗、自由出家。
俄大名、迷者。安堵、恩賞、虚軍。本領はなるゝ訴訟人。文書入れたる細葛。追従、讒人、禪律僧。
下剋上する成出者。器用の堪否沙汰もなく。漏るゝ人なき決斷所、着つけぬ冠、上の衣。持ちもならはぬ笏持ちて。内裡まじはり珍らしや。賢者がほなる傳奏は。我もゝと見ゆれども。巧なりける詐は。愚なるにや劣るらん。田舎美物に飽きみちて。俎板烏帽子ゆがめつゝ。氣色めきたる京侍。
たそがれ時に成りぬれば。浮かれてありく色好。いくそばくぞや數しれず。内裏をかみと名付けたる。人の妻輒のうかれめは。よその見るめも心地あし。(下略)

この引用は、これだけでは未だその全半にも及んでゐないけれど、一句一句味はつて見ると、實に巧く時代相を把んで俎上にしてゐる。兼好時代の背景が、手にとるやうに出てゐるではないか。
しかし、自ら俵藤太秀郷の九代目の子孫を以て任じ、台記の筆者をして、以重代勇士仕法皇と書

かした西行とかれとの間には、大分の隔りがあつた。傳へによれば、西行は廿歳餘で、檢非違使の要職をすてに法皇から與へられようとしたのであつたのに、わが兼好は廿七歳の時、兄と共に神詠部類十五卷を編した功勞を以て、漸く左兵衛尉をかち得たのである。時世は、武力を要求した。しかし、武人としての兼好の前半生は、極めて平凡で、あながちに花々しいものではなかつたらしい。

人の才能は、書明らかにして、聖の教を知れるを第一とす。次に、手書く事、旨とする事は無くとも是を習ふべし。學問に便りあらむ爲めなり。次に、醫術を習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝の務めも醫にあらずば有るべからず。次に、弓射、馬に乗る事、六藝に出せり。必ず是を伺ふべし。文武醫の道、まことに缺けては有るべからず。これを學ばむをば、徒らなる人と云ふべからず。次に、食は人の天なり。よく味を調へ知れる人、大なる徳とすべし。次に、細工、萬づに要多し。この外の事ども、多能は君子の恥づる所なり。詩歌に巧に、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世に、これを以ちて世を治むる事、漸く愚かなるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きに如かざるが如し(百廿二段)

これは、徒然草中の一節で、また徒然草中にあつては、武力を謳歌した唯一の文である。兼好の本心が武力を讚美し得なかつたことは、何れの點からも立證出来るけれど、かく世は亂れに亂れ、皇室は兩派に分れ給ふて、互に干戈を交へられる世相を眼前にしては、かれにも、武力が最後の解決者で

はないかと思ひ見る刹那があつたのである。

今の世に、これ(文政)を以ちて世を治むる事、漸く愚かなるに似たり

とは、兼好の方寸に閃いた瞬間的の迷蒙であつたかも知れないが、そこに糸の綻びの如くにも亂れた時代をまた思はせられざるを得ない。

永仁六年、兼好の十六歳の時、伏見天皇は、皇子なる後伏見天皇に御讓位あつた。かく持明院統が御重位し給ふた事は、大覺寺統である宇多上皇の御憤りを買はずにはすまなかつた。かくて上皇が關東を御詰責し給うた結果、御伏見天皇は、御在位わづか四年未滿にして御二條天皇(上皇の皇子持明院統後深草上皇の皇女遊義門院の出)に御讓位をなし給ふたのである。この御代の間ひきつゝいて、上皇は院政を執り給うた。時の人臣たる者、一天萬乘の君に對し奉り、尊崇の念に變りある筈はないとはいへ、かくの如き不自然な御讓位、迭立に、己が心の暗くなりゆくを禁じ得なかつたことも無理ではあるまい。その後、鎌倉幕府の基礎も、やゝ崩壞の兆を現はして、公武の間に漲る暗雲は、いよゝ濃厚になり到つた。

兼好の心には、時に、太刀のはをいよゝ利ぐべき秋であると、自ら、鼓舞激勵する如き省慮も閃いたてはあらうが、かれの本性は、また、しばゝその中心點から逸しがちであつた。兼好の傳記者は、かれが左兵衛尉であつた時、宮中萩戸附近において怪鳥を射止めたといふ、かの義清が郎等のことで

源爲義に喰つてかゝつたといふ傳説以上、剛膽勇壯な逸話を傳へてくれてゐる。思へば、武家興起の世となつて百數十年を経した時代、一武人として朝廷に仕侍した兼好に、この位の武勇譚があつたとして、別に賞すべきことでもあるまい。しかし、かれの夢寐の間にも通つてきた世界は、泰平安逸であり、風流韻事を能とし、灯影洩れる彼方の殿舎には琴曲の調べがきかれ、此方の局には、雙六圍碁を遊ぶ女房達のあるが如き延喜・天曆の古てはなかつたであらうか。

かれの長兄は、何故、出家して菩提道に入つたかといふことはこゝに分らない、しかし、兄弟ことごとく武事に疎く文筆に縁があつて風雅の世界に入り得たといふことだけは言ひ得られる。

かく、兼好の胸に、文武の對立がまづ最初に生じたのであつた。

われ／＼は、西行の生立ちを考へる時、パトロンとしての後鳥羽上皇を忘れることは出来ない。詩歌管絃の風流事が、しば／＼弄れた鳥羽の離宮を度外視することは出来ない。西行の詩心は、恰も和らかい土と暖かい水とを興へられた若草の如く、その雰圍氣の中で、すく／＼と生長し得たのであつた。

兼好に、後宇多上皇のいませられたことは、西行に後鳥羽上皇のあらせられた關係にやゝ近い。後宇多上皇は後三條天皇以來の明君と仰がれ、父帝、龜山天皇に劣らず宏覽博識、佛典の奥義を極めさ

せられ、かつ後鳥羽帝の如く殊に韻事に御趣味を有せられ給うた。新後撰集以下、勅撰和歌集に上皇の御製の傳へられるもの、實に百三十六首に及んでゐる。後伏見天皇の、後二條天皇に御讓位あると同時に、院内に御政治を執り給ひ、更に持明院統の花園天皇に繼いで後宇多上皇の第二皇子、後醍醐天皇の御即位と共に再び院政を布かれ、前後三度に亘つて、上皇は朝政を見そなはし給うた。もつとも、徳治二年（兼好廿五歳）上皇は御落飾あつたのでその後は法皇としてとはあつたけれど。

かくて兼好は、後宇多上皇御院政中は、六位藏人(?)あるひは、北面として上皇に御近侍申し上げた。兼好は、當時、廿歳を出たばかりであり、上皇の方は、兼好より十六歳の御年長にましました。そこで御英明な上皇は、兼好のもつ鋭才を觀取されて御採用なつたのであらう。しかし、兼好が若くして上皇の御愛顧を被つて幸運であつたといふ傳紀者の説に、私は首肯しかねるのである。かれは、推察されてゐる程に寵兒では無かつたのではあるまいか。

さりながら徒然草を讀むに當つて、兼好が院に御仕へ申した時代の事の髣髴される段が少なくない。それは、兼好一生の思ひ出を作つた時代であり、また、兼好にとつて若く、そして最も花やかな日であつたらうと思はれる。

後宇多院より、よめる歌どもめされ侍りけるに奉るとて

僧正道我に申しつかはし侍りける

人知れず朽果てぬべき言の葉の天つ空まで風にちるらんと續千載集編纂のために、歌を上皇に奉つたこともあつたのである。かれがかゝる間に文學的素養を積みえたことは、容易に首肯されよう。

和歌こそ、なほをかしき物なれ。あやしみの賤、山賤がうの所作しわざも言ひ出づれば、おもしろく、怖ろしき猪も「臥猪の床」と云へば、優しくなりぬ。

此の頃の歌は、一節をかしく言ひ叶へたりと見ゆるはあれど、古き歌どもの様に、如何にぞや。言葉の外にあはれに、けしき覺ゆるは無し。

貫之が、「糸に縊る物ならなくに」と言へるは、古今集の中の歌層とかや言傳へけれど、今の世の人の詠みぬべき言柄ことばがらとは見えず。其の世の歌には姿、詞ことばの類たぐひのみ多し。此の歌に限りて、かく言ひ立てられたるも知り難し。(中略)

歌の道のみ、古に變らぬなどいふ事もあれど、いさや今も詠み合へる同じ詞、歌枕も、昔の人の詠めるは更に同じものにあらず。安く、素直すなはにして姿も清げに、あはれも深く見ゆ(十四段)

さて兼好は、徒然草の中で、かく時代の歌風について批難の辭を並べてゐる。兼好が、和歌において、頓阿・淨辨・慶雲と共に、四天王の榮譽を受けてゐたことは皆人の知る通りで、かれが人々の賞讃

の的となつてゐたほどもそれ分るであらう。しかし、まづこゝに疑惑を抱かされる點は、徒然草中にかれの詠歌の無いことである。いかに徒然草、着筆の態度が「東關紀行」の如き紀行文や、「讃岐典侍日記」の如き日記文とは異なるにせよ、二百四十餘段の間に自作の歌が多少とも挿入さるべきではあるまいか。なほ、徒然草の言葉が多く人生批評の上に費やされたにせよ。歌論義、歌學の尊重された時代の和歌四天王の一人として、もつと筆觸が詠歌の方面にわれしらず滑つて行くべきではあるまいか。なほまた、兼好がこの隨筆を物した時代は、かれの齡も五十歳に近く、すでに韻律的情緒の波の影を潜めた時代とはいへ、かれが當時の和歌に大きい生命を認めてゐたのなら、追憶的にももつと多く歌話を持ち出すのが當然ではあるまいか。しかるに書中には、只、百卅七段に歌題について數行を費してゐるのみである。兼好法師集の中に、傳へられたかれの作は二百八十餘首に及ぶ。それは、頓阿の草菴集の如く立派な家集の體裁をなしてはゐないが、一家の集としてそれでも歌數の少ない方ではない。慶運の集にしる、寂然の集にしる、歌數においては兼好法師集と大同小異である。(家集以外の遺詠はもちろん問題外として)しかし、勅撰集にとられたものは六集にわたり計十六首にすぎないのは何故であるか。そこでかれの詠作の價值について、私は、それを徒然草に比して餘りの不出來てあつたと、先づ斷じたいのである。かれの歌は、環境のためだとしても、あまり平淡であつた。徒然草の文は、多く枯淡なりづむを持つてはゐるけれど、折にその平野の端に突兀とした峻岳が現はれ

る。また、時に清水迸る流れも見えてくる。そこには、變化もあれば、抑揚もある。徒然草が、意味内容を別にして妙趣を湛へ、讀者を巧に誘つてゆく魅力のある所以は、やはりこのリズムのためだと言つてよい。然らば兼好の若い時代の歌に、またそれに相當したリズムが出づべきである。しかもそれが無い。兼好の廿二歳の時（嘉元二年）大覺寺派によつて新後撰集が撰進されたが、兼好の作はいまだ一首もそれにとられなかつた。かれが卅七歳の時、爲世の撰進した續千載集にわづか一首だけ選入された。義清の青年歌人としてその譽高かつたものと比して、それは餘りの相違ではないか。これについて、わたくしはつぎの二ヶ條をその理由としてあげておきたい。

一、新古今調において行きつまつた歌壇は、傳統を墨守するのみで未だ決路を見出さなかつた上に、一方擬古派が徒らに高稱されてゐた。

一、かれの個性は、歌人としてよりも思索家、宗教家として展開していつた。先づ、前者の方から所見を述べて行かう。

藝術的であり、技巧的であり、保守的であることは、前述したやうに新古今調の遺していつた特色であつた。藝術的であつたことは、現實生活の外廓に氣分を醸出せしめ、それに陶醉を求めるとして、所詮、詠歌に於ける新鮮味は失なはれざるを得なかつた。技巧的であつたことは、詩歌といふものを、

とかくに皮層的のものとし、内生命の強烈な表示となさしめず、萎縮した不具的のものに墮落せしめずにはおかなかつた。保守的といふことは、説明する迄もなく詩歌のすなほな發達を阻止して、いたづらに例歌を尊重し、放恣で自由な表現を抑壓せざるを得なかつたのである。藤原定家の三人の孫、爲氏・爲教・爲相が、分裂して和歌の三師範家（爲氏——二條家、爲教——京極家、爲相——冷泉家）を立てたのにも、他に理由はあるが、歌風の行きつまつた事實が大原因をなしてゐる。しかも、二條家の歌人は大覺寺統に、京極家の歌人は持明院統に各々御關係申し上げ、二條家の手で撰進した勅撰集（續拾遺集・新後撰集・續千載・續後拾遺集等）には、京極家の歌人の作を殆んど採らず、反對に、京極家の手で撰進乃至、校合された勅撰集（玉葉集・風雅集）には、二條家の歌人の作を載せないといふ暗闘に到つては、餘りに卑屈な態度だと言はずには居られない。

京極家の歌風の、やゝ斬新にして氣概の存するに比して、二條家の態度は、俊成・定家の歌風及遺著の正しい繼承者を以て自任し、最も保守的であつた。後宇多上皇は、かゝる二條家師範の爲世に學ばれたのであり、兼好は二條家の歌風の中に育まれたのである。かつ、その二條家の形勢が、やがて、京極家を壓迫してしまつたことは言ふまでもない。例の四天王はすべて二條派であり、源有房の如きも二條爲世の直接間接の弟子であつた。こゝで今少しく、後宇多上皇・爲世・頼阿等の歌調を回顧して見よう。「此の頃の歌は、一節をかしく言ひ叶へたりと見ゆるはあれど、古き歌どもの様に、如何にぞ

や。言葉の外にあはれに、けしき覺ゆるは無し」これ晩年におけるわが兼好の和歌を評した言であつた。しかし、この批評は、特に兼好の徒然草着筆時代のみでなく、その時代に廣く通じて見るべき評言であらう。「をかしく言ひ叶ふ」といふことは、技巧の妙味をさし、「言葉の外に、あはれに、けしき覺ゆるなし」とは、餘情の存せないこと、言ひ換へると、詠歌が生活と隔離して形式的に墮した點を摘發したのである。歌は、生活の中から出てゝこそ、誦する者を動かす力も出て來べきである。三代集時代の空氣が、南北朝の環境と甚だ遠いものであることは申すまでもない。然るに、之を省ることなしに、擬三代集歌を風詠することは、いかにも疎い話ではないか。單なる三代風を模倣した歌から、三代集から與へられる如き生命觀が與へられよう筈がない。尤も、延喜・天曆時代の生活氣分を研究の結果、感得した屈指の歌人——例へば頓阿の如き人は、假令古今調との一致は免れない迄も、平淡無味の詩界を開拓して、後世の追慕を受けてゐる。それは、歌壇における禪的世界であり、耽美的・幽玄的で艶な新古今調とは趣を異にしてゐるとはいへ、技巧的・套習的の上に一致があつて、やはりそこに超生活的の點があるといふことは斷言して憚らない。兼好が、「此頃の歌は、一節をかしく言ひ叶へたりと見ゆるはあれど」と評したのは、この技巧的方面を認めたのであつたが、しかも「氣色覺ゆるは無し」とこゝに一面またこれを批難せざるを得なかつたのである。さりとて、この理想は容易に兼好によつて實現され得なかつた。兼好は、西行の如く、生得の歌人でなく、むしろ批評家であつたのである。

さて後宇多天皇の御製は、すべて二百卅餘首の外に長歌が一首傳はつてゐる。多くの歌人の中に伍しさが逸色のある御作である。爲世が御指導申し上げたのに係らず、京極家的なものも面白い。

河霞といふことをよませ給うける

音はしていざよふ浪もかすみけり八とうぢ川の春の曙(新後撰集)

梅を

きさらぎやなほ風寒き袖の上に雪まぜにちる梅の初花(風雅集)

花を

山櫻さかりになれば枝かはす松の常磐もみえぬ春かな(續現葉集)

題しらず

春くれば雪とも見えす大空の霞をわけて花ぞちりくる(新後撰集)

花をよませ給うける

なべて世の春の心はのどけきに移ろひやすく花のちるらむ(玉葉集)

これらを見るに、何れも調子が高い。描線が太い。兼好は、どうして、かうした歌風の影響すら受け得なかつたのであらうか。わたくしは、つぎに、かれの詠歌の實際について更に研究をして見よう。

現存の兼好法師集には、青年時代のものとして年代の明瞭なものは傳はつてゐない。それは、卅歳以後の作、いな、四五十歳以後の歌の集と見ても不當ではない。このことは、兼好の歌を研究する上に、甚だ以て、遺憾としなければならぬ点である。

武陵雜筆云、古人の評に兼好は文ばかりにては名人なり。いらざる歌にてあしきとなり云々。

と、嘉良喜隨筆の中に幸允が述べてゐるさうである。「いらざる歌」とは、それにしてもあまりに酷評であらう。かれの歌にも、多少の佳作はある。これらの遺詠をとほして、わたくしは、次に出来るだけ徒然草の作者の肺腑に接して行かなければならぬ。

兼好の歌風には、おそよ、三種の別が立て得られる。それを、極く大まかに言へば、二條家風・新古今調および古今調（西行歌風の一面）の三方面とすることが出来る。

さて、二條家風に屬するものは、縁語懸詞の小さい技巧に捕はれたもの、宗教的題詠の故に歌調の著しくすくんでゐるもの、及び一般に散文的調子のものである。この種に屬するものが全體の半數をも超えてゐるが、多くは拙作である。

世の中危ふき様に聞えしも、程無く立ち直りにしかば中納言殿に

世々を経て治むる家の風なれば暫しぞ騒ぐ和歌の浦浪

先づ、この作は、大覺寺統の方々が南都におち給ひ、二條家の基礎も一時危険に類したけれど、事故

無く終つた時の祝意を表したものである、しかし、二條派が次の如き作風をのみ生むものであつたら、必ずしもその普及をわたくしは喜びたくない。

いかだを

大井河つなぐ筏もある物をうきてわが身の寄る方ぞなき

五百弟子品の心を

あま衣なれにし友にめぐりあひてみぬめの浦の玉藻をぞかる

深夜夏月

更くる間も有りけるものを宵ながら明けぬと聞きし夏の月影

世の中思ひあくがる、頃、山里に稻刈るを見て

よの中をあき田かる迄なりぬれば露もわが身ををき所なし

何れの歌も、あまり言葉の技巧に捕はれすぎてゐるではないか。それがあまりに嫌味を與へてくれる。その他に、なほ寄嶺戀・寄湖戀・寄野戀・寄橋戀等、題詠的戀歌が、はなはだ多い。また物名の作などもある。しかし、これらの作に、立派なものがあらう筈が無い。

兼好の歌には、一般的に、主觀的傾向のものが多し。そして客觀的・叙景的のものが、きはめて少ない。兼好は、後に述べる様に、鋭利な觀察眼を持つてゐる、さりながら、かれは、觀察の結果をそのまゝ

に投捨て、おき得なかつた。どうしても、主観で染めあげせずには居られない性分を持つてゐた。この傾向は、頓阿や淨辨などにも見られるものである。そこには後宇多上皇の御製に伺ひ得られる如き弾力性が、まるで無い。

石山にまうづとて曙に逢坂をこえしに

雲の色に分れもゆくかあふ坂の關路の花の曙の空

嵐の山の花をみて

大井河下す筏師早き瀬にあかてや花の陰を過らん

侍從中納言殿にて人々題をさぐりて歌よみ侍しに、木殘雪。

山深み梢に雲や残るらん日陰に落つる椋の下露

風前夏草

うち靡く青葉涼しく夏の日のかげろふまゝの風立ちぬなり

五月雨

最上川早くぞ優る天雲の上れば下る五月雨の頃

しかし、これらは、差し當つて難のない方である。相當にリズムも出てゐるし、しつかりした詠振り

でもある。思へば西行の自然を詠出した歌も主観的着色を免れ得なかつたのであるが、しかし、その主観たるや一見、西行をすぐ髣髴せしめる極めて個性的のものであつた。リズムにも闊達自在の西行の姿が溢れ出てゐた。兼好の歌人としての生命が、西行に到底匹敵されないのはこの點である。兼好の歌に表はされた主観は、陳腐に過ぎてゐる。紫式部は、小説家であつた。西行は純歌人であつた。かくてわが兼好は、隨筆家であつたことを、こゝにもわれ／＼は思はざるを得ないのである。

さりながら、兼好は當時四大歌人の一人と數へられたに就ては理由がなければならぬ。これ迄、かれの短所をのみ指して來たわたくしも、またかれの晩年、圓熟した時代の詠吟に接すると、自ら頭をさげざるを得なくなる。そこには、やつぱり西行の長所と符合してゐるものがある。それは古今調と概括すべきであるが、すべてが、ありのまゝの生活を、まじめに歌ひ得たものであつた。しかも、そこに萬斤まんきんの力が籠つてゐる。そのこと／＼は、詞書きを見ても分る様に、すべて五十歳前後の作とのみ言つていい。

その頃、やむごとなき人の、訪らひおはしたるに

訪はれぬる露の命はつれなくともろきは袖の涙なりけり

冬の夜、荒れたる所の簀子に尻かけて、木高き松の木の間より、

隈なく洩りたる月を見て、あかつき迄物語りし侍ける人に

思ひ出づや軒の葱に霜さえて松の葉分の月を見し夜は

たのもしげなることいひて、立ち別るゝ人に

はかなしや命も人の言の葉も頼まれぬ世を頼む我かは

さだめがたく、思ひ亂るゝことの多きを

あらましも昨日に今日は變る哉思ひ定めぬ世にし住まへば

山家

山風のたまらぬ床も生まれけり身を習はしの庵結びつゝ

すべてに何となく、床しい詠振りがあつてはないか。素直な歌ひ振りがあつてはないか。なほ、この他に光つたかれの所詠は二三十首ばかりあるが、それは本論の中に隨時挟み得るであらう。なほ、徒然草に、

「降れ〜粉雪、たんばの粉雪」といふ事、米搗き、篩ひたるに似たれば、粉雪といふ。「溜れ粉雪」

といふべきを、誤りて「丹波の」とは云ふなり（下略）——百八十二段

と、言ふ様な童謡に關した話も出てゐる。これらにも、歌謡に對する兼好の觀察の態度が覗はれて面白けれど、それもかれがいかに些細な點に、よくその注意を向けたことを語るのみであらう。惜しいかな、そこに情熱の奔放の跡を辿りうる性質のものはない。かれには嫡妻と稱すべきものもなか

つた。されば、かの西行の如く、年若く家庭の幸福にまどろむことも許されなかつたとはいへ、あまりにかれの青年時代は、平板で凡庸に過ぎてしまつたのではあるまいか。それは、理的なかれの性格を語ると共に、歌人的天賦の乏しい事實をも示すものである。

文の血を受けながら、武士となつた兼好は、一度は矛と盾を手にしたものの、やがて文界の人に立返らなければならなかつた。かれ兼好は、和書や漢書を涉獵してゐる間に、いつか幻想に耽る子となつてしまつたのである。かれには、矢叫びの絶えしない間にも、王朝の幻がまづ先きに立つた。海道を武家が往還するに急がしい世にも、六朝の盛時が忍ばれた。わが文學者に、兼好ほどよく延喜・天曆時代の雰圍氣を感得した人は少なからう。かれは、徒然草中に、源氏物語についてはわづか二段、枕草子については三段ほど、筆を觸れしめたに過ぎないが、徒然草全篇を歴してゐる描寫の妙趣は、何物より王朝憧憬の心を傍證してくれる。第十九段の「をりふしの移り代るこそ物事にあはれなれ云々」の一段を繙讀してゆくと、「言ひ續くれば、皆、源氏物語・枕草紙などに、こと古りたれど、同じ事又今更に言はじともあらず云々」と、秋と冬との叙景の間に、唐突な挿言が出てくる。熟考すればその場合における、かれの心理もよく諒解されるではないか。思ふにかれは、この一文を物しながらも、源氏物語や枕草紙中の自然描寫が、あたかも次々に寄せ來る波のやうに記憶に上つて來たのであらう。

そして、かれ自身いつか御堂關白時代の人の心になりゆかうとしたのではあるまいか。しかし、野卑な武家時代の町民、武骨な下侍などの亂棒な口遣ひは、程もなくかれの甘夢を破らずには居らなかつた。かれは、王朝と現實と、そのあまりにも懸け隔つた事實を見せつけられた時、尠からず驚いた。かくてかれは、いよ／＼、分秒を惜しんで甘美な追憶と憧憬の中に、すべてを忘れ、王朝の夢に生きようと努めるのであつた。

ひとり、燈火のもとに、文をひろげて、見ぬ世の人を友とする事こそ、こよなう慰さむわざなれ。

文は文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子の言葉、南華の篇。此の國の博士どもの書ける物も古へのはあはれなる事多かり——十三段

しづかに思へば、萬づ過ぎにし方の戀しきのみぞ、せん方無き——廿九段

此の短かい言葉にも、兼好の書を愛讀する性癖、考古癖が、いかにもよく躍如として出てゐるではないか。かれは貪るやうに、古酒を傾けてその陶酔を貪つた。四月の賀茂大祭の時、飾つた葵の葉が、どうかすると秋迄、簾などにそのまゝ残つてゐることがある。その枯葉による祭の追懷——そのほんの些細な事にさへ、兼好は殊の外喜びを見出した(百廿八段)況んや、末世とは言ひながら、當時の九重の奥や、神祭し給ふ齋宮の用語が、昔の習ひに従つて、神さびてめでたいのを、兼好は無上に樂母しく思ふのもあつた。(廿三段廿四段)「文の言葉などぞ、昔の反古どもはいみじき。たゞいふ詞も、

口惜しうこそなりもてゆくなれ(廿二段)と、かれの鋭鋒は、現代語の野卑な點の上にも向けられる。すべてかれは、紫式部と同じく、「世づく」といふ事を批難してゐる。かれには、流行を追うて世間流になることが何より不快だつた。(廿三段)例へば、木立も物古らず、殊更らしい庭樹など植ゑた「今めかしく、さら／＼か」な建築など、かれの最も撥斥したもので、これを「見るも苦しくいと佗し」とさへ言つてゐる。(十段)いかに當時の名工が美しい調度を作り出そうとも、かれにおいてそれは、到底時代のついた古代の器の美に比較すべくもなかつたのである。(廿二段)

何事も、古き世のみぞ親はしき。今様は無下に卑しくこそなりゆくめれ。(廿二段)
従つて、そこに、

改めて益なき事は、改めぬをよしとするなり。(百廿七段)

といふ結論が見出だされてくる。この二節の言葉こそ、かれの尙古癖、懐古的の性情を、何物より自證するものである。かれは、所謂ハイカラなるものを心から嫌つてゐた。

こゝに、新と古との第二の對立がかれの胸裏に窺はれる。

さて、復古思想や反動思想などは、ある意味で公家精神の基調だと言つていい。徒然草二百四十餘段の中に、四十段近くにも亘つて、有職故實に關した叙述がある。これは、讀者のかならず氣付く點であり、同時に不審にする一事項だらうと思ふ。北山抄・西宮記(百九十六段)延喜式(百九十七段)律

令(百八十三段)政治要略(百九十八段)など、到る所に、古い斯學の書名が、麗々しく出てくる。しかしこれも、時代の一思想であり、同時にまた、かれの尙古、考古の性癖のためだとすれば、ほどそれが會得されるだらう。先の「降り／＼粉雪」の童謡においても、「たんば」の原詞が「溜れ」であつたことを極めただけでは、なほ、満足されず、「讃岐典侍日記」によつて、この歌の、すでに宮中にさへ謠はれてゐたといふ考證を附け加へずには居られなかつた心理がやはりそれである。しかもそれには、懷舊的情味を超えて、すでに學究のための研究となり切つた程度のものである。しかし、かれが、單なる骨董癖を以て、すたれた有職をかつき出して時代の人に強制しようとしなかつた點だけは、辯護の必要があらう。かれは、必ずしも、盲目的に古習に泥みはしなかつた。さうした場合にも、かれの觀照性は働いて、古法の當と不當とを明瞭に選りわけてゐるのである。

例へば、急場に當つては、光親卿が供御を食ひちらしたまへてその衝重を御簾の中に差し入れて退出したとか(四十八段)下毛野武勝が、雉の進物を持參する仕方を述べる話の中にある、雉の羽の一部を先方の御所の欄干の所に落すといふ如き習ひ(六十六段)又、御前の火鉢に、火を置く時は、火箸にて挟まず、土器から直ちに移せよといふ戒(二百十三段)の如き、何れも無意味な慣例ではない。それは多數の人の様々な經驗の結晶して成立したものである。もつとも、多くの慣習の中には、全然根柢のない盲從的のものも交つてゐる。兼好は、これらに就ては誠に無遠慮な酷評を浴さしてゐる。六十三段に

あいて、後七日の御修法に、武士を警護せしめるに至つた例を難じてゐるごときその一例にすぎない。

さらに、またかれは、祕事口傳についても、これを無遠慮に摘發した。和歌の秘傳などに對する態度がそれである。われ／＼は、そこに、いよ／＼兼好が單純な因襲の人でないことを知り得るのである。すでに前掲の十三段の引用においても分るやうに、兼好の書籍の涉獵は、多く漢學のものに及んでゐた。これは、紫式部に近く、西行に遠いかれの性格だと見ることが出来る。

萬づの事は、月見ること慰むものなれ。

ある人の「月ばかり面白き物はあらじ」と云ひしに、又ひとり「露こそ、あはれなれ」と諍ひしこそをかしけれ。折に觸れば何かはあはれならざらん。月花は更なり。風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水の景色にこそ時をも分かずめてたけれ。

沅湘日夜東に流る、愁人のために止まる事暫らくもせず。

と云へる詩を見侍しこそ、あはれなりしが。

嵇康も山澤に遊びて魚鳥を見れば、心たのしむと云へり。人遠く水草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰さむ事はあらじ——二十一

段 文選・白氏文集・三體詩などの句の聯想が、胸を突いて出てくるところ、源氏物語や枕草紙の場合に劣らない。しかも、沅湘日夜や嵇康山澤云々の句は、兼好の趣味をびつたりとよく示してくれてゐる

はないか。それは、卅段の「人なきあとばかり悲しきはなし」の最後に「さるは、後訪ふ業も絶えぬれば、何れの人と名をだにしらず、年々の春の草のみぞ、心あらん人は哀れと見るべきを、はては、嵐に咽びし松も千歳を待たて薪に碎かれ、古墳は鋤かれて田となりぬ。その形だに無くなりぬるぞ悲しき」と、その中に文集と文選を借り來つた巧妙な筆致と好一對をなしてゐる。その他、徒然草中には、漢書（百七十五段）三國史（百廿九段）等史書の故事を適宜に案配し、曲禮（百卅一段）書經、老子（百廿段）の章句を巧みに引用して、文に力あらしめてゐるものも尠少でなく、論語に關しても、七段に亘つて見えてゐる。もつてかれが如何に、故事故語を使驅するに長けてゐたかを知り得よう。さらに、かれの行文の神妙さに思ひ至れば、それには暫し筆をすて、嘆賞の聲を發せしむるものが多い。惟ふに、兼好は、源氏物語・枕草子を若い時代に、限なく恣讀した人ではなからうか。かれは、若くしかの西行の様に、言々句々盡く詩語となるといふが如き、歌人では無かつたかも知れない。しかし、かれが、青年時代を藝術から遠ざかり、武にのみ走つたものとは肯んぜられない。それは、かれの素質そのものがよくそれを立證してゐる。ここから、かれが散文的文學に興味を抱いたであらうといふ推察は、極めて妥當になると思ふ。

徒然草のもつリズムと、兼好の觀照方との關係といふ大きい問題は、こゝに措いて、まづ、かれが漂泊の身になる頃までの生活について、出来るだけの探究を重ねて見ることにしよう。

上皇の御落飾なつた時、兼好は廿五歳だつたが、その翌年には後二條天皇の崩御があつて、十二歳の花園天皇の御即位を見るに至つた。花園天皇も十二ヶ年に亘つて御在位されましたが、すべてその前後、天下に寧日無く公武の間にも、陰惨な氣が漲りきつてゐた。さて都に、興福寺僧徒が神木を石清水の神人が神輿を奉じて寄せ來る噂が立つと、邊土からは元兵再寇の警報が傳はつて來た。鎌倉にあつては師時、貞時が相ついて歿したのみならず、大火が數年を亘りて再發した。藤原爲兼は、北條高時のために六波羅に引致される。兼好が兄と共に神詠部類を編して、花園天皇から左兵衛尉（尊卑分脈の左兵衛佐は誤記）を頂いたのは、かれが廿七歳（延慶二年）の交と傳へられてゐるが、かれはその間もなほ後宇多法皇の院にも出入して居つたものらしい。

しかるに文保二年、後醍醐天皇が皇位を御繼承なし給うた翌々年、かれは辭官して、一兼好になり下つたのであつた。寵愛を被つた上皇の三度執政し給ふ幸な時代に至つて、享年既に四十歳に近い兼好は、左兵衛尉を振りすて、一漂泊者となり至つたのである。かくて法皇が、正中元年六月廿五日崩御なると共に、「世の中を秋田刈るまでながむれば露もわが身もあきどころなし」と、いしくも悲しい歌をのこしてかれは、四十二歳の壽齡で、横川において出家を遂げた。俗名兼好をそのまゝ法名として兼好と稱したのである。

出家前の兼好について、われ／＼はかれの遺作を通じ、更に多少深入りすることが出来る。兼好自讀七條の最後の話に、

一、二月十五日、月明き夜更けて、千本の寺に詣てて後ろより入りて、ひとり、顔深く隠して聴聞し侍しに、優なる女の姿、匂ひ、人より殊なるが、分け入りて膝にゐかれば、匂ひなども移るばかりなれば、便悪しと思ひて、すり退きたるに猶ゐよりて同じ様なれば立ちぬ。其の後ある御所様の古き女房のそゞろ言いはれしついでに「無下に色なき人におはしけりと見落し奉ることなん有りし、情無しと怨み奉る人なんある」と、宣給ひ出したるに「更にこそ心得侍らね」と申して止みぬ。此の事後に聞き侍しは、かの聴聞の夜、御局の内より人の御覽じ知りて、侍ふ女房を装り立て、出だし給ひて、「便よくば言葉など掛けんものぞ、其の有様参りて申せ、興あらん」とて、計り給ひけるとぞ。——二百三十八段

これは、どうしても院に仕へてゐる時代の出来事としか考へられない。思ふにそこでこの小話は、兼好が異性に對してそれまで生真面らしくしてゐたこと、今一つ、兼好の心持は、兎角く異性に誘惑されがちであつたが、かれの自制力が、ついにさうした試練にも打ち勝ち得たこと、の二つの事實を語つてくれてゐるものではあるまいか。

異性の魅力に弱かつた兼好の心——わたくしは、何等の躊躇もなく、この一句を記す。この小逸話

においても、假に兼好が性の問題を超越し得てゐたなら、(考へ様によつたら自讃といふさへ不思議な) かゝる小事件を麗々しく描き出す譯がないではないか。およそ徒然草中に、男女のことについて筆を費した話が、十二ヶ所にある。例の通り、その觀察は互に矛盾もし、また幅濶もしてゐるが、各々について兼好の面目が躍如として出てゐる。あるは、戀愛を是認し、あるは、女性の弱點を列擧してこれを罵り、また、戀して相逢はない心の妙味を述べて行く。

しかし、作者の出家前をもつとも痛々しく想像せしめるものは、つぎの廿六段の短い叙事であらう。風も吹き敢へず、移ろふ人の心の花に慣れにし年月を思へば、あはれと聞きし言の葉毎に忘れぬものから、わが世の外になりゆく習ひこそ、逝き人の別れよりも優りて悲しき物なれ

されば白き糸の染まんことを悲しび、路の衢の別れん事を嘆く人も有りけんかし
堀河院の百首の歌の中に、「むかし見し妹が垣根は荒れにけりつばな交りの董のみして」寂しき景色
さる事侍りけん

かゝる失戀からうけた悲嘆こそ、作者自らの體感したものでなければならぬ。それは何といふ飾りのない表現だらう、何といふ自然的表現であらう。それは、まことに、兼好自身の追憶が、ひとりてに齎した獨語である、心の眞の相の複寫である。眞實との争ひには、これに克ちうる何物もない。われ／＼はこの短かい一章を再讀三讀、いよ／＼いひ知れぬ眞實の妙味に盡感されざるを得ないのである。

兼好傳のあるものは、兼好が伊賀權守橋成忠の女（中宮少辨）に對する失戀哀話を傳へてゐる。西行と堀川局とのほかないロマンス——傳記者は、この兼好と一國守の女（やはり後宇多院奉仕の女房）との關係を、そのロマンス以上にも果敢無いものとして語り傳へてくれる。すなはちその成忠の女は、父の赴任と共に伊賀につれ行かれたまゝ、程もなく、その地において黄泉へ旅立つてしまつたのであつた。しかも兼好には、ついに戀の心の一は、しも現はさないまゝで。

人にもいのひそめて

通ふべき心ならねば言の葉をざりとも分かれて人や聞くらん

深草に通ひし頃曉砧打つを

衣うつ夜寒の袖やしぼるらむ曉露のふかくさの里

つらくなりゆく人に

今更に變る契と思ふまではかなく人を頼みけるかな

たのもしげなること言ひて、立ち別るゝ人に

はかなしや命も人の言の葉も頼まれぬ世を頼む別れば

わするゝ戀

我ばかり忘れず慕ふ心こそ慣れても人に習はざりけり

これらは、何れの年何れの所でかれの詠じたものかはわからないが、何れも兼好法師集に見える戀歌である。これら詠歌から與へられる韻律感も、前掲の文のそれと全く、同一のものであるまいか。それは、われ／＼に對し、あまりにも、打碎かれた淋しい心の相のありのまゝを見せてくれる。

古來、徒然草を釋き、作者兼好論に筆を及ぼした書は、源氏物語の註釋書に比してなほ多數に登るかもしれぬ。しかるに、そのほとんども、兼好を聖賢になぞらへ、徒然草を勸戒の書としてしまつたことは、どうした心理からであらうか。伊勢貞丈の如く、兼好をたゞの凡人と見る説（洗革記）は、無論容れ難い暴説であるが、まづ徒然草着筆中の兼好法師は、人生における戀愛の價値を認め、それに關し一家言を持つてゐた人であつたことだけはこゝに言明してよい。

徒然草を、最初より繙讀してゆく者は、まづ一枚目に、容貌美の解説をきき、さらに數枚ならずして、「萬づに甚優じくとも、色好まざらん男は、いとさう／＼しく玉の卮の當なき心地ぞすべき」と、戀愛の情味を経験しない男性を、眞向から難じてゐる文に出遭ふであらう。「露霜にしほたれて所定めず惑ひ歩りき、親の諫め世の譏りを包むに心の暇なく」かれは、まことに戀愛美論者のよい味方である。しかし、なほ「會ふさ離るさに思ひみだれ、さるは獨り寝がちにまどろむ夜なきこそをかしけれ」と讀み下してゆくと、どこ迄も美しいものを美しいとして傍觀してゐる物靜かなかれの姿が思ひ描かずには居られぬ。その結びである「さりとして、ひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず

思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ(三段)との名言を、讀みちはると、更に、かれの持つ深い用意のほどが知られてくる。兼好は決して鹿爪らしい道學者ではなかつた。たとへば「四十にも餘りぬる人の、色めきたる方、自ら忍びてあらむは、いかゞはせむ」(百十三段)など、これらにも、かれが四十歳の人にさへ好色を許し認める寛大さが見えてゐるではないか。さらに兼好は、さかんに、寄雲戀四首、恨絶戀一首、いのりてたづぬる戀一首など、題詠的の戀歌をも作つてゐるのである。一例をあげると、

寄野戀

契りあらば又や結ばん一夜ねし新手枕の野邊の若草
と言ふ様なものもある。また、

こよひと頼めける男のあらぬ方へまかりければ、女のみませ侍りし

はかなくぞあだし契を頼むとて我ためならぬ暮を待ちける

といふ如き、代作の戀歌さへ集中に混つてゐる。假に、傳説のやうに、事實、兼好が高師直に戀文の代作をしたとしても、われ／＼は何も怪しむことはない。かれはかく同輩に戀歌の代作をしてやつたやうに、平氣で師直のために戀文の代作をしたのであらう。百七十三段に小野小町に關する考證が數行あるが、兼好は小町をたゞ一枝の花と見てゐる。戀は、かれにとつて、人生を彩る花と思はれた。二百四十段の一文などには、自由戀愛論者の如き態度さへ覗はれるではないか。

しかし現實生活は、永久に傍觀的態度のみを許さない。「誠に、愛着の道その根深く源遠し。六塵の樂欲多しと雖も皆厭離しつべし。その中に只かの惑ひの一つ止め難さのみぞ、老いたるも若きも智あるも愚なるも變る所無しとぞ見ゆる」(九段)書中に、色欲・愛欲の根強さに就て説いたものは方々に見えるけれど、この一節の如きは、全く作者の肺腑から迸り出た儘のものらしい。しからば、かゝる情欲の難關をかれは、いかに切りぬけて行つたか。

思ふに、兼好は、性の蠱惑を覺つた結果、却ていたづらに女性から離れようとは努めなかつたものらしい。そこに、かれの獨創がある。兼好主義がある。

久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て通を失ひけんは、眞に、手、足、膚などの清らに肥え、あぶらづきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし——八段

何といふ強い肉感の表はし方であらう。

女は髪の出度からんこそ人の目立つべかめれ。(女の程、心ばえなどは、言葉うちいひたる氣配にこそ物越しにも知らるれ(下略)——九段

何といふ微妙な女性に對する觀察であらう。これだけで、作者は肉の蠱惑のいかに強いものであるかを充分言ひつくしてゐる。しかるに、かれは、また百卅七段に及んで、

萬づの事、始め終りこそをかしけれ。男女の情もひとへに逢ひ見るをばいふ物かは。あはて止みに

し憂さを思ひ、響なる契をかこち、長き夜を獨り明かし、遠き雲井を思ひやり、淺茅が宿に昔を忍ぶこそ色好むとは言はぬ——百卅七段

と、好色、即ち戀愛の眞義をかく述べてゐるのである。なほ他に一段。

しのぶ浦の蟹のみるめも所せく、暗部の山も守る人繁からんに、わりなく通はん心の色こそ、淺からずあはれと思ふ節々の忘れ難きことも多からぬ。——二百四十段

さて思へば、何れもそれはかれが、肉欲を轉換して、氣分化せしめようとしてゐるものではあるまいか。かつかれ自らがその實行者であつた。「妻」といふ者こそ、男の持つまじきものなれ云々（百九十段）の所論も、結極、この要求に所以したわけて、兼好自ら、萬人に妻帯を止めしめようとしたものでないこと、論ずる迄もない。純ロマンチストの態度に立てば、戀人を正妻として同棲し、戀人をして主婦らしく振舞はしめることの、幻影の破壊に終るべきことは、あまりに當然の歸結である。百四段の描寫のうまみは、徒然草を一讀したものの、誰しも忘れ難い所のものである。それも兼好の胸にもつ一幅の幻影の印象描寫だと言ひ得よう。時は初夏の朧夜、荒れはてた宿に女を尋ねて一夜をあかす戀人同志及周圍の模様は、王朝の光景そのまゝである。最後を「隙しろくなれば、忘れ難き事など言ひて立出給ふに、梢も庭も珍しくすみわたりたる。卯月ばかりの曙、艶にをかしかりしを覺し出で、桂の木の大なるが隠るゝまで今も見送り給ふとぞ」と結んだ技巧は、清少の筆致よりもなほ優雅味に

富んでゐると評すべきか。戀愛の幻影化——兼好は、いつかさうした境地にまでさまよひ込んでゐたのであつた。現實の女性、さてつぎの兼好の現實的女性觀を見よ。

——女の性は皆ひがめり。人我の相深く、貪欲甚しく、物の理を知らず。只、迷ひの方に心も早く移り、詞も巧みに、苦しからぬことをも、問ふ時は言はず。用意あるかと思れば、又淺ましき事迄、問はず語りに言ひ出だす。深くたばかり飾れる事は、男の智慧にも優りたるかと思へば、その事後より現はるゝを知らず、素直ならずして拙きものは女なり（中略）只、迷ひをあるじとして彼れに従ふ時、優しくも面白くも覺ゆべき事なり（百七段）

これは何といふ女性に對する奇稽な皮肉觀であらう。兼好が出家前、異性との交誼が多かつたか、はたまた、さうでなかつたといふ疑問に就ても多少、これは解決の鍵となり得るやうに思はれる。

こゝに西行と兼好の比較——愛欲の情を根絶しようとして、苦しみあがいたのが西行のプロセスであり、（否定的）愛欲の心を、人間生活の中に、如何に生かすべきかに、思ひ悩んだのが兼好のプロセスであつたのではあるまいか。（肯定的）

世の亂れに亂れた果てとはいへ、兼好の時代は、上に英主後醍醐帝がましまし、朝廷に參議日野資朝の如き英傑があり、地には、新宗教が普及して、すべてに新國民精神の萌芽があつた。これを西行時代の武家的勢力の齎した新精神に比すると、なほ一層、大きく且つ強いものがある。かゝる時代思

潮が兼好の態度にも、より遅く出て来たものだとすれば、甚だ、これも面白い現象ではないか。

現存の西行の木像と、兼好の畫像とを比較する時、そこにわれ／＼は更に種々なる暗示を與へられる。それらの像は、或ひは實際と、かなり遠いものかも知れないが、しかし何と兩者の間には著しいコントラストが存すことであらう。兼好の畫像は、西行の木像に反して、如何にも僧正とも呼ぶに適して居り、その顔面・體軀は肥滿し、僧服をつけた手は印を結んでゐる。太い眉毛、親炙し難い兩瞳——その姿態全部には、ある氣むづかしさが漂つてゐる。前述のやうに、兼好の中には特殊の批評的精神が育んでゐたが、その傾向は、自ら、かれをして批評家的態度をとらしめるに至つたのではあるまいか。男女の交はりを稱賛しつゝ、「女にたやすからず思はれむこそあらまほしかるべき業なれ」と最後になほ戒めを以て結ばずに居られなかつた彼れである。第一段を見ても

ありたき事は、まことしき文の道、和歌、管絃の道、また有職に公事の方、人の鏡ならむこそいみじかるべけれ。手など拙からず走り書き、聲をかしくて拍子とり、痛ましうする物から、下戸ならぬこそ男はよけれ。

といふ様に始めから、心得書きを述べた彼れである。

しかし、かゝる態度が兼好において始まつたものでないことは附記して置きたい。王朝の殉情的精

神を超越しようとするあがきは、すでに前述の山家集の中にも見えた。十六夜日記・海道記等の日記紀行文、大鏡・今鏡・水鏡・増鏡等鏡物、保元・平治・平家等の戦記物等、それ／＼その中に批判的態度が見えるし、まして、方丈記・古今著聞集・宇治拾遺物語・今物語・古事談・續古事談等の隨筆傳説物には、著しく教誡的筆觸が視へる。十訓抄の如きは、まさに堂々と銘を打つて書かれた教訓ものである。

わたしは、こゝに新精神の根據を深く尋ねる餘裕はないけれど、ある論者の如くこれを單なる反動思想としてのみ解釋するに異論を挟むものである。この點については、西行論の際も、多少觸れて来たことであるが、數百年間における人口の増加と、地方産業の發達とは、どうしても組織上に革命を必要としたのであつた。その制度の不備といふことが、識者に認められる程それだけ、社會の大小事が批判的眼識によつて見られてくる。それは、大鏡の中に出て來て翁の史談に差出口をする青侍の態度にも現はれてゐる。史書それ自身がすてにある種の批評書となり來つたのであつた。

さて批判の標準をなしたものに關しては、所謂、内學と外學——佛學と漢學とを、まづあげなければならぬ。王朝の始めにも、空海大師の如き、學の古今内外に通じた博學者もあつたけれど、平城天皇嵯峨天皇の漢學勃興の御代と雖も、學的精神の民族的普及の程度は極めて貧弱のものであつた。天曆時代の如く、婦人にして史記を讀み白氏を誦するが如きは、到底望み難い事情にあつた。しかし、大陸の制に従つた考試の方法と、太平安逸の結果文物の流布と、更に、天台宗延曆寺の學的精神の尊重の思

想と——この三つが混淆して、儒學と佛學とを王朝末期には意外に地方に迄普及せしめたのであつた。その當時、地方にあつて、地方文化を形成しつゝあつた人々には、賜姓された皇族の苗裔が多かつた。かれらは大宮人氣質に加ふるに、武道的精神をも養成してゐた。また、かれらのある者は、地方に古く居住する豪族乃至、鎌倉武士と血縁を結んだものの子々孫々であつた。かれらの生活規範は、自らおのづか在京の公家と異なるものがあつて、かれらが上京の機を得た後にもその生活様式はそのまゝに保存されて行つた。これ、すなはち武士道の基礎をなすものであつて、儒佛二教に新たに對立し得た新道徳である。しかし武士道は、儒教の應用とも見るべき程、儒學を取り入れたものであつたに係らず、わが文化史上影響するところは深大であつた。その精神は、上、幕府の政治の骨子から、下、一青侍の日常生活にまで残らず影響していつた。これは、東鑑中の諸記録の、すてに明示するところである。新文化の規範は、紫式部時代の一般が、形式的、虚飾的傾向を存してゐたに反し、専ら内容的、實際的であることをその旨としてゐる。西行時代においても、すてにかゝるの兆候はあつたけれど、未だ明確でなかつた。それが、北條氏の施政方針には、嚴平とした形を取つて現はれた。兼好時代は、むしろ、やゝそれが弛緩して、再び王朝精神の復古を見初めたのである。

國の爲め、君の爲めに止む事を得ずして爲すべき事多し(百廿三段)

と言ひ、善政思想を説く兼好の君臣問題も、かれ獨特の立論で無いことはこれを知り得られよう。

——兼好は吉田の家に生れたる人なれども、巫學を以て名を稱せられず。法師に成たれども、佛學を以て名を稱せられず。又、佛法の徳行を以て名を稱せられず。唯、歌の上手なるを以て、世に名を稱せられたるのみなり。(下略)——安齋隨筆

さてこれに依れば、兼好はいかにも名譽を追求して限なかつた者の様に考へられる。卅八歳にて辭官したのが、假に佛徒として名を得ようとするのであつたとしても、かゝる下根の人に、十年後徒然草の如き大著がどうして大成され得ようぞ。わたくしは、兼好の青年時代を説くに、始めに戀愛と兼好、後に批判的精神と兼好とに關して述べたといへ、こゝに必ずしも、かれが愛慾の情と批判性の矛盾から、辭官出家したといふ結論を引き出さうとするものではない。

しかし、この場合において、兼好の世俗的希望を抛棄し得た態度と、西行の青道心になり得た態度とを比較して頂きたい。前者は、卅八歳でなほ無妻の左兵衛尉であつたし、後者は、妻子ある身で、いまだ廿三歳、すてに檢非違尉の榮官をも與へられようとした境遇であつた。兼好の現世的執着は、西行のそれに比して劣るとも、優るべき性質のものでは到底なかつた。しかし、それだけ青年的の一時的情熱や、輕卒な行爲からの出家でなかつたことは斷言され得る。分別盛りの年齢として、辭官するにはかなりの果斷を要したことも、この場合臆測することが出来る。われ／＼は、家集から、かれの詠歌をこゝに選り出して見ると、

世を反かんと思ひ立ちし頃秋の夕暮

そむきては如何なる方に眺めまし秋の夕も浮世にぞうき

さだめがたく思ひ亂るゝ事の多きを

あらましも昨日は今日に變るかな思ひ定めぬ世にし住まへば

ともすれば鴉の浮巢の浮きながらみかくれ果てぬ世を嘆くかな

とにかくに思ふ事のみあれば

盡きもせぬ涙の玉の無かりせば世の憂き數に何をとらまし

本意にもあらで、年月經ぬることを

うきながらあれば過ぎゆく世の中を經難き物と何思ひけむ

つぎは、辭官後、修學院に籠つてゐたと傳へられてゐるから、その時の詠歌かと思はれる。

修學院といふ所にこもり侍りしころ

遁れても柴の假庵の假の世に今幾程か長閑かるべき

逃れ來し身にぞ知らるゝ憂世にも心に物の叶ふ試しは

身を隱すうき世の外は無けれども逃れしものは心なりけり

如何して慰さむものぞ世の中をそむかて過ぐす人に問はゞや

そこには。何等か恐ろしい現實生活における壓迫から遁れ出て、暫しの隠れ場を見付けたものの様な態度が見えるではないか。西行の場合の如き悲劇的でないだけそれだけ痛々しさが感ぜられる。しかし、辭官と出家との間には、五年近い日子がある。かれは、その間、海道を下つて鎌倉比企が谷の妙本寺にゐたり、また、武州金澤に住んでゐたりした。(集中の歌の調書による)しかるに、元享元年法皇は、萬機の政を天皇に御託しあつて、その翌年、嵯峨の大覺寺に仙洞を移し給うた。兼好は、その頃すでに歸京して(或ひは、法皇に呼び返されて)仙洞に伺候してゐたが、正中元年(兼好四十二歳)法皇の御崩御を機として、出家の志を遂げたのであつた。例の物に係はぬ性質から、兼好を音讀して一兼好法師になり切つたのである。それも、辭官した時すでに遁世者の氣持でゐたのを、この機會に圓頂緇衣の身となつたまでの事であらう。しかし、かれがいよいよこゝまで來るには、幾多の豁谷がその途上になければならない。傳へられるが如く出家の理由は、一神官を望んで與へられなかつたが如き單純な原因からでは無かつた。まして、貞徳抄や吉野拾遺中の松翁の話の如く、法皇の崩御のみからでもあるまい。(法皇が兼好に殊更御愛顧を給うたといふ如き資料はこゝに残つてゐないのである)

春のころ哀傷

佗び人の涙に慣るゝ月影は霞むを春の習ひとも見め

見し人も無き古里よ散りまがふ花にもさぞな袖はぬるらむ

歸り來ぬ別れをさても歎くかな西にとかつは祈るものから

これは、いつの頃いかなる場合の詠とも知れないが、かれ兼好の出家前の胸には、かくの如き濃い哀愁が漲つてゐたのであらう。しかも、眞理を求める心は鑽石のやうに強い。観察し、觀照し、自照し、批判する

人事多かる中に、道をたのしぶより氣味深きはなし——百七十四段

これは、かれの瞑想が、最後に、かれを、恆に拉してゆく結論であつた。この一語——また何といふ強い表現であらう。たのしむといふ述べ方も、氣味といふ表はし方も、實にいゝてはないか。兼好の個性が、そのままに現はされてゐる。そこにはまた

世に従へば、心、外の塵に奪はれて惑ひ易く、人に交れば、言葉、よその聞きに隨ひて、宛ら心にあらず。人に戯れ、物に争ひ、一度は怨み、一度は喜ぶ、その事定れる事なし。分別濫りに起りて、得失止む時なし。惑の上に醉へり、醉の中に夢をなす。走りて急がはしく、ほれて忘れたる事皆かくの如し、未だ誠の道を知らずとも、縁を離れて身を閑にし、事に預らずして心を安くせんこそ、暫らく楽しむとも言ひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸縁をやめよとこそ摩訶止觀にも侍れ——七十五段

といふ様な消極的理論もそこに手傳つて來たからであらう。かの、「心更に、起らずとも佛前にありて鈴を採り、鐘を採らば、怠る内にも善業自ら修せられ云々」(百五十七段)の事、理歸一の説も面白いが、かゝる兼好が、散亂の心ながら繩床の上に坐さうと身を挺したのは、當然の行き方と見なければならぬ。

顧ると、天下の風雲急を告げる様々の兆は、京師の間にも漲つてきた。元享元年、御醍醐天皇御親政と共に置かれた記録所其他の制は、やがて中興の大業の遂げられる豫報であつた。御宇多法皇の崩御は、公武の背馳を一層促進する機となつて、その年すてに、藤原資朝・同俊基の執へられて關東下向の悲劇を生じ、翌、正中二年には資朝流罪(佐渡)を見るに至つた。帝は、北條高時を責め給うたが著しい效果なく、嘉暦二年(兼好四十五歳)の如き高時咒咀の事さへ宮中に行はれ始めた。鎌倉軍入京といふ元弘の大亂は、實に、その後四年のことに屬してゐる。

紫式部・西行は共に、數奇な時代に生れ合はしてゐるが、兼好の時代も、またエポックメイキングの時世であつた。兼好は、湊川合戦の時、五十四歳、四條畷合戦の時、六十六歳の老軀を携へてなほ在世してゐたのである。北朝に對する南朝の存立は、武家に對する公家の最後の反噬と考へることも出来る。兼好は當時、京都附近にあつて、北朝に恩顧を被つてゐたとはいへ、變り行く世相、移り行く權勢の、夢幻にも似た慌しい有様を、痛々しい氣持で見つめずには居られなかつたらう。かうした所は、人の産む時代の存すると共に、時代のつくり出す人といふことを、しみじみと思ひ見ずには居

られない。

現實の様々の痛手に傷き、悲しんでゐる人々に、如何に、盡させぬ自然界の眺めが慰安になるか——われ／＼はこの實例を、最もよく西行に見ることが出来た。寂寥と悲しみは、自然の真相を觀照する鍵であるといふ言葉は決して、誇張ではない。出家當時の兼好の淋しみは、かくて、かれの自然觀がよく傍證してくれる。

吉野拾遺の記事によれば、兼好は木曾に隱遁したことになつてゐるが、その後暫らくの間、かれもこゝやかしこと流浪して、自らの安住地を求めかねてゐたものらしい。西行の出家した翌年、保元の大亂が兆したやうに、兼好の出家後程もなく、天皇の鎌倉追討の御陰謀が漏洩してしまつたのであつた。

世をのがれて木曾路といふ所をすぎしに

思ひ立つ木曾のあさぎぬあさ／＼のみそめてやむべき袖の色哉

かれは、木曾馬籠の東北、御阪（神阪とも）にゐたところ、偶々、國守が鷹狩にやつてきたために、次の歌をよんでその地をも逃れ去つたとも傳へられてゐる。（集には、「心にもあらぬやうなることのみあれば」との序のみあり）

こゝも復浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな

西行が東國に再度下行したに似て、兼好も再度（少くとも）阪東に下つてゐる。その折の詠歌は、十首一團になつて集中に入つてゐるが

みちにてよめる

峯の嵐浦わの波もさゝなれぬかはる旅寢の草の枕に

東國あづまにて宿のあたりより富士の山いと近う見ゆれば

都にて思ひやられし富士の嶺を軒端の岳に出てゝ見る哉

海うみの面おもてのいと長閑なる夕暮に鷗の遊ぶを

夕風に浪こそ見えぬ遙々と沖の鷗の立居のみして

武藏國金澤といふ所に昔住みし家のいたう荒れたるに

泊りて、月あかき夜

故郷の淺茅が庭の露の上に床は草葉と宿る月影

一年夜に入りて宇津の山をえ越えずなりにしかば、麓なる

あやしの庵に立入り侍しかど、この度は、その庵の見えねば

一夜ねし萱のまる屋の跡もなし夢か現うつかうつの山越え

以上、十首の中から、五首を抜萃した。

兼好は、西行や芭蕉ほどに旅好きだつたとは考へられぬ。かれは、自身を動かして環境の推移と共に、新しい刺撃を享受しやうなどはしなかつた。かれは、むしろ平靜な心を準備して、外象をすなほに直覺しようと待つてゐる人であつた。従つて、旅途における言々句々がそのまま、歌となり俳句となるといふことも無かつたのである。

兼好には、吉田とか双が岡とか横川とかにおよそ、暫してもわが身を置き得る住居があつた。さうして近郊遠郊をそこから尋ねて歩いてゐる。歌詞や、その詞書を見れば、嵯峨大原は言はずもがな、大和にしては初瀬、葛城を、但馬にしては但馬温泉を、攝津にしては藤江の浦を、紀伊にしては玉津島を踏破してゐることが分る。

花の盛り、但馬の湯より歸る路にて、雨にあひて

しほらしよ山わけ衣春雨に滴も花も匂ふ袂は

この一句にも風流人兼好の姿が、言外に現はれ出てゐるではないか。

いづくにもあれ、暫し旅立ちたるこそ目醒むる心地すれ。その邊こゝかしこ見歩き、田舎びたる所、山里などは、いと見慣れぬ事のみぞ多かる。都へ便り求めて文やる。「其事彼事、便宜に忘るな」など言ひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ萬づに心遣ひせらるれ。持てる調度まで佳きは佳

く、能ある人、形よき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ（十五段）

旅の心を全然、氣分化してそれを玩味してゐる人の様である。

紀行でなくて單に、妙味深い叙景文を篇中に求めるなら、かなり、それをあげることが出来る。「折ふしの移り變ること、物毎にあはれなれ」の段では、何と言つても冬の描寫が一番巧い。これは、秋の描寫に天賦的妙味を見せた紫式部と、面白い對照をなしてゐる。

さて冬枯れの景色こそ秋には、をさ／＼劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止まりて、霜いと白うおける朝、やり水より煙の立つこそをかしけれ。年のくれはて、人毎に急ぎあへる頃ぞ、又無くあはれなる。淒まじき物にして、見る人も無き月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細き物なれ……………

かかる文例は、なほ多い。しかし、四十三段「春のくれつ方」、四十四段「あやし竹の編戸の」などの描きぶりもこゝに見逃しがたい。

春の暮れつ方のどやかに艶なる空に、賤しからぬ家の奥深く木立物古りて、庭に散り萎れたる花、見過ごし難きを、差入りて見れば、前面の格子皆おろして淋しげなるに、東に向きて妻戸の良き程に開きたる御簾の破れより見れば、形清げなる男の年廿ばかりにて、打とけたれば心にく／＼のどやかなる様して机の上に文を繰展げて見むたり。いかなる人なりけん尋ね聞かまほし

さて、この一段、つぎの四十四段などの叙事的叙景文で分る様に、これらの行文には折々印象的筆致は交つてゐると言つても、どこ迄も客観的のものでないことが明言出来る。それは、たゞ、自然美の攝取抱擁の心そのまゝの流露である。

現世における一切のほだしは斷ち得たに、たゞ、折々に變る空の美しさのみ思ひ切れぬ——と言つた醉乎たる心の持主である世捨人。(廿段)

沉湘日夜東流去。不爲愁人住少時。といふ三體詩中の詩をあはれと思ひ、岩に碎けて清く流るゝ水の景色を、時分かず目出度く思つた人。(廿一段)

明月の夜の、雲に閉され、花咲く春日の雨に暮れゆくことにかへつてもものゝあはれを覺え、すべて肉眼によらず心眼にて美を感得しようとする人。(百卅七段)

暗き夜の綺羅裝飾に却て特殊の美を感じ、さしてこともない夜更けに、殊に清げに裝つて來るやうな者、また、かゝる時鏡とり出し顔つくろふ女に趣を感ずる人。(百九十一段)

秋月は限りなく目出度いが、月の虧ける點にも趣きを感じうる人。(二百十二段)

九月廿日頃の夜、客を送り出して、そのまゝ妻戸を少し細目にあけ、月に眺めいる女主人(三十二段)すべてかゝる人々は、兼好の好尚を現はしてゐる雅び人なのであつた。戀愛を幻想化し、美化し、氣分化して官能からの解脱を説いたやうに、兼好はこの自然愛にあつても、かく心眼、心耳で感ずる美の

存在を提唱したのである。

雪の面白う降りたりし朝、人の許言ふべき事有りて文を遣るとて、雪の事何とも言はざりし返事に「此の雪如何見ると一筆宣はせぬ程のひがくしからん人の仰せらるゝ事、聞きいるべきかは。返す

く口惜しき御心なり」と言ひたりしこそをかしかりしか。(卅一段)

これは、ずつと後の「花はさかりに」(百卅七段)の段であるがこゝと好一對であらう。

望月の隈なきを千里の外迄、眺めたるより、曉近くなりて待出たるがいと心深う、青みたる様にて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、打時雨たる村雲隠れの程、又なく哀れなり。椎柴白樫などの、濕れたる様なる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと都戀しう覺ゆ

れ……………
何と自然愛に透徹した人の心境であらう。兼好は、また、かうした逸話に譯もなく興趣を持つたのである。

次に、兼好と西行との間には、月と花との耽美者であつた意味に不思議な共鳴があつた。

正中二年春宮より歌合の歌めされ侍りしに、山路花
今日もまた行手の花に休らひぬ山分け衣袖にほふ迄
西山の花見ありさしに

遣ふ人に又誘はれて立返り同じ山路の花を見るかな

朝毎に立ちそふ峯の白雲の行き來も見えぬ花さかりかな

花のちるを

待つ程の花の心のつれなさも咲きてはあだになど變るらん

遍智院宮より召されしによみて奉りし歌

朝な／＼咲きそふ花の白妙に峯の霞の色添はれゆく

ひとり花のもとに尋ね入りて

見る人に咲きぬと告げむ程だにも立去り難き花の陰かな

遠く花を尋ね

偽りの雲の幾重にこりもせて遂に紛はぬ花を見つらん

花を見て

花の色は心のまゝになれにけりこと繁き世を厭ふしるしに

池に花のうつりたるを

影うつす花の青葉となりにけりむら／＼見ゆる池の浮草

花の雪

やま高み紛はぬ花の色なれや和ぎたる空に残る白雲

月に向ひて思ひつゞけし

思ひおく事ぞ此の世に残りける見ざらむ後の秋の夜の月

春植物

久方の雲居長閑に出る月の光に匂ふ山櫻かな

たかがり

鈴の音は近く聞えてはしたかの茂みの木ゐに隠れけるかな

はしたかの木ゐにかゝりて暮す日は我も家路に還りかねつゝ

和歌所にて初聞鶯といふ事を

さくからに春ぞ長閑き打羽振き都に出づる鶯の聲

遍智院宮より召されしによみて奉りし歌

さだかと思ふ心にほとゝぎす聞く一聲をなほ迎るかな

夏野ゆくたなれの駒の胸分けになづむばかりも繁る草かな

生駒山嵐に浮きて行く雲の隔てもあへずなる時雨かな

海邊の春曙といふ事を

花ならぬ霞も浪もかゝるなり藤江の浦の春の曙

春風

みなと河散りにし花の名残とや雲の浪立つ春の浦風

これらの歌によつて、誰しも、一面に新古今調の濃厚な點を觀取し得るであらう。正平の頃、兼好は京にあつて、公家達に新古今和歌集を講義したと例の園大曆に出てゐるが、さうもあつたらうと思はれる節が多い。徒然草に現はれた兼好の態度は、どこ迄も生活の藝術化夢幻化にあるのであるが、そこはまた新古今調と一致した箇處である。

さて、こゝあたりで、わたくしは、問題を、徒然草着筆の動機といふ様な點におちつかして行かねばなるまい。まづ着筆の時代について、上巻を建武三年以前、下巻を建武三年五月以後と考證したやうな説もあるが、こゝには五十歳前後數ヶ年に書いたものとこれを概觀しておかう。しかし、筆を染めた日から、筆を擱いた日まで、態度、所見の上に殊更な推移はなかつたとしても、わたくしはその間、相當の日子のあつたことを信ずるものである。つぎに、草文の順序の問題であるが、流布本の原書に近いものといふ説をとり、(三光院實證の岷玉集にあるとかいふ)壁紙とされたものを剝ぎ取つて秩序

なく輯めたものといふ説には同意しかねる。もちろん、歌をかき集めたものが伊賀に傳はつて居り、徒然草の草稿が吉田の寓居に遺つてゐたといふのは事實かもしれない。また、原稿の一部が、その感神院とやらの壁紙となつてゐたり、經典を寫した紙の裏に書き込んであつたといふことはあり得ることでもあらう。さりながら、現存徒然草が、亂雑無用意に集録されて出來たものでは全然無い。少くとも大部分は、兼好の編んだまゝであることはこれを信じてよいと思ふ。

さて、つぎに、わたくしは、當時の暗瞻とした天下の形勢を思ひ返す。それは、まづ以て如何に兼好の心を暗くしたことであらう。それを、われわれは徒然草の中にも見出すことが出来る。

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂しび悲しび往きかひて、華やかなりし邊りも人住まぬ野良となり、變らぬ住家は人改りぬ。桃李もの言はねば、誰と共にか昔を語らん……

廿五段

かうした淺ましい様々な光景を目前にしつゝ、筆を急がして著述をすゝめ、熱意を籠めて緻巧を極めようなどと、到底、かれにも期し得なかつた所であらう。

まづ、序段の「つれづれ云々」の言葉やりである。その文體よりして、「つれづれ草は枕草子をつぎて書きたるものなり」と稱ふる釋正徹あれば(正徹物語)一方に、また「つれづれなるをり、よしな

し事におぼえし事どもかきつけしに云ふ(和泉式部集)の語を模したといふ入江昌憲がある(久保之取蛇尾)しかしこれらの詮索は、要するに無駄な努力にすぎない。兼好は、あながちに古文を真似ねて筆を起し古典に模して書を作らうとしたのではあるまい。結極かうした臆説は、源氏物語を以て史記の筆法に模したものとす説の類である。

篇中、兼好が自身の著述について多少とも言ひ及んでゐる言葉は、

一、つれづれなるまゝに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく

書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ——(初段)

二、おぼしきこと言はぬは腹太るゝわざなれば、筆に任せつゝ味氣なきすさびにて、掻破り捨つべ

き物なれば、人の見るべきにもあらず。——(十九段)

三、筆をとれば物かゝれ、樂器をとれば音を立てんと思ふ。——(百五十七段)

さてこの三章を玩味して見るに、その文致がいつか、われづゝ自らを、兼好の着筆心理に融和せしめて行くのを感じるではないか。初段が、序の形において始めに書き添へられたものだといふ説は、どうしてもその筆觸の上から、搖かし難い所だと思ふ。そこでわたくしは、洛北吉田あたりの閑居に世を避けてゐた一法師を思ひ描く。かれの一身こそ、すてにあらゆる俗世的系類と絶縁したものがらも、後醍醐帝の笠置行幸、楠正成の來援(元弘元年)帝の隠岐蒙塵(同二年)更に、義貞の入京と北條氏

の滅亡、帝の御還幸(同三年)護良親王の鎌倉御幽閉(建武元年)北條時行の亂(同二年)足利尊氏の來襲、湊川合戦、帝の更に吉野行幸(同三年)と、目覺ましくも移りゆく世相が、かれの耳に入らずにはすまない。あたかも中興の遂げられた建武二年、内裏に、千首歌の講筵が行はれた時など、兼好は題(春植物、夏動物、秋天象、冬天象、戀天象、戀植物、雜地儀)七つを賜はつて帝に歌を奉つてゐる。(家集)その中最後の作、

雜地儀

せり河の千代の古道すなほなる昔の跡は今や見ゆらん

の一首にも、時世に對し感慨深い兼好の心持がよく出てゐるではないか。しかし、この建武中興の業は、遂にはかない夢に過ぎなかつた。

いつ方にも又行隱なればやと思ひながら、今は身を心に任せたれば中々ことたりてのみぞすぎゆく

反く身は流石に安きあらましをなほ山深き宿も急がず

これが、まさに、當時におけるかれの感懐ではなかつたらうか。もちろん、そこに世紀末的の *ennui* も手傳つたであらう。しかし、紫式部などの王朝末期のそれとの間には、自ら差別がある。わたくしは、それを、はつきり徒然草のもつリズムに依て直感する。少くとも、徒然草執筆中の兼好の心持は、

決して無爲沈滞その物ではなかつた。かれが、

蟻の如く集りて、東西に急ぎ、南北に走る。高さあり、賤きあり、老たるあり、若きあり、行く處あり、歸る家あり、夕に寝ねて朝に起く。營む所何事ぞや、生を貪り利を求めて止む時なし——(七十四段)

と觀じた如き醜なる現實に、ひたすら面接する時、ましてや亂麻の如く兩軍對峙して極まる時ない時世を思ひみる時、「言葉少なからむには如かじ」(二百世三段)と口も閉され、文教にて「世を治むる事漸くおろかなるに似たり」(百二十二段)と筆も投ぜられて、虚無的思想に同感されることもあつたであらう。しかしそれは、刹那々々におけるなかれの心理にすぎない。見よ。

つれづれなるまゝに日ぐらし硯に向ひて、心に移りゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつければ、あやしうこそ物狂ほしけれ

と、渾々と泉の水の如く奔騰し來る創作欲を如何にともし難かつたかれではないか。かくて、かれは時に夢見心地に、筆を走らす刹那を持つた。この序段から、一段の冒頭語、「いでや」に連なつてゆく氣持も、極めて自然的な主觀の流れではないか。

しかし、更に、その一段を読みつゞけて行くと、かれが鋭く人生における希望、目的の如何に平民

的であるかに駭かされざるを得ない。名聞ある攝家、清華の生活を讚美し、法師の一生を嘲り、容貌姿態の美を賞て、さて最後に、男子は、儒學、詩文、和歌、音樂、有職故實、書道に通じ、かつ聲美はしく拍子もとれ、多少酒も飲める方がいと結んだところ、どうしても、常識だけのものとしか思はれない。しかるに、さらに、これを、再讀して見ると、誰しもそこに怪しげな態度を見せしめられる。すなはち、名門の生れは樂母しいけれど、太政官なら辨官以下、諸省なら次官あたりの役人は駄目だと云ふかれの結論である。法師にしても官位についてるのは駄目だが、却て世捨人になつてしまへばよいといふかれの見方である。容姿の美、それはもちろん望ましいが、その美は、善心と善才が附隨して始めて眞美を發揮して來るといふかれの考へ方である——それらが強い暗示を讀後、われわれの腦裏に印して行く。讀者は、こゝに到つて、作者の巧みな言葉のまはし方に一抔はされた感を抱くてあらう。つぎに、二段にあつては更に眞面目な質素論をきかされ、三段に入ると例の戀愛美論を持ち出される。かくて、段を重ねてゆくと、前段で肯定したものを、後の段では戒飭してゐる様な矛盾にしばし出あふ。一方では飲酒、情欲を戒めながら、他方ではそれらの趣あるところを平氣で描いて行く。人生の長閑かさを述べた口で、無常迅速な點を主張する。雜誌の有害無益なことを説述しながら、又、閑談の妙味深いことを讚へる——すべてがかうした行き方なのである。そこで、徒然草の中に、作者の人生觀社會觀についての論理的統一的斷案を求めようとする者は、すべて失望せしめ

られる。しかし、そこに却て、われ／＼は、徒然草を通じての作者兼好の人生観、社會観、否宗教觀を見ることが出来、またそれらを教えられる。二百數十段——その各段は内容の長短、種類等様々てはあるけれど、わづか一行の段にも、その刹那における兼好の相がそつくりと現はれてゐるではないか。そこに徒然草のもつ無上の妙味がある。本朝歴史などに、徒然草の文脈を許して、「固是倭文之尤者也」と言つてゐるなど、とても、かうした點に目をつけて言つたのではあるまいと思ふ。

「我身のやんごとなからむにも、まして數ならざらんにも、子と云ふ者なくてありなん」——六段

「世の人の心を惑はす事、色欲には及かず」——八段

「家居のつき／＼しくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど興あるものなれ」——十段

これは、各段の筆の書出しを列ねたまでであるが、これだけでも各段の面目が、ほゞ、覗れるではないか。兼好のもつ刹那々々の心持が、そつと讀者の身邊近く寄り添つてくる、それがやがてその肺腑をも破つて這入て来る。呼吸の一揚一抑をもそのまゝわれ／＼に聞かしてくれてゐるかのやうである。

こゝに至つて、小説家の紫式部、歌人の西行、隨筆家の兼好と思ひ合して比較すると、興味深い様々な問題が生ずるであらう。特に、西行と兼好はよい組合せになる。誰かゞ、建設と破壊の循環こそ世相史である——と言つたことが思ひ浮べられる。情熱の兒西行が、破壊を事とすれば、睿智の兒兼

好は建設を天命とする。詩人は多く、非妥協的で自由を生命とすれば、批評家は、社會、國家的背景に立つて、普遍妥當的な觀察を披瀝する。兼好、必ずしも評論家ではないが、つねに觀照的立場から、種々な世相を觀取抱擁して、萬事をその着くべき位置に着かしめようとする。わたくしは、次に、これの觀照の態度を深く尋ね入つて見ることにしよう。紫式部の自己觀照に比して、いかにそれが細微にしてなほ、廣汎に互つてゐるかが分るだらうと思ふ。

百八十五段に、ある乗馬の名人は、少しでも勇んだ馬、少しでも鈍い馬には注意を拂つて乗らなかつたといふ逸話が出てゐるが、まづ、己が身を謹しむといふことが兼好の第一のモットーであつた。

「おろかにして謹めるは得の本なり。巧みにして恣なるは失の本なり」(百八十七段)

かうした態度に、兼好を置いて見れば、かれの心理描寫における巨細な注意深さ、綿密さが想像されて來るであらう。

名を聞くより、やがて面影は押量らるゝ心地するを、見る時は、又豫て思ひつる儘の顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、此の頃の人の家の、其處程にてぞ有りけんと思え、人も、今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。又、いかなる折ぞ只今、人の云ふ事も、目に見ゆる物も、我が心の内も、かゝる事の何時ぞや有りしがと覺えて、何時とは思ひ出てねど、正しく有りし心地するは、我ばかりかく思ふにや——七十一段

何と深い自己心理の解剖ではないか。虚言を聞いてゐる人様々の心理を分析して、

達人の、人を見る眼は、少しも誤まる所あるべからず。例へば、ある人の、世の虚言を構へ出して、人を計ることあらんに、

すなほに真と思ひて、言ふまゝにはからるゝ人あり(1)

餘りに深く信を起して、なほ、災はしく虚言を心得添ふる人あり(2)

又、何としも思はて、心をつけぬ人あり(3)

又、いさゝか覺束なく覺えて、頼むにもあらず、頼まずもあらで案じむたる人あり(4)

又、眞しくは覺えねど、人の云ふ事なれば、さもあらんとて止みぬる人もあり(5)

又、様々に、推し心得たる由して、賢こげに打ち頰笑みて居たれど、つや／＼知らぬ人あり(6)

又、推し出して、あはれさることありと思ひながら、なほ、誤もこそあれと怪しむ人あり(7)

又、異なる様もなかりけりと、手を打ち叩きて笑ふ人もあり(8)

又、心得たれども知れりとも言はず、覺束無からぬは、兎角の事なく、知らぬ人と同じ様にて過ぐる人あり(9)

又、此の虚言の本意を始めより心得て、少しも嘲かず、構へ出したる人と同じ心になりて、力を合はする人あり(10)

愚者の中の戯れだに、知りたる人の前にては、此の様々の得たる所、詞にても顔にても隠れなく知

られぬべし。まして、明かならん人の、惑へるわれ等を見んこと、掌の上の物を見んが如し——百

九十四段

かゝる各人の心理各様の區別觀も、近代の科學的見地から批判するならば、兒戯に類するものかも知れないが、鎌倉末期の一法師の業と考へるなら、かれ兼好の頭腦に對しある敬意を表せずには居られまい。それは、紫式部の觀照力にも到底、求め難い精緻さである。わたくしは、すでに、兼好の女性觀の一部を紹介したが、かれの鋭利細微な批判に至つては、また、西行の如き詩人に求め得がたいものであるのみか、そこには紫式部の觀察すら及び難いものがある。十二段の「同じ心ならん人としめやかに物語して云々」の章の如き、精緻な觀方に、いかにもと首肯されざるを得ない。

つぎに、敘事描寫におけるかれの特色如何。徒然草の中忘れ難い名文に、伊勢の國から鬼になつた女の京に上つて來た話(五十段)仁和寺の法師が酒興に過ぎて足鼎を頭に冠つた話(五十三段)丹波の出雲大社に詣てた聖海上人が後向の高麗犬を拜跪した話(二百卅六段)などがある。(こゝに引用することは省略するが)何れも何といふ緊張し切つた筆やりであらう。試みに、その中の一句を取り除けば、すべてが壊れかゝつてきさうな巧みな組立て出來てゐる。その一部を叩けば全部が反撥する様にさへ思はれる。これには、必ずや作者の觀照力の鋭利さが條件とされねばならぬ。かゝる敘事法に

は、紫式部も、源氏物語の中に、しばしばその巧妙な手腕の程を振つてゐたところのものであつた。世の學者にして、兼好と清少納言の文學を比較して、兼好を以て清少より劣つてゐるとする者が少なくない。わたくしは、その比較において、鳥の飛翔力と、魚の游泳力とを比してその優劣を定める者に對する様な不審を抱くのである。世以て、枕草子と、徒然草とを同質の隨筆とするけれど、兩作家の個性には甚しい徑庭が存してゐるではない。しからばその個性を抜きにして、形式的の文致のみを以て、眞價を批判することは出来まい。世の人の概ね賞する徒然草中の文は、十九段の「折節の移り變ること」の四季描寫の段や、百七十五段の「世には心得ぬ事の多かり」の宴席の描き振等であるらしい。かゝる印象的描寫の量においては、徒然草は、到底、枕草子の敵では無い。のみならず、かの清少納言の輕妙洒脫の才能を自負し、己が恩寵に誇るが如き口吻は、更に、徒然草の中に見るを得難い。しかも清少納言は、たゞ印象的、耽美的文學者にすぎないけれど、兼好は立派に觀照的、批評的作家であるのではないか。

兼好を更に、紫式部に比較すれば、兼好は式部以上に、より體驗的道德と體驗的宗教の上に立つてゐることが言ひ得られる。そこに、兼好獨特の人生觀、處世觀が編み出されてゐる。かれは、徒らに、言うて行はれ得ない徳目を並べはしなかつた。述べて無意味な修行の仕方を語つてはゐない。夢想的であつたり、無鐵砲であつたりしない。すべての言葉は體驗といふ網を潜り出たものであり、その些

細なことの中にも、眞珠の様なかゞやきが出てゐる。突飛であつたり、好奇的であつたりしない。すべてが反芻されて觀照といふ裏打ちを施されてゐる。

「ありたき事は、實しき文の道」(二段)「人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす」(百廿二段)

かく、かれは儒教主義者であつた。しかし、兼好に限つて、これが單なる裝飾やを、どして無いことを知らなければならぬ。世には、某主義、某學派を奉ずれば一も二も、盡くこれを盲信し、盲従すべきものだと考へてゐる者が多い。盡く書を信ずれば、書無きに如かずと言ふのは、まことに、かれ等に與ふべき訓言である。兼好にあつては、かれの道德的要求の大部を、儒學が充たしてくれればこそ、儒學に共鳴したのであつた。

さて、徒然草には、道話的小話がかなり澤山挿入されてゐる。それが噂話であれ、實驗談であれ、すべてが作者兼好には非常な興味を與へたものであつたらしい。あるものは、兼好に大きい魅力を與へて、その感應がそのまゝリズムとなつて文の表面に現はれ出てゐる。

そこで、それらの道話的小話の味は、すべて相通じてゐるが、あへて分類して見ると、およそ、つぎの各部類に屬する例話であることが知られる。

一、人は、自己を反省して、自己の價値を知り、つねに謙遜な心を持つべきである。——これに關

した説話は、かなり多い、某律師が、鏡に映つた面相の醜くいのを見て、その後、堂に籠りきりて、外出しなかつたといふ話（百卅四段）ある乗馬の名人の自戒が、乗るべき馬の強き所、弱き所を觀取し、轡鞍に缺陷があつたら必ずその馬を馳せないといふことにあつたといふ話（百八十六段）某に巧みな人が、われに劣る某打ちを、もつて愚かものと考へる話（百九十三段）園の別當入道といふ料理の巧者に、鯉料理を願つたところ、「此程百日の鯉を切り侍るを、今日缺き侍るべきにあらず、まげて申請ん」と返事したその態度について、西園寺公經が「切りぬべき人なくば賜べ、切らん」と宣給ひたらんは、尙ほ、良からん。何條、百日の鯉を切らん」と批評したといふ話（二百卅一段）さる見様のよい御子息が偶々父の前で人と話をするに、殊更、史記や漢書の文を引いて賢者がましく語つたといふ話（二百卅二段）など、色々の意味で謙虛な徳を暗示してくれる。

かしてげなる人も、他人の上をのみ計りて、己れをば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふ理あるべからず。されば、己れを知るを物知れる人といふべし——百卅四段

兼好の道德觀の基調は、この一點に存するやうである。なほ、徒然草中には、老人が身の老いたのを忘れて、俗世に望を抱くことを卑しとしてゐる段が多いが（七段、百十三段、百卅四段、百五十一段）結局、これも上述のものと同方向の考へ方である。

二、人は、つねに自己を捉へてゐて、たとへば興にすぎたりして、物嗤ひの種になることがあつて

はならぬ——この一節で、徒然草の讀者は、直ちに仁和寺法師の鼎さわぎを思ひ浮べられたであらうが、全く、あの文章は巧く出来てゐる。いつ迄も、讀者の頭に、泌みついてゐる様な書振りである。これは次の五十四段の、兒騒ぎの話と同じく、興に乗りすぎでの失敗であつて、自己についての注意が不足したに由來してゐる。「興なき事をいひてもよくわらふ」人は下品な者だと、つぎの五十六段にも兼好は、かゝる人を批難してゐる。仁和寺法師といへば、老法師が石清水八幡に參るとて、案内者なしにゆき、極樂寺、高良神社を岩清水と誤つて參拜し、得々として歸つたといふ話もこの部に屬すべきであらう（五十二段）かうした點から實は、氣むづがしげな兼好の面相が、讀者の眼前に浮び來るのも止むを得まい。兼好の事物の底に徹してやまぬ眼識は、瞬時にして事物の是非曲直を道破する。百七十一段においては、貝、おほひや、碁は、じきの祕法を述べて、「萬づの事、外に向きて求むべからず。只、此處もとを正しくすべし」と結論し、更に政道の祕論に骨子を移してゆく。かうした場合に、それとなく論語などを隠引してゐるのであつて、それが全體七八ヶ所に迄及んでゐる。つぎに上げる一段は、泥酔の結果失敗を演ずるといふ話で、この場合適例ではないが、兼好が如何にさうした心理状態を會得して巧に表現してゐるかがそれで分るであらう。

下部に、酒飲まする事は、心すべき事なり。

宇治に住みける男、京に具覺坊とて艶めきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申し睦びけり。

ある時、迎ひに馬を遣はしたりければ

「遙かなる程なり。口つきの男に、先づ、一度せさせよ」

とて、酒を出だしたれば、差し受けくよくと飲みぬ。太刀うち佩きて甲斐くしげなれば、頼若しく覺えて、召具して行く程に、木幡の程にて、奈良法師の兵士數多具して遣ひたるに、此の男、立向ひて

「日暮れにたる山中に怪しきぞ止まり候へ」

と言ひて、太刀を引抜きければ、人も皆太刀抜き、矢はげなどしけるを、具覺坊、手を擦りて

「現し心なく酔ひたる者に候。まげて許し給はらん」と、言ひければ、各嘲りて過ぎぬ。此の男、具覺坊に逢ひて

「御坊は口悔しき事し給ひつるものかな。己れ酔ひたる事侍らず。高名仕らんとするを、抜ける太刀空しくなし給ひつること」

と怒りて、ひた切りに切り落しつ。さて、

「山賊有り——」

と罵りければ、里人起りて出てあへば、

「我こそ、山賊よ」

と言ひて、走りかゝりつゝ切りまはりけるを、數多して手負ほせ、打伏せて縛りけり。馬は血つきて宇治大路の家に走り入りたり。あさましく、男共數多走らかしたれば、具覺坊は、梶原に、よび臥したるを求め出だして、擔ぎもて來つ。からき命生きたれど、腰切り損ぜられて片端になりけり。——八十七段

いかにも口取男の態度が活寫されてゐるではないか。これで兼好がありふれた道話者でもなければ、この文が飲酒戒の例話としてのみ書きやられたものでないことが、誰にも諒解され得よう。わたくしはこゝに思ふ。五十歳に近い作者兼好の胸奥にこそ、かの口取男の如き盛んな心、勇める心、燃えよとする心が潜んでゐたのではないかと。兼好の文脈は、時に平野の上に突兀たる山嶺を形作る。これは、急に若返つた者の様に、燃えつく様な筆を紙上に走らしてゆく。

若き時は血氣、内に餘り、心、物に搖きて情欲多し。身を危ぶめて、碎け易き事、珠を走らしむに似たり。美麗を好み寶を費し、是を捨て苔の袂に棄れ、勇める心熾りにして物と争ひ、心に恥ぢ羨み、好む處日々に定らず。色に耽り、情に賞で、行を潔くして、百年の身を誤り、命を失へる例願はしくして、身の全たく久しからん事をば思はず。好ける方に心ひきて、長き世語りともなる、身を誤つことは若き時の仕業なり(下略)——百七十二段

ロマンチックな青年の心理を描いて餘蘊がないではないか。兼好なればこそ、五十歳にして、なほ、

この饜饒たる文を成し得たと、わたくしは思ふ。

三、迷信は、どこ迄も迷信にすぎない、人は正しい信念に生くべきである——これに属するものは、赤舌日（しゃくぜつにち）が無意味であるといふ話（九十一段）放れ牛の檢非違使別當の座に上つたのを、怪異とするものがあつたが何の變化も起らなかつたといふ話（二百六段）龜山殿の敷地に、無数の蛇塚があつたが、その上に家を建築しても別に凶事もなかつたといふ話（二百七段）等の諸段がある。

四、諸藝優勝上達の心得について——兼好は、「己れが境界にあらざる者をば、諍ふべからず、是非すべからず（百九十三段）」と言つてゐるが、一般の疑問に對してよく諄々と答へやるべきを自ら戒めてゐる様に（二百卅四段）、かれが競技等諸藝における心得書きは、中々親切を極めてゐると言つてよい。ある説經師を目的とした青年が、その豫備として馬術（馬を以て導師に請ぜられた場合のため）や早歌の謠ひ方（佛事の後の宴會の隠し藝のため）等を學んでゐる間に、年が長じて、遂に最初の目的を達し得なかつたといふ話は、まづ意味深い諷諭譚である。さて碁を打つて勝つには、一手も徒らにせず、十一の石をとるためには十の石をも潔くする考を持ってよ（百八十八段）つぎに、双六に優るには、勝たんことを思つて打つてはならない（百十段）博奕の心得は、相手が負けて残りなく打入れようとする時手を引くにある（百廿六段）弓道において的に向ふ時、必ず二本の矢を手挟まないこと（九十二段）ある高名の木登りが、その手下の者の、高い梢から下り來る時、軒長（のきなが）ばかりになつて、始

めて「過（あやま）ちすな」と戒めたといふ逸話（百九段）——なほこれに類した話はその他にもあるであらうが、何れも玩味すれば、無限の趣がある。特に、人知れず藝を身につけて世に出ようとする人々に對する次の戒飭は、わたくしをして身にしむばかりに共感せしめる。

——かくいふ人、一藝も習ひ得る事なし。未だ堅固、片端なるより上手の中に交りて、謗り嗤はるゝにも恥ぢず。つれなく過ぎて嗜む人、天性其の骨なけれども、道に泥まず、濫りにせずして年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位に至り、徳長（たけなが）け、人に許されて並びなき名を得る事なり（下略）——百五十段

この外に、五、細心な順備心のために名をあげた話、六、有職故實の心掛の大切な話——など、項目を列挙することが出来るが、こゝには省略しておく。

こゝで、わたくしは一寸、兼好と、紫式部、西行との比較問題に立歸りたい。およそ教訓的態度の有無は、人間の性格を二大別してゐるものだと、わたしは思ふ。西行は、一僧侶でありながら、全然説教などの出来ない意味に、兼好と對角線上にある。しからは紫式部は、兼好的であつたらうか、はた、西行的であつたらうか。式部はその日記では、甚だ言を謹んでゐる如く見えるが、もし式部をして男たらしめたら、父も惜しんでゐた様に、兼好的に仕立上げらるべき型ではあるまいかと思ふ。

さて、岡西惟中は、徒然草を賞揚して、「兼好一代の學問の歸するところは、三教一致に落着せる也」

(直解)と言つてゐるが、わたしは本論で未だ、かれの佛教觀や道教觀に、何等觸れようとしたことはなかつた。これからその方面に延びてゆくべき兼好論はいよいよその時にさしかゝつた譯である。

主ある家には、すゞろなる人、心の儘に入來ることなし。主人なき所には、道行く人濫りに立入り、狐、梟やうの物も人氣にせかれねば、所を顔に入棲み、木魂などいふ怪しからぬ形も現はるゝ物なり。(中略)我等が心に、念々の欲しき儘に來り浮ぶも、心といふ物無きにやあらん。心に主あらましかば、胸の内に若干の事は入來らざらまし——二百卅五段

兼好は、徒然草の終り近くに、かゝる一段を残してゐる。思ふに、かれ兼好の心に、主の鎮座するまてには、かれも、またかなりな精神的險峻を、幾重ともなく越えなければならなかつたのであらう。人間の心と心との微妙な交渉——それが直觀されてくればくる程、又、一層、愛憎の矛盾が、かれを捉へていつたのではあるまいか。

兼好は、西行程の濃い情熱を持たぬために、かれ程、純一に、卒直になれなかつたかも知れない。また、西行の逸話として傳へられた多くの強くて生一本な性質——例へば、天龍渡事件で折角隨いて來た西住を京に追返したとか、射術をしてゐる際に娘の頓死を耳にして、さりげない態度をつゞけたとか——は、兼好の到底眞似だになし難い所のものであつた。しかし、これも結局、兼好の博大な愛

情からではないか。西行の如く娘の訃報に對し平然としてゐたその心も豪くはあらうが、悲嘆に際して前後を失ふ程の人の心にも懐しみが感ぜられる。

いま、兼好の家集などから、かれの出入した公家を檢べて見るに、比較的に多方面に互つてゐる。西行の交友が小範圍に限られてゐた事實と、そこにまた甚しいコントラストが見える。「御國讓りの節會行はれて、劔璽、内侍所渡し奉らるゝ程こそ限なう心細けれ。新院の下りぬさせ給ひての春、詠ませ給ひけるとかや『殿守のとものみやつこよそにして掃はぬ庭に花ぞ散りしく』今の世の事繁きに紛れて、院には參る人もなきぞ淋しげなる。云々(廿七段)」と述べた新院は、花園上皇かと思はれる節があるが、同情深い兼好の心持がその間によく出てゐるではないか。かれは、持明院統の方々、伏見天皇皇子尊圓法親王、後伏見天皇皇子尊胤法親王などの處にも出入して歌を詠んでゐるし、無論、大覺寺統の方では、後宇多天皇の御弟寛尊法親王や、同天皇の皇子承覺法親王の許に出入して、時に歌を召されたり、御催しの歌會に加はつたりしてゐる。従つて、二條家の爲世や、爲時爲定等との交はりもあれば、一方また冷泉家の大納言の歌合にも出るといふ風である。西行には、そんな不偏不黨の態度をとるやうな自制心はなかつた。かれは恩寵ふかい主家をも、見すてる程に俠量であつた。徒然草に一箇所、西行の事柄にふれた段がある。西行論において、一寸述べてはおいだが引用すると、

後徳大寺大臣が寢殿に齋居させしとて、繩を張られたりけるを、西行が見て、齋の居たらん、何か

は苦しかるべき。此の殿の御心、さばかりにこそ」とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、かの例し思ひ出でられ侍りしに、眞や、「鳥の群れゐて池の蛙をとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなん」と、人の語りしこそ、さてはいみじくこそ覺えしか。徳大寺にも如何なる故かありけん——十段

この一文は、いかにもよく、思慮の深い兼好と、刹那的感情に支配され勝の西行との性格別を語つてくれてゐるではないか。もちろん、西行が徳大寺家を疎くしたのは、他に充分の理由があつたので、或は、この逸話は、全くの假託のものであるかもしれないが、それにしてもこの話は、人をしていかにも西行的だと領かするに充分であらう。兼好が、御宇多上皇の御弟性恵法親王(綾小路宮)の話をひいて、最後に、「徳大寺にも如何なる故かありけん」と、軽く言ひ切つた所に、いかにもはつきりかれ自身の面目が出てゐる。兼好には、(この傳説を事實とすれば)西行の、感情に走りがちなやり口がどこまでも氣に入らなかつたものと見える。

西行は、他人によく憤り、他人をよく毛嫌ひした。しかも、容易に自然美に陶醉を求め、すべてを忘れてその美觀に見とれることが出来た。兼好と自然美——それに關しては、前にも述べておいたが、こゝに至つて西行の態度との間に大きい相違の存することに氣付かれたであらう。西行の方は、既に、自然美を感じすぎて、その蠱惑を怖れ、その幻妖から離脱することを努める人であつた。兼好の方は、

反對に、自然美の魔酔を求めながら、なほ屢々そこから醒め出て人間愛に飢える人であつた。世に、兼好をもつて、あらぬ拗者の隠者の如くに詰るものがある。わたくしは、かゝる批難者に、ぜひ、この隨筆を再讀して玩味するやうに勧めたい。さうして、如何に兼好が人を愛しようとして惱みつくしてゐたかを讀んで貰ひたい。かれの一言一句、それは幾度、自己叱責のために吐かれてゐるか。かれは、己が弱さを餘りに見知ればこそ、筆を持つてなほも、それを鞭に鞭打つのである。かれは、頓阿や淨辨等とは、互に暖かい友誼を結んで得た。しかし、世俗の人々すべてに對しては、必らずしも同轍には行かなかつた。方角を異にした心と心との銀線は、しかくた易く共鳴はなし得なかつた。それは、西行の抱いた悩み、そのまゝのものである。家集より——

人に知られじと思ふ頃、古里の人の横川迄尋ねて來て、世の中
の事どもいふ、いとうるさし。

年ふれば訪ひ來ぬ人も無かりけり世の隠家と思ふ山路を

されど歸りぬる後はいとさうらゝし

山里は訪はれぬよりも訪ふ人の歸りし後ぞ淋しかりける

いかなる折にか戀しき時もあり

あらしふく深山の庵の夕ぐれを古里人は來ても問はなん

心にもあらぬやうなることのみあれば

何とかく蟹の捨舟すてながらうきよを渡るわが身なるらん

山里の垣ほのま葛今更に思ひすてにし世をば恨みじ

あはれなる夢を見て打駭ろきたるに語るべき人もなければ

醒めぬれど語る反なきあかつきの夢の涙に袖はぬれつゝ

見ずもあらで夢の枕に別れつる魂の行衛は涙なりけり

これらには、何れも兼好が、西行と共有してゐる心境が窺ひ得られる。また徒然草十二段の、「同じ心ならん人としめやかに物語りして、をかしき事も世の果敢無き事も、裏無く言ひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ云々」の一文にも、如何にもはつきり兼好自らの體驗が出てゐるではないか。しかも世俗の社交の殆んどが、心と心との交りてないことを指摘して、最後に、「――はるかに隔たる所のありぬべきを佗しきや」と結んでゐるその「佗しきや」の一句を讀み終る時誰しも生の底に潜む寂寥に對し、根強い戦きを感じずには居られないであらう。

しかも、びつたりと胸と胸を合はせ得た友に對し、兼好が如何に、暖かい抱愛の情を送り得てゐることか。歌集中、「冬の夜、荒れたる所の簀子に尻掛けて、木高き木の間より隈無く洩りたる月を見て曉迄物語りし侍りける人に」とか、「秋の夜、鶏の鳴く迄人と物語りしに歸りて」とかいふ詞書を讀

むと、隨筆中の、百卅七段、百七十段、百七十五段などの心持迄、はつきり思ひ浮べられて來るではないか。百七十段の如き始めに、雜談を戒めておきながら、

同じ心に向はまほしく思はん人の、徒然にて、「今、暫し、今日は心靜かに」など言はんは、此の限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。その事と無きに人の來りて、長閑に物語りして歸りぬるいとよし。また、文も久しく聞えさせねばばかり言ひおこせたるいと嬉し――

百七十段

と、親しき仲らひには、特に例外を設けてゐるのもかれらしくて面白い。

百七十五段の方は、さらに酒飲相手に就いてゐるが、これらを以て、すべて兼好が經驗を語つたものであると斷言しても異論は出まい。

世の中ありしにもあらず、移り代りて慣れ見し人も無くなり行くを

かたるべき友さへ稀になるまゝにいと昔の忍ばるゝ哉

これは、大覺寺統の方々の吉野落、すなはち、南北兩朝分立による悲劇をさしたのであらうが、かゝる間にも暗い社會相は、遠慮會釋なく、氣弱い法師の心を傷めたのであつた。愛を友に求めてやまない兼好の心の痛ましさを思ふに餘りある。

さて、兼好の宗教観が、極めて學的性質のものであつたといふことは、動かし難い處である。かれが、佛教においては天台派を奉じ、神道においては兩部派的であるのも、この傍證となすに足りる。さて、神道との關係を索めると、これは世の兼好論者の云ふ如く、明瞭に、書中に現はされてはゐない。まづ四ヶ所においてのみこれを拾ひ出すことが出来るが、それによつてわれ／＼の考へ得るかれの神道上の知識は、せい／＼延喜式を繙いた程度のもてはなかつたらうかと思はれる。例へば、「神樂こそなまめかしく面白けれ」(十六段)「齋宮の野宮におはしますありさまこそ優しく面白き事の限とは程度の讚美的見方であつて、歌集にも、わづか鹿島神社に奉納したものと、貴船神社を詠んだものと覺えしか云々」(廿四段)の二首しか残つてゐない。そこには到底、西行の敬虔さは求め得難い。かれに見る如き心からの尊崇さは、徒然草に表はされてゐないのは、世の兼好論と違つて甚だをかしい。

しかし、佛教學に對するかれの知識は、決してその程度のものではなかつた。行者用心集(存海著)に見える兼好に對する、天台學の無双の道心者であるといふ賞讃も、あながち棄てたものではない。かれが、最初から比叡山や横川に縁の多かつたことは、諸方面からこれを考證することが出来る。

一、長兄は天台の大僧正であつた。

一、かれは、横川で出家を遂げた。

一、兼好法師集に、比叡山で詠んだ歌二首、横川に身を隠してゐる時によんだ歌三首がある。

一、かれは、横川の靈山院で、生身供の式に就いての文を書いた。(法師集中の詞書きによる)

一、兼好法師集で、兼好が歌を召された方々の中、尊圓法親王や尊胤法親王は、何れも天台座主に
ついた方々であり、その他友人の頓阿などもすべて天台關係の者であつた。

これらは、何れもその理由をなすに十分足るものであらう。

こゝに、わたくしは、天台的素養の上に、厭離穢土欣求淨土の他方本願の信仰を加へていつた紫式部を聯想するのである。かく台宗の環境にあつた兼好は、果して法華經の供徳に由て、一實圓頓の妙旨を解了し、得たであらうか。少なくとも、當時の比叡山延曆寺の中にあつて。止觀明靜の妙行を修し了つたであらうか。

わたくしは、すでに、兼好の宗教観(徒然草に現はれた)は、かれの體驗の結果であることを斷言してゐた。全く、かれは學的に宗教を研鑽しながら、隨筆の中には教理的理論に關し、ほとんど、一言の筆を加へてもゐない。わたくしは、兼好が人間相互の愛情について、いかに眞劍に考へたかを前説した。われ／＼人間生活には、自ら警戒を要する様々の欲望がある。第一、名譽欲。第二、色欲。第三、利欲。第四、生命欲。これらは、何れも、愛他の精神に反した我欲の世界であり、永く宗教の、調和を計つて來た人間性にほだした矛盾性であつた。宗教に頭を突込めて入つた兼好を惱ます問題も、ほゞこの域を出てゐない。かれは、欲望の海に喘ぐ俗界の人々を、たえず銳利な眼識で凝視して

ゐる。

蟻の如くに集まりて、東西に急ぎ南北に走る。高きあり、賤きあり、老いたるあり、若きあり、行く處あり、歸る家あり。夕に寝ねて、朝に起く。營む所何事ぞや。生を貪り、利を求めて止む時なし。

身を養ひて何事をか待つ。期する所、只老と死とにあり。其の來る事速かにして、念々の間に止まらず。是を待つ間何の樂みかあらん云々——七十四段

それは何といふ力強い筆致であらう。かれは俗世を思うて憤激する。しかも、そこに止むに止まれぬ憐愍の情の横溢が感ぜられる。

名利に使はれて靜かなる暇無く、一生を苦むるこそ愚なれ。

財多ければ身を守るに拙し。害を買ひ災を招く媒なり。身の後には金をして北斗を支ふとも人の爲めにぞ災はるべき。愚かなる人の目を喜ばしむる樂び、またあぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉の飾りも心あらん人は、うたて、愚かなりとぞ見るべき。金は山に捨て、玉は淵に投ぐべし。

利に惑ふは、すぐれて愚かなる人なり云々

と、かれの語調は、漸次に荒らかになつてゆく。智慧と心とこそ、世にすぐれたる譽も、殘さまほしきを、つらく思へば、譽を愛するは、人の聞

を喜ぶなり。譽むる人、誹る人共に、世に止まらず。傳へ聞かん人、亦々速かに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。譽は、亦毀の本なり。身の後の名、残りて更に益なし。此れを願ふも次に愚かなり。——卅八段

かれの言や、まことにその當を得てゐるではないか。

惟ふにかゝる人生觀に到達し得た兼好が、どうして、ぼんやりと一左兵衛尉として永らへ得るであらう。もちろん、他人の昇進に對する嫉妬心も時に、生じたかも知れぬ。自分の貧乏さを託つ氣も時に、催うしたかも知れない。しかし、もつと深くかれの胸底を搔き捲つてゆくものは、もつと本質的もつと根本的の疑惑であつた。かくまでも、日常生活の氣持を左右する人間の名利欲の本體は、抑も何物であるか。そこに、かれは、佛祖の説きのこした教理の尊とさ、意味深さを、しみじみと感ずるのであつた。それは、崇高深遠の沒我の世界であつた。無抵抗の世界であつた。

友とするに惡き者七つあり。一には高くやんごとなき人。二には若き人。三には病無く身強き人。

四には酒を飲む人。五には猛く勇める兵。六には虚言する人。七には欲深き人。良き友三あり。一には物くるゝ友。二には藥師。三には智慧ある友。——百十七段

これは五十歳の兼好の隨筆とはいへ、随分、大膽な口吻ではないか。しかし、かれが如何に、自省心の無

い自惚者や社會上の強者を悪んだかど、これらの中によく現はれてゐる。かの一段において、陣笠連の尊大振を嘲弄し、二段に移つて權者の贅澤さを誹謗した心持も、この點から推察されるし、「物に争はず、己を枉げて人に従ひ、我が身を後にして、人を先にするには如かず」(百卅段)と云ひ「身死して財殘る事は、智者のせざる處なり」(百四十段)とこれに留めを差してゐる所にも、無欲、無我の世界に、漸次涅槃の俤を認めて來るかれの心持が次第に顯出してゐるではないか。かくて、かれの始め、分に應じて努力すべきことを主張したこと(百卅一段)は、どうしても、「他に優る事のあるは大なる失なり」(百六十七段)といふ結論を導いて來、「人に優らん事を思はゞ、只學問して其の智を人に優らんと思ふべし」(百卅段)といふ考も、やがて、おのれ知りたることも、「さだかにも辨へ知らず」(百六十八段)と答へるがいゝといふ如き消極的態度の推諫に及ぶのであつた。

かれの没我的傾斜は、かくて一步々と深くなつてゆく。「我身のやんごとなからむにも、増して數ならざらんにも、子といふ者無くてありなん」(六段)といふ産兒忌避説も、その次の段に述べられてある通り、子孫のために我欲増長を來すを怖れるものにとつて當然の結論でなければならぬ。いふ迄もなく、これ、佛門においても僧侶に妻帯を禁じた主因であつた。

かくて、かれは、更に市塵を離れ、幽靜閑雅の地に隱遁生活を營む趣致を説き、進んで出家脱俗、圓頂緇衣の信仰生活の意味深き點を力説する。無常觀は、人生の歸趨を訓へ、かれの燃え立つ内生命

は、轟直に急端を流下する。それは目も綾な程の往相廻向の相であつた。しかし、見よ。兼好の躰は、ひたと佇立する、かれの日に焼けきつた額は、ふと後に向く。その刹那におけるかれが態度の轉換の目ま狂ほしさ。叱咤は撫言に、いきり立つた瞳は笑ひに、のばされた兩手は軽く膝の上に——かくてかれは、洒々たる溫容をもつて、世相の中に自然の上に靜かに立歸るのである。下卷に及んで、「いやしげなる物——家のうちに子孫の多き」(七十二段)「妻と云ふ者、男は持つまじきものなれ——子など出て來てかしづき愛したる心憂し」(百九十段)など、同じく産兒否定説を繰返しながら、如何にその語感の弱々しく低徊的なることよ。かれは、どこ迄も傍觀的に述べ去つて、しかも己れの言葉に酔つてゐるものゝやうに思はれる。兼好の肖像畫に現はれたユーモアは、すなはち、この瞬間を寫したものと云つてよい。扶桑隱逸傳の著者は、兼好の文を評して「少有俳體」と言つたのもこの點を押さへてのことではあるまいか。

「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世」(廿五段)——特に、五濁盛り熾つて、干戈の響やむ時なく、末代の觀念自ら、人心に生じた鎌倉末期である。「身を養ひて何事をか待つ。期する所、只老と死とにあり。その來る事速かにして、念々の間に止まらず」(七十四段)と、かれの憤ほりは、昂進する。「近き火などに、遁ぐる人は『暫し』とやは云ふ。身を助けんとすれば、恥をも願はず。財をも捨て、逃れ去るぞかし。命は人を待つ物かは。無常の來る事は、水火の攻むるよりも速かに、逃れ難き物を、その時老いたる親、

稚き子、君の恩、人の情、捨難しとて捨てざらんや（五十九段）と次に憤は怒號に變る。更に「都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならんや。（中略）若きにもよらず、強きにもよらず、思ひ掛けぬは死期なり。今日迄逃れ來にけるは、有難き不思議なり。暫しも世を長閑には思ひならんや（中略）静かなる山の奥、無常の敵きほひ來らざらんや。その死に臨める事、軍の陣に進めるに同じ（百卅七段）と、われは、更に、「世に従はん人は、先づ、機嫌を知るべし（百五十五段）の項に、目を移して行く時、「死期は機を待たず。死は前よりしも來らず、豫て後ろに迫れり。人皆、死ある事を知て、待つ事而も急ならざるに、覺えずして來る。沖の干瀉遙かなれども、磯より鹽の充つるが如し」といふ結びに接してゆく時、冷水の背筋を傳はる如き戰慄を感ぜざるを得ないではないか。翌日賣拂ふ契約をした牛がその前夜に死んだといふ諷話（九十三段）木の股に登つて居眠りする物見法師についての譬喩（四十一段）人間の業を、雪佛に金銀珠玉の飾をなすに比較した話（百六十六段）など、例の事ながら無常に關する巧みな説話である。

わたくしは、こゝで、再び兼好の心裡に立返つて行かう。人間の持つて生れ出た生存欲、がむしやらに生きようと足掻く本能欲、病、死の神の不意な出現に依る畏怖、——それらは、色欲、名利欲以上に強く深いと言ひ得る。しかも兼好は、果して、その畏怖心から解脱し切つたのであらうか。徒然草の、至る所に、宗教問題に關して死魔の暴力を描いたかれ——そのかれは、己を一抹の煙に消してゆ

く死神の白眼に無關心であり得たのであらうか。わたくしには、どうもさう思はれない。

老來りて始めて道を行ぜんと待つ事勿れ。古き墳、多くは是れ少年の人也。計らざるに病を受けて、忽に、此の世を去らんとする時にこそ、初めて過ぬる方の誤れる事は知らるなれ。（中略）人は、只、無常の身に迫りぬる事を、心に轟と掛けて束の間も、忘るまじきなり。さらば、などか、此の世の濁も淡く、佛道を勤むる心もまめやかならざらん——四十九段

と、死の強い意識から信佛への道を説いた一節を読み、それから

日暮れ途遠し。吾生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。此の心をも得ざらん人は、物狂ひとも言へ、現なし情なしとも思へ。誹るとも苦しまし、譽むるとも聞き入れじ——百十二段

といふ懦弱な己が心に鞭打する憤激したかれを見る時、怒れるかれの形相の前に、死神の亂舞する幻を感ぜしめられるのである。もし、この百十二段のこの一節をも、徒然心の餘沫、筆の遊びと解釋する人があるならば、遺憾ながら、わたくしはこれ以上、その人と兼好論を共にすることは出来ない。なほ、五十九段の「大事を思ひたらん人は、去り難く心に掛らん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり云々」（内海弘藏氏は、この大事を専門的職務として解釋してゐられたやうであるが、そ

うてはあるまい）百八十八段の「一事を必ずなさんと思はゞ他の事の破るゝをも痛むべからず。人の

罵りをも恥づべからず。萬事に換へずしては、一の大事成るべからず云々」といふ如き節にも、信教の境地、すなはち、大事の前に、兼好の主觀の激しく燃焼する様を見ることが出来る。しかり、かれの心は燃えに燃えてゐるのである。

この場合、一寸先きに言ひ及んだ賣約中死んだといふ牛の話を取味して見るとまた、無限の味が出てくる。特に、あの話の中の第二の批判者は、兼好自身ではないかと思はさしめるものがあるのである。それは――

されば人死を苦まば、生を愛すべし。存命の喜び日々に楽しまざらんや。愚かなる人、此の樂しみを忘れて煩^{いたづ}かはしく外の樂しびを求め、此の財を忘れて危く、他の財を貪ぼるには、志滿つ事無し。生ける間、生を樂しまずして、死に臨んで死を恐れば、此の理あるべからず。人皆、生を樂しまざるは死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず。死の近き事を忘るゝなり。若し又生死の相に預からずと言はゞ、實の理を得たりと言ふべし――九十三段

わたくしは、この一節を讀むごとに、警鐘を耳にするが如きある畏れを覺える。「若し又、生死の相に預からずと言はゞ云々」――それは口にくそ容易に表はしうれ、分秒の隙なく、生死解脱の境界にあることは、われ／＼にとつて難い／＼事てなければならぬ。

徒然草の讀者は、また書中のエピソードの中に、非常識な人物を題材にしたものゝ多いことを認め

るであらう。例へば、馬洗ふ男が、あし／＼と馬を叱りながら洗ふ聲を、阿字／＼と聽いて、大に尊とがる梅尾上人（百四十四段）自分の馬を堀へ落したある馬ひきに對し、徒らに難しい佛語を以て罵りながら得々としてる證空上人（百六段）親芋を好んでつねに食した盛親僧都（六十段）など高僧の逸話、それから、兒を思うてくさめ／＼と稱へながら清水に參詣する一老尼の話（四十七段）大根を藥として愛用してゐた一武士が、危険に類した時、大根の精が顯れて助太刀した話（六十八段）などもその類の奇談である。殊に百五十二段から百五十四段迄の藤原資朝の逸話、二百十五段、二百十六段の北條時頼の逸話、これらは悉て、あまりに常識を脱した話ではないが、これらをもつて、無意味なき／＼がきとのみ解釋するのは、はなはだ誤つてゐると言はねばならぬ。むしろ、かうした説話の中には、化けそこなつた狐の話の如き只それ迄のもので、何等比喩的意味のないものもある。しかしそれら、單純な噂咄の記録についても、考へるなら、何故、兼好が特にそれを書きとめたかといふ疑問が生ずるだらうと思ふ。それは兼好を知るには意義深い手がかりとなる。況んや、畸人脫俗者とも見るべき人々の奇行に對し、兼好のかくも、興味を持つたことは面白い問題となりはしないか。

兼好、常識的の兼好に、所謂奇行の眞似すら出來かねたらうといふことは、誰にも首肯出來るであらう。しかし、わたしは思ふ。自分自身の理性的桎梏を自認したと同様、兼好は、生一本に、殉情的に、非常識的に、奇行家的になり得ない自分を、こゝでも知り切つたであらう。そして餘りに生眞面

目な自辱を、時に誘つても見たであらう。そこで自ら常軌を脱し得ないがために、畸人の奇行にひそかな憧憬を抱きかくは書きとめたのであらう。しかし、かれが信仰生活に於いてのみ、前説の如く熱中したことを思うて、そこにまた兼好の兼好たる點を、はつきり思ひ描かざるを得ないのである。八百煩惱から解脱せしめて、光明遍照の境地に、われ／＼を導かうとする兼好は、また親切を極めてゐる兼好であつた。

まづ、世上一般の隱逸者に、出家の意味を述説する。兼好が、辭官後放浪の身となつて出家入道するまで、かなりの年月のあつたことは、既に述べたけれど、あらゆるトラジションから離れて、己れ獨り純眞な生活を拓いて行かうとする時、宗教の形式方面が眼中に入らぬことは當然である。出家それ自らに何の意味がある、袈裟そのものに何の價がある。「道心あらば住所にしもよらじ。家にあり、人に交はるとも、後世を願はんはんに難かるべきかは」(五十八段ノ某ノ主張)自分は自分であるのみ。兼好もかう考へられた時代があつたに違ひない。西行の如く出家になつても、結局、貪る心の根は終生絶えなかつたではないか。俗衆に交り、俗服を纏ひ、そのまゝに、悟脱することわれ／＼の望むべき所ではあるまいか。しかし、その主張にも、自ら誤謬がある。これは兼好にも覺悟されて、進んで辭官の決意を果した譯であり、後には出家をも遂げてしまつた譯である。

——さればとて、「反ける甲斐なし、さばかりならば、なじかは捨てじ」など言はんは、無下の事な

り。流石に一度、道に入りて世を厭はん人、假令望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢の設け、あかざの羹、幾何か人の費へをなさん。求むる所は安く、其の心早く足りぬべし。形に恥づる所もあれば、さは言へど悪には疎く、善には近づく事のみぞ多き。人と生れたらんしるしには、如何にもして世を逃れむ事こそあらまほしけれ。偏に貪る事を努めて、菩提に赴かざらんは、萬の畜類にかはる所有るまじくや——五十八段

しかし出家といふことが、四十男に容易に出来るものではない。やはり始め憧憬されたのはかの「水をも手して捧げて飲みける」許由や、「冬月に衾無くて、藁一束みありけるを」床とした孫晨(十八段)の生活、「山澤に遊びて魚鳥を見れば心樂し」んだ嵇康(二十一)の心持だけであつて、かれは、「人遠く水草清き所に逍遙ひ歩きたる許り、心慰むる事はあらじ」と、隱者の無垢淡泊とした態度をのみ羨望してゐる。出家せずとも乞食生活、託鉢生活——それで充分、生活の純化が出来るのだと思はれたのであつた。

身を隠す宿の垣ほの篠薄忍ばすほにも出てにける哉

山風の溜らぬ床も生まれけり身を檜柴の庵結びつゝ

山深み待たれし鳥の聲をだに聞かて幾夜の寢覺めしつらん

やまざとの住居もやう／＼年經ぬることを

淋しさも習ひにけりな山里に訪ひ來る人の厭はるゝまで

かれはかくて様々の苦行、寂寥にも絶え續けた。そこに、外相（形式）が如何に内相の圓熟に有意義であるか、僅かづゝ分つて來た。事實、當時の佛教界の混沌さは想像以上で、各宗各派戲論妄語を事とし罵詈雑言を相戦はした。若し然らざる者は仁和寺の法師的に、舞曲を事とし連歌に耽るといふ風で、「人多く行き訪ふ中に、ひじり法師の交りて、いひ入れ停みたるこそ、さらずともと見ゆれ」（七十六段）と、兼好をして顰蹙せしめる様な俗僧を以て、至る所充たされてゐたのである。特に叡山の亂脈は、慈圓座主の徳を以てすら、これを革清することが出来なかつた。しかも、その間にかれ兼好は、なほ外相の意義を十分認めてゐるのであつて、つぎの一段は、この意味に何といふ妙味深い一節であらう。かれ兼好が、髪を剃る迄に至つた強い要求が、これによつて、はつきり會得出来るではないか。筆を取れば物書かれ、樂器を採れば、音を立てんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、采を採れば攤打たん事を思ふ。心は必ず事に觸れて來る、假にも不善の戯をなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むる事もあり。假に今、此の文を廣げざらましかば、此の事を知らんや。是、則ち觸るゝ所の益なり。心、更に起らずとも、佛前にありて鈴を採り、鐘を取らば、怠る中にも善意自ら修ぜられ、散亂の心乍らも繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事、理もとより二ならず。外相、若し反かざれば、内證、必ず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎて此れを尊むべし——百五十七段

なほ、出家を遂げる機會に就いて述べた次の一節のことばも面白い。

所願を成じて後、暇ありて道に向はんとせば、所願盡くべからず。如幻の生の中に何事をかさん。悉て所願皆、迷想なり。所願心に來らば、妄心迷亂すと知て一事をもなすべからず。直ちに、萬事を放下して、道に向ふ時、障りなく所作なくて、心身永く靜かなり——二百四十一段

辭官、彷徨、隱遁、出家道心——それは、兼好の次々へと追ひ詰めて行つたプロセスであつた。しかし、われ／＼の知る兼好法師は、ついに、一山一寺に籠り、詩歌をすて、讀經三昧に耽り、友人をすて、冥想にのみ浸つて居る如き人ではなかつた。後宇多上皇の御三年忌の御法會と言へば都に出て來たり、弘融僧都に誘はれて伊賀方面へも出かけて行くといふ人であつた。次の一段は、伊賀にゆく途中、かの栗栖野を経た時の記事であらうと推測される。かうした短文にも、兼好の相が躍如としてゐるのが面白いではないか。

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道を踏分けて、心細く棲しなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ篋の滴ならでは露音なふ物なし。閨伽棚に菊紅葉など折散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。「かくてもあられけるよ」と、あはれに見る程に、彼方の庭に大きな柑子の木の枝もたわ／＼になりたるが、周りを嚴しく圍ひたりしこそ、

少し興醒めて此の木無からましかばと覺えしか。——十一段

行脚姿の兼好が、山中の草庵を、横に眺めながら歩いてゐる様が、そのまま目前に浮び出される。

なほ、五十餘歳の頃、紀伊の玉津島に參詣したことは、吉野拾遺に出てゐる。吉野拾遺にして誤がないならば、兼好はその時、その書の著者松翁と、舊交を改め得たのであつた。

世に、兼好を「双の岡の兼好」と呼ぶ。兼好は、生家の關係上、吉田山附近にもゐたが、晩年は洛西の双の岡に草庵を結んでゐた。そこで、かれは一童と共に棲み、赤貧のためむしろを、あんで以て生活の料にしてゐたと傳へられてゐる。しかし、そこへ頓阿などが遊びに行つたこともあり、兼好自ら、京にそこから出かけることも多かつたらしく察せられる。

訪らふべき事ありて京に出て、

立歸り京の友ぞ訪はれける思ひすて、も住まぬ山路は

この作は、双の岡時代のものであらう。

ならびのをかに無常所まうけて、片端に櫻を植ゑさすとて

契りおく花とならびのをかの上にあはれ幾世の春をすぐさん

この作は、世に喧傳されたもので、興國四年（北朝では康永二年）春、兼好六十一歳の詠とされてゐる。契りおくの頭句を、植ゑおさしと傳へた異本もあるが、興國四年とは、北畠親房が神皇正統記を書き、

かの關城や大寶城をすて、吉野に馳せ來つた年に當つてゐる。兼好が双の岡を如何に愛したかは、無常所を設けてかゝる歌まで詠んでゐるので充分わかるだらう。

最後に、兼好は北朝の方々の處にも出入してゐたので、これは左大臣藤原公賢の日記「園大曆」の證する處である。二條系の歌人が、北朝の人々に親昵して來た以上、歌人として兼好の朝廷に參内することはありうる事である。明恵上人が、かつて「山寺の法師臭くば居たからず心清くばくそふくなり」と詠んだ心持を、こゝに思ひ浮べる。

すなはち、晩年の兼好の生活は決して特異な隱者や遁世者のそれてなく、どこ迄も、普通の歌人的のものであり、世間の生活であつた。もとゞ、徒然草は兼好の寂後、たゞちに廣く行はれたものでなく、元祿の時世に至つて、唐突に全國的に愛讀されたものだといつていい。さうして註釋書も相繼いで出たやうな譯であるが、多くは、これを教訓書的に解釋したために、兼好の言行不一致の態度や、書中の矛盾した内容や、不合理の文を指的するに止まつてゐた。従つてそれらによつて、正しい鑑賞や批評を得ることは、到底、不可能な事に屬してゐるのは、如何にも遺憾である。

しかし、わたくしは、こゝに還相に立つた人。味のある兼好を、より敬慕せずには居られない。獅子吼するかれの姿より、解剖刀をとるかれの手つきより、人生のヌォブ皿から、出来るだけの佳味を吸ひとらうとするかれの態度に心を惹かされるのである。

わたくしは、それを第一に、かれの文の調子と陰影に感ずる。まことに徒然草の半ばは、かうしたかれの心持の所産である。それを「觀賞の世界」とも、「楽しむ境地」とも名づけることか出来よう。「筆をとれば物かゝれ、樂器をとれば音を立てんと思ふ」とは、外相がゆがめられずその儘、官能の世界に入つて來るのを、觀賞の作用が待ちひかへてゐる有様ではあるまいか。「人事多かる中に、道を樂しぶより氣味深きはなし」とは、不可不の世界に隨喜し、法悦を覺える境地を現はしてゐるのはあるまいか。そこで、つぎには、一、無常味の觀賞。二、不完全味の觀賞。三、隱棲味の觀賞。四、自然的簡樸味の觀賞。五、可憐味觀賞の五方面にこれを分けてこれらを述べることにする。かう竝べて見ると、すぐ感ぜられる様に、兼好の觀賞は、人生の可憐さ、人生の持つ涙の上に、差し向けられ、それに熱い抱擁を捧げようといふのであつたことが察せられる。

一、無常味の觀賞。無常觀こそ信仰生活の基底をなすものである。紫式部、西行の懊惱が、すべてこの無常觀を中心にして渦巻いてゐたことは前説した通りである。兼好の明鏡にも似た頭腦に、まづ映出されて來たものも、人生の無常相にあつたに相違ない。しかし、かれは同時に、無常の持つ妙味をも見逃さなかつた。假に人生に死といふ事實がなかつたら

仇し野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立去らてのみ住み果つる習ひならば、如何に物のあはれは無

からむ。世に定め無きこそいみじけれ——七段

さり乍ら、なほ、無常を嘆かずに居られないのが人間である。涙の中に眞に甘き汁を吸ひ取りながらも。わたくしは、かく兼好の無常觀を、書中から引用しつつしかも、法成寺の頽廢について「建設者道長が」我が御族のみ、御門の御後見、世の堅めに、行木迄と覺し置きし時、如何ならん世にもかばかり衰せ果てんとは覺してんや云々（廿五段）と述べゆく兼好の筆致、愛情の減じゆきつゝある相愛者の中に醸された無常悲劇を語り、さて最後に、「堀河院の百首の歌の中に、『昔見し妹が垣根は荒れにけり、つばな交りの堇のみして』淋しき景色さる事侍りけん」と、筆を結んだ兼好の情味に富んだ文藻——そこに、わたくしは、かれの觀賞玩味の心持を見落すことが出来ないのである。卅段の「人の亡き後ばかり悲しさはなし」の筆觸の如きは、確かに甘いセンチメンタリズムを以て全段が溢れてゐる。春の賀茂祭の時、几帳にかけた葵の葉の萎れたまゝ、秋まで残つてゐるのを、ぢつと手にして、そこに思ひ出の春を嗅ぐ兼好は、また純眞のセンチメンタリストでなければならぬ。

かれは、移り變るものの上に病的な愛着を持つてゐた。四季の推移に對する惜別觀の如きその顯著な一つである。かれはすでに、眼前の春を春として、眼に入る秋空を秋空として愛することの出来な人であつた。

春暮れて後夏になり、夏果て、秋の來るにはあらず。春は夏の氣を催ほし、夏より既に秋に通ひ、

秋は則ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり、梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず。下より兆しつはるに絶えずして落つるなり。むかふる氣下に設けたる故、待ち採る序甚だ早し——百五十五段

すべてを時間の世界において見る。過去と未來の中において現前の物を観る。然ればこそ、自然界の美も、「折節の移り變ること、物毎にあはれなれ」(十九段)で、その四季叙景の妙味の源泉は、この氣持からでなければ捕捉されない。これを逆にすれば、沙石集に、無住法師が言つてゐるやうに、月の盈虧、花の開落、四季の推移によつて無常をも觀取されるといふことになる。雪と散りかふ花に、無常の影を觀ずれば觀ずるほど、落花の妙趣は増してゆくのである。

二、不完全味の觀賞。不完全味といふ言葉は、こゝにやゝ不適當であるが、これも結局は、前項の觀賞的態度に一致するものである。すなはち、完全美の極限、絶頂において、われ／＼は整齊とか圓滿とかいふ如き快美を味はひうるが、爛熟した物、頽廢した物、不整な物、鈍重な物、不確定な物等に、さらに異なつた美を味はひ得てゐるのである。思ふに、圓滿無缺極上の物に對する時、われ／＼の心は、官能美に奪はれやすく、また、飽滿な満足感のために對象の中核とは離れがちになる。この理は、たゞに事物に對した場合でなく、一般の事柄にも適應して考へることが出来る。

花は盛りに、月は隈無きをのみ見る物かは。雨に向ひて月を戀ひ、垂れ籠めて春の行方知らぬも、猶ほあはれに情深し。咲きぬべき程の梢、散り萎れたる庭などこそ見所多けれ云々。——百卅七段

萬づの事も始め終りこそをかしけれ。男女の情も偏に逢ひ見るをば言ふものは云々——同段

夜に入りて物のはえ無しといふ人いと口惜し。萬づの物の綺羅、飾り、色ふしも、夜のみこそ目出度けれ——百九十一段

神佛にも人の詣てぬ日、夜參りたるよし——百九十二段

何れも、想像上の美を味ははうとする心持の現はれてはいないか。

うすものゝ表紙は、疾く損ずるが佗しきと人の言ひしに、頓阿が、「羅は上下はづれ、螺鈿の軸は具落ちて後こそいみじけれ」と、申侍りしこそ、心優りて覺えしか(中略)。弘融僧都が、「物を必ず一具に整へんとするは、拙なき者のする事なり。不具なるこそ宜けれ」と、言ひしもいみじく覺えしなり。悉て何も皆、事の整ほりたるは悪しき事なり。爲殘したるを、さて打置きたるは、面白く生き延ぶる業なり云々——八十二段

住き細工は、少し鈍き刀を使ふといふ。妙觀が刀はいたく立たず。——二百廿八段

何と、妙趣深い物語りではないか。滋味など稱する趣もこれに準ずべきであらう。兼好の、一面、妻帯を拒避し、(百九十段)四十歳位の死を最も適當とし、(六段)子孫を残すことの不要を説いた如きも、

かれが成熟結實の境地を回避した結果だとも言へる。抑も、趣味観は、時間的意識を必須條件とする。現前の事象が、過去、未來の時間の中にもり上つて、特別な想像を齎して行くそれを指すのである。

三、隱棲味の觀賞。現實社會の俗臭、喧闐、混亂の巷から逃れて、谿谷に入り山寺に隠れる人々も、また等しく敗北者の名をうけなければなるまい。兼好の心持、兼好の撫愛の心は、それらの人々の生活を傍觀し、觀賞する。つぎの如き態度が、この點においても、いかに西行とかれとの間に懸隔があるかを教へるではないか。兼好の通りついた餘裕の世界——それは、紫式部の情緒佛教とも異なつてゐるものである。兼好は、信仰界を全然氣分化してゐる。

不幸に愁に沈める人の、頭おろしなど、不束かに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つ事もなく明かし暮らしたる、さる方にあらまほし。顯基中納言の云ひけん、配所の月罪なくて見んこと、さも覺えぬべし——五段

こゝにおいて、宗教と藝術は、容易に融和する。兼好晩年の互融無碍の境地には、かゝる觀賞的餘裕があつたと斷言してよい。されば、かれは必ずしも一宗の長所を立て、他を邪教視しない。念佛宗のことにも話を觸れてゆけば（卅九段、百廿四段）禪宗の書の引用もする（四十九段）法師程、羨ましくもないものはないといひ乍らさらしに出家すべきを説き、また「ひたぶるの世捨人は中々有らまほしき方もありなむ」（一段）と評し去るに及ぶ心の推移に、兼好の面目がはつきり現はれるではないか。

四、自然的簡樸味の觀賞。一概に興味好尚と言つても、そこには、甚だしい階段がある。世に、惡趣味と呼ばれてゐるものを考へて見るに、自然性を没却し、簡樸味を缺いてゐるが爲めだと言つても、それは敢て獨斷ではないと思ふ。自然味に富み、簡樸味を愛した兼好は、従つて、智的、技巧的なものを排し、奢侈で華麗なものを惡んだ。「智慧出ては偽なり、才能は煩惱の増長せるなり」（卅八段）「すべて人は無智無能なるべきものなり」（二百卅二段）——これは、かれの自戒である。しかし、誰しもそこに、老莊道（道教）についての聯想なしにはすむまい。また、日野資朝が「たゞ素直に珍らしからぬ物には如かず」といつたその言を讀へ（百五十四段）屏風、障子など持物について「さのみ佳き物を持つべしともあらず。損ぜざらんためとて、品無く見惡き様にしなし、珍らしからむとて用無き事どもし添へ、災はしく好みなせるをいふなり云々」とことごとくしい裝飾を排し、「わざとならぬ匂濕やか」に打薰（卅二段）るを殊更に愛し、「人の名も、目慣れぬ文字を付かんとする、益無き事なり。何事も珍らしき事を求め、異説を好むは淺才の人の必ずある事なり」（百十六段）とて、自ら法名を兼好と稱したかれの性格を案ずるに、道教や神道の自然道味に共鳴する點が甚だ多いことが知られる。

自然味の最も現はれてゐるもの——それは言はずもがな、簡樸なるすべてのものである。物質文明は、便利經濟的の名のもとに、すべてを複雑化する。そして不要な虚飾が、その間に蔓延し、人間の遊戯性は徒らにその非實用味（華美）を愛するやうになる。實に、衣、食、住の進歩は、人間の原始性を失

はしめて、人間を自縛自縛に墮おさしめたものと言つてよい。虚飾的文明に對する反噬は、わが文化の一大潮流で、われ／＼は兼好の後に、茶人利休や俳聖芭蕉等多くの人々をあげることが出来る。

八重櫻を愛好したのは清少納言であつたが、兼好は「一重なるよし」(百卅九段)と言つてゐる。秋の紅葉を讚へたのは額田の女王であつたが、兼好は「若楓、すべての花紅葉にも優りて目出度きものなり」(同段)といふ。かれの單純に對する嗜好はこんな點にも出てゐるのである。松平定信が、源氏物語を櫻に、徒然草を「菊もて作りたる薬玉」に譬へてゐるのも、一寸面白い。

さて兼好は、衣食住の單純美を説くと共に、武家文化の徳に倣つて、しば／＼質素の徳を説き、また、赤貧生活の妙趣をも語つてくれる。しかも、それは、單なるかれの空想説や幻想觀ではない。隱者といひ、道心といひ——われ／＼は、兼好をもつて、とかく實生活に縁遠い人間と考へる癖がある。しかるに、かれが華美豪華な生活者を誹謗し、また、徒らに、費途を考へず貯蓄する守銭奴を嘲弄し、さらに「人極りて盗みす。世治まらずして凍餒の苦あらば、とがの者絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはん事、不惑の業なり」(百四十二段)と社會制裁の缺陷に論及するを見るとき、いかにかれの觀察眼のひろく且つとほく及んでゐたかに想及されるのである。

兼好は、京都文化に比して鎌倉氣風にあまりに、粗雑で武骨的なのを不愉快だとした。しかしその單純味だけは嬉しく思つた。松下禪尼が障子紙の切張をして、義景に質素の必要を説いたとの話(百

八十四段)は、質素談だけのものであるが、最さい寺入道時頼についての逸話は、よく衣食における單純趣味を語つてくれるものである。酒の肴に味噌を以てしたとか(二百十五段)足利産の染物を以て女房の小袖に間に合はしたとか(二百十六段)、すべて時頼の儉約を證する諸例は、必ず頼朝や、この時頼等に就ての事のみではなく、當時關東一般の士風であつたに相違ない。「何事も邊土は卑しく頑くな」(二百廿段)といひ、鎌倉の人々の故實に疎いのを難する(百七十七段)兼好が、この質素の點にのみは感じ入つて、特に記載したその心理を思ふべきである。

しかるに、京都文化の内容は、賀茂祭における使廳しよの下部の乗る馬の飾さへ、はなはだ、贅澤を極めてゐた如くに、萬事が過差なつてゐた。師直兄弟が如何に豪奢を極めたか。また、公家達の酒宴が如何に、贅澤に流れてゐたかは、太平記の記事もこれを傳へてゐる(卷廿一及び卷卅三)。もろこし船が、かゝる貨物を「所せく渡し持て」來たのである。久我雅實が、質實な性格から、貝製の飲器で水を飲んだといふ事實さへ、兼好には珍らしい例として考へられたのであつた。(百段)しかもそれら單純さの中に、棄てがたい趣が存するではないか。兼好は、住居に關して「家居のつき／＼しくあらまほしきこそ、假の宿りとは思へど、興あるものなれ云々」(十段)と述べてゐるほど、日常注意をしてゐたことは、五十五段の家の建方についての説明でも分る。しかし、「多くの大工の心を盡して磨き立て、唐の、大和の珍しくえならぬ調度ども並べ」おいた大厦高樓は、もちろんかれの同情を買はなかつた。

たゞ小さくて質素であるのが何よりもいゝのであつた。

今めかしくきらゝかならねど、木立物古りてわざとならぬ庭の草も心あるさまに、すのこ、透垣の便りをかしく、うちある調度も昔覺えて安らかなること心にくしと見ゆれ」——十段

といふ様な、條件がその上加はつて居ればなほ申分無い。兼好はどこ迄も、民衆の味方であつた。

五、可憐味の觀賞。兼好が、如何ばかり弱き者、可憐なる者に味方してゐたかは、色々の方面から述べて來たが、最後に當つて總括的に、更に再論しておかう。兼好は、系圖の示すが如く藤原氏の子孫、大宮人の一人として生を享けた。しかし既に固着した武家時代の精神は、かれをも一武士たらしめずには置かなかつた。かれは、先天的の大宮人精神と、後天的の武家精神との間に立つて、その取捨に最も悩んだ一人であつたのだ。しかし、物のあはれを知る心、をかしさを感ずる心を尊ぶ先天性が、ついにかれを支配せずにはおかなかつた。兼好は、ひたすらに王朝時代を追慕した。しかも、今更殉情的な延喜、天曆時代の生活をするには、かれの理念は、餘りに澄み切つてゐた。自己意識は、いたづらにかれの憧憬を壊すのみで、業平や光源氏の放膽さは到底かれの思ひも及ばないところであつた。

しかし、兼好の個性の價值は、同時に、その一點に憑據してゐることを知らなければならぬ。われ／＼は、わが文學史上、眞に自照の文學を求めるなら、やはりこの徒然草以往に遡ることは出来ぬ。可憐味の如きも、物のあはれ精神の一部分にすぎないものである。しかし、兼好は、はつきり可

憐味の價值を認識して語つてゐるのである。そこに、批判性の伴はない王朝精神とは、根本的相違の存することが知られる。およそ、可憐な舉措によつて、兼好の筆に上つたものは、つぎのやうな人々であつた。

一、久しく訪れぬため、ひどく怨んでゐるだらうと思つてゐた女から、別に恨みがましいことも言はず、『手すきの下男が居りましたら一寸』など、頼んで來る女——卅六段

一、朝夕隔てなく親しくしてゐるに、どうした調子でかに、禮儀正しい態度を自分に現はす友——

卅七段

一、興味ふかい話を多數の人の傍で話す様な場合、極くのどやかに、只一人の相手に話しかける人——五十六段

一、漢の國から天竺に渡つて行つた法顯三藏が、古郷の扇を見て涙を催うしたといふ話をきいて、かへつて三藏の人間らしい處をほめた弘融のやうな法師——八十四段

一、他人から何事か依頼されると、斷つていなむことの出来ない氣弱な京人——百四十一段

一、傍輩が、子供が無いと言ふのをきいて、子供を持たなければ物のあはれも知るまいと返事したある荒夷——百四十二段

すべて、かくの如き類に依つて全部が推測されるだらう。それは一面、謙讓美と言つてもよいかも知

れない。この方面については前説もしたことであるからそれを御参照ありたい。

わたしは、もう、このあたりで兼好論を結ばねばなるまい。かれ兼好は、詩文、和歌、管絃、唄、書道、手工、繪畫などの學ぶべきをあげて、藝術の人生に必須な點を明らかにしてゐる。かれの描いた繪は、現今にまで傳へられてゐるが、それほど、かれの藝術生活の豊富さを想像出來よう。「命あるものを見るに、人許り久しきは無し。蜻蛉の夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづく一年を暮らす程だにもこよなう長閑しや」(七段)と、かれ自身がかいてゐる人生を、その長閑な心持で靜かに心豊かに送るのが、かれの晩年のすべてであつた。「其の物に付きて其の物を費し害ふ物、數を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり」(九十七段)この言葉は、兼好においてのみ、語戯に終らず戒となつたのではあるまいか。かれ位、一法師で、法に害はれず、しかも出家生活をして意義あらしめたものは珍らしくはあるまいか。

人は天地の靈なり。天地は限る所なし。人の性何ぞ異らん。寛大にして極まらざる時は、喜怒是に障らずして、物の爲に災はず——二百十一段

何といふ偉大な宣言であらう。西行は、彼岸の者とはいへ、寛裕の點には終生、兼好の驥尾にも附すことが出來なかつた。

延元元年(兼好五十歳)正成の戦死するあつて、後醍醐帝の吉野御蒙塵となつた以後、とかくに南風は競はず、翌二年には、金崎城陥り、尊良親王は薨去し給ひ、同四年には、帝、御躬ら吉野行宮において御崩御遊ばされた。

「陰晴不定、兼好法師來、和歌數奇者也、召藤前謁」とは、その年から十年後の貞和二年(南朝正平元年、兼好六十四歳)閏九月六日のことで、例の園大曆中の一節である、その日兼好は、公賢の邸を尋ね歌談など交へたものと見える。なほ、同年に出來た風雅和歌集(花園上皇の御旨で、藤原公隆、同爲基、同爲秀等の寄人の撰進したもの)に、兼好の歌が一首選入されたのも、かゝる交らひの結果からであらう。さて、かれの生活について最後に、

佛になりても何かせん、道を成しても何かせん、一切、求め心を捨てはてし、徒ら者に成りかへりて、兎も角も、私にあてがふ事なくして、飢え來れば食し、寒來れば被るばかりにて、一生はて給はゞ、大地をば打はずとも、道をうちはずす事は有るまじき

かうした明惠上人の如く大陰朝市にあつて、しかも自由無碍な境地が、そのまま兼好にあつたといふことは、こゝに斷じかねるが、それと程遠からぬ心境であつただけは再び繰更して言つておきたい。

正平四年(北朝、貞和五年)兼好は、横川において、法華經を寫し、また、顯基中納言記をも著作

した。そして頓阿と伊勢旅行に出かけたといふのが、一般の傳へとなつてゐる。時に、齡はすでに六十七歳ではあるが、さうした旅もかれにはありさうな事に思はれる。伊勢といふのは、阿野明神參詣のためだつたが、歸途、伊賀の田井の庄に立寄つたことが、計らずも臨終の地を定めることになつた。

兼好の身體は、生來蒲柳の質であつた様に思はれる。かく無常觀を強く抱くに至つた理由も、これと關係してゐるかもしれない。かれは、四十歳位で死ぬるのを得として、老軀を抱いて長命する人を嘲けり、また、人命の塵の如くはかないことを口にしながら、しかも驚くべく醫藥に關して神經質であつた。徒然草中に、醫藥を衣食住と並べて四大必須品としてゐること（百廿三段）、すでに全般が推されるけれど、さらに、學ぶべき物の中に醫學を加へ（百廿二段）友とすべき者に醫師を入れ（百十七段）輸入品は藥物のみ必要であると述べ（百廿段）空地あらば藥草を植うべきを勸めてゐる（二百廿四段）。かれ自ら、醫書を繙いてゐたことは、百七十一段に依つても知られるけれど、ともかく、かれの衛生法がよく、六十餘歳の長命をかれに與へたものとして推斷される。

田井の庄に立寄つた翌年、すなはち正平五年（北朝觀應元年）二月、天はかれに、なほ以上の命をかさず、かれの生命を黃泉に送つた。かくて、かれは伊賀の三國山の麓の土と化したのである。そこは、言ふ迄もなく、傳へにかれの戀人だつたといふ成忠の女の墳墓の地であつた。

芭蕉

紫式部と西行、西行と兼好の間には、共に前述した様に一世紀宛の間隔があつた。しかるに、兼好の寂後、一百年、われ／＼は、なほ、文聖の出生に會することが出来なかつた。その後約三世紀近い時代を経た十五世紀半にして、われ／＼は、始めて伊賀上野の地に、呱呱の聲をあげた俳聖芭蕉を持つたのである。

願れば、兼好寂後足利氏の崩壊を見るに及んで以後、天下にはさらに一日として寧日を見ることが出来なかつた。戦國時代は、安土桃山時代に連り、そこにやゝ統一を見たけれど、なほ元和偃武（十五世紀の始め）の代迄は、庶民の心はそのおちつきを得難かつた。

兵燹の絶えない亂世に、却て、特色ある文學の存すること、すでに西行論や兼好論において、見て来た所である。故に、この三世紀の争亂時代が、その騷擾のために、文學を生み得なかつたといふのではない。否、われ／＼は藝術の綜合的天才の世阿彌や、第二の西行と見るべき宗祇などを、その間

に認めることが出来る。しかし遺憾ながら、かれらの藝術には、自照の精神がなほ缺除してゐた。換言すれば、未だ、かれらの藝術にはかれら自らの生活の裏づけが足らなかつた。かれらは、混沌たる世相の内底に徹しようとする餘裕を持たなかつた。

思へば、徳川の三百年の泰平を生むまでには、わが民族は、かなり長い陣痛の時代を過ぎて来たのである。わたくしは、兼好の時代を説明するに、對立といふ一語が最も恰好であることを言つてゐた。西行時代そのものがすでに、公武の兩立時代ではあつたが、それは寧ろ、武士興起の時代と稱すべきである。一度、公家精神を壓迫した武家精神に對し、更に公家精神の再起對立をなしたのが兼好時代に外ならない。

しかるに、わが民族は、いつ迄も、この一國の運命を公武の二階級にのみ委ねておくことを快いとしなかつた。恰も、公武の鬭争、武と武の内訌の隙間に乘じて、新勢力を延ばし得たのは、新興の庶民階級であつた。一草履取りの身から天下を取り得た豊太閤の一生こそ、よく、この趨勢を語つてゐるものである。なほ、清正は鍛冶職であつたといひ、正則は桶屋職であつたといふ。もちろん、かれらは庶民的精神を以て武家階級に入り、武家で終つたものであつたが、庶民的血を享け、庶民的生活を續けながら、なほ勢力と位置とを確保する、いはゆる、町人階級の萌芽は、安土桃山時代から存續して来た。公家には、公家として與へられた賦性がある。武家と庶民にあつても同様である。そして

鼎立した三勢力が、各々その着くべき地位に着かうとする試練の時代こそ、元和偃武から元祿に及ぶ七十年の間隔に外ならぬ。

人間精神の一生が、絶えざる理知と情意の闘ひの連続である如く、時代思潮の推移と展開にもまたそれがある。しかし、精神生活におけるこの運命的矛盾が、却て、精神向上の動機をなしてゐる事實は、また、何といふ人生の妙味であらう。かくて時代も、その悩みを続けながら、紫式部時代、西行時代、兼好時代——と時代を經過して、こゝに芭蕉時代迄辿りついて来たのである。これを人間一生に比するならば、童貞時代、青年時代、壯年時代を経て、始めて成年時代に入つたものとも思ひ得られるのであらう。それはまた中世浪漫主義時代の第一期、第二期、第三期を經過して、近世初頭に文藝復興時代を持つ泰西文明史の足跡にも、それを準據せしめることが出来るであらう。

元祿時代の特色は、實に、既存の要素も新來の要素も、すべてが渾然として、かの南北朝時代や院政時代の如く、對峙してゐない所にある。もちろん江戸中心に武家精神があり(意思的)京都中心に公家的情操的精神があり(理知的感情)大阪中心に町人の情緒的精神があつて(感覺的感情)、その生活基調も、武家は道、公家は學、町人は官能欲にあつたやうに、差別は立てられるけれど、三者は互に自らを立てながら、他の特色を抱擁する寛大さを持つて居た。わが芭蕉の藝術は、かゝる背景を取り離しては到底、了解しがたいものである。

わたくしが、この短かい芭蕉論において、なほ、かれの環境を多少とも明確にしておきたい要求を持つことを、諸君もかならず會得して下さるに相違ない。

第一、意志的環境について。

時代的意識の上に、意力の明瞭に顯現されるものは、まづ政治と道德との上においてある。われは、元祿時代の誕生において、すでに元和偃武から半世紀餘を経てゐるとはいへ、その武家政治武家道德の持つ、殊に強い意思力を認めざるを得ない。

家康は、新に江戸に幕府を開いて、そこに譜代の家臣を移した。かれはそこで、武家精神を中心にした文化を打立てようとしたのである。

かれが既に、文祿中、名護屋の陣中に、藤原惺窩を召して儒道をさき、また後には、林道春や舟橋秀賢等をも引見したりして、文教に力を注いだことは人皆の賞する所であるが、かれが學問を保護したことは、すべて政治のためであつたことを知らなければならぬ。僧崇傳をして珍書を傳寫せしめ、紅葉山文庫の成つたのも(寛永十六年)金澤文庫を江戸に移したのも(慶長七年)伏見に學校を建てたのも、また江戸に畫家や樂人を集めて祿を與へたのも、すべてある意味ではかれの政策の一つであつたといふに憚らない。幕府の顧問となつた儒者林道春の如きも、律令制度を作つてゐるのも、やはり

それがためである。家康には、秀吉の如く藝能を藝能として愛玩する心の餘裕さが無かつた。鷹揚さが缺けてゐた。こゝに、一面 徳川氏三百年の基礎も造られたのであつた。

かくて家康は、武士の據るべき道徳を樹立して、天下の庶民にこれを規準たらしめようとした。古來武士道として認められた徳目に、服従、武勇、廉潔、質素等がある。しかし、未だそれらの基礎をなすものがなかつた。幸ひ、惺窩が長崎で朱子の大學の註を見て以來、程朱の學を奉じてゐたので、家康はその朱子學を幕府の官學とした。すなはち、この新しい儒學を利用して、武士道的新道徳の根本たらしめたのである。惺窩の門人に林信勝があり、かれが朱子學を以て幕府に仕侍して以後、林家は代々官學の家として、湯島聖廟の傍の昌平校に教鞭をとり、林信篤の時、大學頭の地位を得た。かくて家康の政策は、巧みに圖星に當つたのである。諸侯の間にも（藤堂家や加藤家の如き）争つて名儒を招く風を生じて來、後光明天皇すら程朱の學を講ぜしめ給ふといふ有様で、他方には孔子家語や貞觀政要などの印刷をも見、その印刷術の發達と相俟つて、宋學は博く内地に普及していつた。

徳川時代の特色を以て、道徳中心の時代とした學説もある。道徳が果して時代精神の中心になり得たか、否かは、多少疑問とすべきであるが、わが文明史において道徳的意識の最も明確になつたのはこの時代を始めとする。それは上述の様に、家康の文教獎勵の政策に負ふ所が多かつたのである。いはゆる道徳書と稱すべき書物が、後を追うて著述された。惺窩の假名理性、羅山の三徳抄その他、藤

井懶齋の大和爲言録など、すなはちそれであつた。これはやゝ後の時代に屬すけれど、室鳩巢の六論衍義和解や、貝原益軒の益軒十訓の如き庶民に及ぼした影響は、絶大である。世にいふ心學が興されたのは、石田梅巖からであらうが、その以前すでに存する心學五倫書や心學教訓書、心學問答などといふ如き心學の文字を冠する書に、心學の前驅と見るべきものも少くない。

小説の構想に、教訓を加味せしめることは、古來からあることで、さして珍らしくは無い。しかし小説を全然道徳の方便として描いたのは、やはりこの徳川時代の初期からである。かの假名草子中の教訓物と稱せられる一類がそれで、その多くは、善玉惡玉的の極く低級卑近な教訓物語であつた。

元祿時代の文學者として芭蕉と比肩される近松。かの近松の作に現はれた道徳觀も、甚だ幼稚なものである。芭蕉の周圍の庶民は、始め虐げられた善玉が、漸次に擡頭して惡玉を墮してしまふ筋に、やんやと喜んで拍手したのであつたらう。しかし、俳諧それ自身にさへ、かゝる世相の反映がある。芭蕉の前において心の俳諧を立て得たかの鬼貫の俳論は、立派なものであるが、その「まこと」論はあまり、道徳的傾斜を持ちすぎてゐる。文學を道徳的規範の中に押込みすぎてゐる。かく如何なる事柄に於いても、これを五倫の道にあてはめて、見ようとするのが、當時一般の思潮であつた。

しかし、われ／＼はこゝに、一步立返つて考へさせられる。武士的道徳は、無論、武士の生活に與へらるべき規範であるけれど、武士自身の本領は、その武力乃至その決斷力にあるので、干戈の間に

超人的武勇を現はしてこそ、自己の満足も得らるべきものである。しかも元和偃武以後、太平の世に處して、徒らに道德的掣肘を被る日常生活の望ましくないことは言ふ迄もない。かれらには、武士道を遵奉する所にも満足があつたけれど、何物の束縛もこれを受けず、己が意力を十分に發揮せしめる生活に對する讚美の念がやまなかつた。この性向は、當時、武士階級においてのみならず、宏く庶民の胸中に迄、浸潤していつてゐた。

われ／＼は、その反映を、文學の間に十分認め得る。假名草子中の、お家騒動、敵討、武者修行等を題材とした幼稚な武家物、浮世草子の時代物等それであつて、元祿時代は人の呼ぶやうに遊惰な時代とはいへ、かの爲永春水の作に寫された世相に比較すると、如何に武士的氣分の餘蘊があるかを知り得るであらう。慶長見聞集といひ、備前老人物語といひ甲陽軍鑑といひ、軍書著述が續々出されたのも、社會的要求に應じたものに相違ない。

江戸は、上方に比して、この色彩が殊更、濃厚であつた。江戸淨瑠璃は長く、十二段草子の武家物で、岡清兵衛の金平本がいつ迄も愛誦された。江戸歌舞伎の市川團十郎が荒事物を以て、名を立て得た理由もこゝに存してゐる。庶民の徳目の一つとして重んじた意地の精神や、吉原遊女の特色となつた張りの氣持なども、盡く、武士的精神を引いたものであること言ふ迄もない。

文人などと言つても、當時は、武士の末であつたものが多かつた。如備子、正三といふ如き假名草

子作者も武士の出であり、貞徳、宗因、近松、契沖など、何れも武士の血を享けたものであつた。従つて、かれらの筆致には、自ら武人的の張りがある。かれらの性格には武人的の意地がある。(西鶴は町人であつたが、その筆意における鋭利さには、時代的反映と認むべきである)しかるに、かゝる武家的精神は、文學の上に影を淡くして行つたのみか、年と共に時代の風尙の中から取り去られて行つた。將軍吉宗の改革、松平定信の革新、水野忠邦の英斷などは、何れも、没落してゆくかゝる武家的氣質を再燃せしめようとする足掻きに外ならなかつた。

わが芭蕉も、また、田舎侍の末であつた。(「繪詞傳」等)かつかれの祖先には、源平三烈士の一人である平宗清があつた。わたくしは、こゝで、直ちに西行を聯想する。二人の間には、何といふ著しい暗合が存することであらう。俵藤太秀郷の子孫である西行の生涯が、武士的精神によつて始めて、完全に解釋出来ることは、その際論じたのであつたが、八九歳(この年齢については一定しない)の時、すでに上野城主藤堂良精の嫡男良忠の近侍として仕へ初めた芭蕉の一生も、武士的遺勁味によつて一貫されてゐる。芭蕉は、古人の中、西行を最も私淑した。追慕した。五百年に近い時代を隔て、兩者の肝膽は互ひに相照らしてゐるのである。

しかし、西行は禁裡に奉侍するちやき／＼の都人であつたが、芭蕉は伊賀の山奥に生れた浪人者の子にすぎなかつた。芭蕉の性質には、西行の持つ幹竹を打割つたやうなすなほさが無い。どうかすれ

ば鈍重になりがちな武家魂が残つてゐる。その生地、城下の上野といふ町は、どこか京都に髣髴たるものがある。芭蕉は、その生れ故郷で良忠の小姓といふ生活から門出したのであつたが、次郎兵衛物語によれば、十五歳の時元服をさして貫つて半七郎の名を興へられた。田舎侍、しかしそれは、輕蔑したものでもない。宗因にしろ、近松にしろ、何れも芭蕉に劣らぬ田舎出であつた。元祿文化の大成は、既に輕薄な都人のよくなし得る所てなく、口さがない京童わらべに嘲笑された田舎者の始めて、これを遂げ得た所であつた。

寛文時代といへば、かの元和偃武を遠ざかること、早くも半世紀である。儒者によつて諸法度は定められ、制度は漸く完備していつたけれど、すでに時世は王朝時代の如く泰平無爲な社會を顯出しなかつた。一方では、オランダ印度商會使のフリシユウスが音訪れてくる(芭蕉六歳の年)と他方ではまた鄭成功が援を求めてくる(芭蕉十五歳の年)。内では内て、幡隨院長兵衛が旗下に殺された噂が立てば(芭蕉七歳の年)、その翌年には由井正雪が叛いて誅された事實が報せられる。將軍家光が薨じたのは、恰もその年に當つてゐるが、かれに殉死した武士數名が出た。元和の代迄、長い亂世に育てあげられた士風は、寛文延寶の御代にも、機會毎に勃發しかけた。

しかるに、芭蕉が二十三歳の年(寛文六)、かれにとつて寵恩の厚かつた主君良忠が頓死したのであつた(自殺?)。芭蕉は、その時たゞちに殉死しようとしたとも傳へられてゐるが、さうしたことは、

武士的芭蕉にいかにもありさうな事實である。ともかく、當時殉死の禁令は藤堂家からも、また、幕府からも重ねて出てゐたといふ風で、その望みは到底遂げられなかつた。芭蕉は詮なく出家しようとしたが、それも藩主及び父に障ぎられて、かれは遂にその年(?)辭官して郷里を出奔したのであつた。二十三歳と言へば、丁度西行遁世の年齢とこれも符合してゐる。

かれは、遁世後數年の間、京都、難波、或ひは西國にと漂泊に近い月日を送つてゐたが、寛文十二年(二十九歳)志を抱いて、江戸に下つていつた。それから、かれはその江戸を第二の故郷とするに至つたので、世人はかれを江戸の俳聖とさへ呼ぶ。芭蕉が、かく江戸にわが居を定めた理由には、京都での歌の師匠の季吟が江戸の和學所に来てゐたとか、季吟門下の知人が江戸に多かつたとか、新興の都市で糊口の資が得安かつたとか、様々の原因をあげることも出来ようが、第一には江戸の持つ氣分に、芭蕉自身が共鳴したこと、それは忘れることは出来ない。後年蕉風はむしろ、濃美中心に普及していつたけれど、芭蕉は「秋十とせかへつて江戸をさす故郷」で、つねに江戸に歸つてゆくことを忘れなかつた。かれは、遂に京都の文人でも無く、難波の文人でもあり得なかつたのである。

更に、傳によると、芭蕉が江戸に下つた時の伴れに、定林寺の默宗和尚があり、かつ、伏見の任口上人から佛頂和尚へ宛てた紹介状を持つてゐたといふ(次郎兵衛物語)。この眞否の考證はこゝに別と

して、芭蕉と禪宗の關係の多いことは、諸方面から考證され得る。禪と武士との關係は、また甚だ深い。武士道の秘奥が禪悟であるとせられ、澤庵和尚がよく柳生十兵衛をすら禪力に依つて意の儘にしたといふ傳説もある。のみならず、林道春が家康に仕へる迄は、武家の顧問といへば、多く禪僧であつた。すべての點から、芭蕉が臨川寺において佛頂和尚と禪話を替し、佛頂から與へられる所が多かつたといふ因縁の遇然でないことを思ふ。天台的の紫式部と兼好、淨土的西行——から並べて禪的の芭蕉に思ひ及ぶ時、やはりかれの特質がそこにも現はれてゐるやうに思ふ。

芭蕉の初期の句中にさへ、われ／＼は多くの禪的臭味を見出だすことが出来る。しかし、連歌は里村紹巴時代から武家の心得べきものとなつてゐたが、偃武の世となつても俳諧は武家の遊びの一つとなり、かつそこに禪坊主で同時に連歌師であつたものの多かつたことを思へば、野狐禪的の言辭を弄する輩も少なくはなかつた。そこで芭蕉の延寶二年出家の時詠んだといふ「散らば散れ千里(イ草一條)一風の鐵線歌(芭蕉翁句鑑)」といふ句の如き(？)大悟徹底を證するものだといふ説は以ての外である。

ある知識の宜はくはなま禪大疵のもとひとかや。いとありがたく覺えて

稻妻に悟らぬ人の貴さよ

奇 李 下

稻妻を手にとる闇の紙燭哉

寒山自畫自贊

庭はきて雪を忘るゝ箒哉

或ひは、虚栗の跋文の中に「栗といふ一書其味四あり、李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る、これに依て其句見るに遙にして、聞くに遠し云々」といふ類、さては、付句に「一棒に打たれて拜む三日の月」的の禪味、すべて同程度のもので、かれが敢て俳諧禪を樹立しようとしての上のことではない。佛頂や默宗などといふ手合ひも隱逸な雅人て俳諧の一節も分つたので、芭蕉はこれと昵近し、また自分の好きな禪話にも耳を傾けた迄のことであつたらう。

芭蕉談といふ本を見ると、「ある日幻住庵にして、終日丈草に對して芭蕉の物がたり有けり、正秀かたはらに在て、是を聞に、一事として其意を會せず、其後龍が岡にまかりて、其事を丈草に問、丈草云、我問ところは言語の芭蕉にあらず、禪の芭蕉なり、正秀問、禪の芭蕉とはいかん、丈草云、山は唯青山、雲はたゞ白雲、はせをば實に、達摩なるはといへり」とある。いかなる方面においても、祖師たる人が門下から神祕化されることは止むを得ないが、芭蕉は達摩の第何世と呼ばれることを以て喜ぶやうな人間ではなかつた。しかし、「佛籬祖室の扉に入らんとし」た若き日の志を全うしたら、かれもまた一禪僧になつてゐたことはこれを想像して餘りある。(澤庵の死んだのが芭蕉の三歳の時であり、隱元の支那から歸つて來たのが十一歳の年にあたり、禪宗は益々流布してゐた)宗長、宗鑑は一体と

其角は大巖と、嵐雪は濟雲と、丈草は玉堂と、杉風は大龍寺和尚(?)と、蓼太は白隱と、園女、捨女はそれ／＼雲虎並びに盤珪と、關係があつたやうである。其角が大巖和尚から殊更允可など與へられなかつたことは、芭蕉の參禪と同程度のもので、大巖の力によつて其角が始めて芭蕉の一弟子となつた譯でもない。他の俳人の場合もすべてこの類であつて、われ／＼は、俳味と禪味と共鳴する點を示されたらそれで十分である。さりとて、わたくしは、芭蕉を以て禪的悟境を知らないものと言ふのではない。結跏趺座の方式を會得しないものに、却て、禪境の存するといふ所に、禪宗の妙趣もあるのではないか。

芭蕉の持つ遁勁で鋭利な方面——それを詮策すれば、その他、かれの文章に現はれた強いリズム、かれの句に現はれた主觀の燃焼、かれの性行に現はれた意思力等をあげることが出来るが、最後の節に、これを譲つてこゝには説かない。

路通の芭蕉行狀記といふものを見ると、「兼好も終を伊賀國にとりて侍と傳へしに、此人やふたゝ世に生れて、末の風雅を起しけん」と、いとゞしたわるゝ」と、芭蕉を以て兼好の再生の如く解釋してゐる。全く兼好の寂した土地と稱せられる田井の庄は、芭蕉の生地とは、その間數里許しかない。芭蕉は、貞享四年歸國した時も、萬菊丸(杜國)と同道で兼好の故跡を尋ねてゐる(芭蕉翁全傳)。

芭蕉と兼好の間には、また共感さるべき性格の一致がある。しかし、芭蕉にあつて兼好にないものは、かうしたダイオニサス的態度であつた。兼好の追憶の世界は、王朝時代に終始してゐた。然るに芭蕉の憧憬は、むしろ、武家時代の人の上に存してゐた。そこに個性上の溝渠が出てゐる。芭蕉のもつ兼好的傾斜を説くのは、これをつぎの節に譲るのが穩當であらう。

第二、情操的環境特に尙古的精神について。

元祿時代を以て、文明史家の、泰西の文藝復興期ルネサンスに比較してゐることは、大體その當を得たものといつていい。如何なる時代においても、多少尙古的復古的精神の現はれないことはないが、われわれは既に兼好においても見たやうに、その多くは、淡い憧憬的のものであつて、智的に古代的精神を認識しようとする程度のもではなかつた。どうしても、眞に、文藝復興期を期待するならば、ある點迄の理知的精神をそこに必要とする。元祿時代は、この意味に、有史以來學究的態度の最も確立した時世である(單に詩的な尙古的保守的態度だけのものでも無くして、すべての物につきその根元に遡上り、その本質的なもの、素朴なものを把握しようといふ強い要求が擡頭した時世であつた。

漢學にあつては、江戸の官學(朱子學)に對し、京都の明經博士舟橋秀賢が、古注を採つて對抗したのは、單に公武的感情の齟齬だけの原因ではなかつた。かの伊藤仁齋父子が、同じく京都において、

古學を樹立した精神にも、強い復興的要求が充分窺はれるではないか。

同様、國文學にも復古運動が行はれた。その中、和歌において、かの下河邊長流の寛文十年林葉累塵集を撰出したのは、堂上家に對する手ひどい挑戦であつた。元祿時代にはその鋒銳も顯著になつて戸田茂睡は、梨本集の中に堂々と祕事口傳的態度の無意味なことを批難した。これは、契沖の萬葉集研究に力を添へたものであつて、荷田春滿、徳川光圀といふ様な復古思想に諒解ある學者や後援者が次々と現はれ出た。やがて、眞淵や宣長の萬葉集、古事記等に對する眞面目な研究の出るに及んでわが國民全般の被つた影響は實に大きいものであつた。古典全部に亘つた註釋、紹介の業は、寛文頃を轉機として、勃然と興つて來た。かの惺窩が、徒然草野槌をかいて、徒然草を平易に解いてから、貞門あたりの俳人の手によつて、續々、古文の註釋書が作られた。貞門の俳諧は、その特色として、古歌や故事を付合に利用した。かうした關係から梅盛とか季吟といふやうな一廉の學者が出たのも當然で、その他にも古典を民衆化するに力あるものが多かつた。この間に、源氏物語の梗概をかいた「雅源氏」的のもの、儒學を物語化せしめた「清水物語」また、訓點づきの漢籍を刊行した鶴飼石齋などの書も交つてゐた。また、その書名にさへも、尤の草子(枕草子に出づ)仁勢物語(伊勢物語に出づ)犬つれ(徒然草に出づ)といふ如きパロディーがあるといふ風で、學界は靡然として、古典尊重の氣勢に向つたのである。貞門の將貞徳や、談林派の將宗因が各々俳諧を弄びながら、なほ、自らは歌

人乃至連歌師であるといふ慢りを棄てなかつた理由は、かうした世相を背景にして始めて會得される。林道春が弘文館において本朝通鑑を編纂すれば、徳川光圀は彰考館において大日本史編輯の事業を始めるといふ如き、すべてかゝる文藝復興精神の反映でなくて何であらう。

次に、宗教上において古神道の稱道されて來たのも、これらと同等の一現象に外ならぬ。「本朝は神國なり」との思想は、鎌倉末期時代から兆したものであつたが、それが系統化されて來たのは、やはりかの契沖以後である。伊勢の度會家の人々、荷田春滿それ(古神道の研究者であり、また山崎闇齋は、所謂、垂加流神道を創始した。これらが、一般國民生活に、深く結びつく迄には、なほ、相當の日子を要したけれど、かうした復古思想が足を揃へて一時代に興つたことは、如何にも愉快な現象ではないか。

われ(は)は、最後に一般的藝術にあつても同様に、箏曲、箏歌の復活や、土佐派の繪畫の隆盛等を見ること出来る。殊に、土佐派の分派なる、住吉一派(如慶や具慶)の擡頭は、狩野探幽や英一蝶などの江戸畫家的の行方に對し、古い純日本味の繪畫を復古せしめるに預つて力があつた。恰も、江戸の朱子學に對し、上方に古學の隆盛を見たとき、好一對の状を見せてくれる。なほ、土佐派の本系からは、土佐光起の輩出して、漢畫派に對し大いに氣勢をあげ得た。また、次節に述べる浮世繪の勃興の如きも土佐派と離すことの出来ない關係を持つてゐる。

さてかゝる時代精神は、芭蕉の性格の上にかに反映して来たか。われ／＼は、直ちにその多くのものをそこに見出ださうるのである。

こゝには、まづ芭蕉の文學的門出から語り出さなければならぬ。文學的天賦において、西行がその一族の中に孤立してゐたやうに、芭蕉も、その近親の間に藝術的稟賦の者を持つてゐない。多數の兄弟もあつたやうであるが、何れも凡庸であつたらしい。只、芭蕉より長生した一人の兄は書に長じてゐたと見えて手蹟の師匠などを片手間にやつてゐたやうである(芭蕉正傳)。その血統からであるか、芭蕉の書も近侍時代から主君に知られたほど立派なものであつた(次郎兵衛物語)。かれ自らも「筆は半學なり」と言つてゐるが、その後も雲竹に師事したこともあつて、かれ獨特の妙境を見せてゐる。

嵯峨日記には、書を練習して日を暮らしてゐる所がある。江戸に出た時、執筆になつたとか筆耕をしたといふ傳へのあるのも、萬更な虚傳ではあるまい。芭蕉は、假名の方に巧みてあつたが、あの氣骨のある筆威は、よくかれの個性を表はしてゐるではないか。しかるにまた、漢字に於いては、むしろ、假名に近い婉曲さを持たしめてゐる所、どこ迄もかれの趣味と合致してゐる。

それはさて、こゝにかれ芭蕉が、文學界の人として延び出たに就いて、忘れることの出来ない恩人があつた。それは前説の幼君良忠その人である。兩者の關係は、西行と後鳥羽上皇、兼好と後宇多上

皇のそれと餘り遠からざるものであつた。すなはち、良忠は、藤堂良勝の嫡孫ながら、風流の道を娛しみ、和歌を冷泉家に學んでゐた外、芭蕉を殊に愛して、自ら蟬吟と號し、貞門下の季吟の流を受けてゐた。芭蕉も、その因縁から、早く句作する機會を持つことが出来たのである。

しかし、貞門派の俳諧は、後の蕉風に比して、殆んど文學的價値に乏しく、重んずる所、連句では詩歌附、發句では縁語といふ風で、文學とはいへ機智を圖かはず遊戯にすぎなかつた。當時の作として傳へられる芭蕉の句は幼稚見るにたへないものである。それでも、かれはいつか、文學青年らしい氣持に誘はれていつた。蟬吟の死に遭つて、身の振り方に困じたかれに、最も靈感を持つてゐたのは、やはり、この文學の世界であつた。郷里を出奔したかれは、蟬吟の關係から京都に季吟の門を叩いたり、伊丹に、伊丹風の開祖鬼貫を尋ねたり、また漸く新流を樹立しようとしてゐる難波の宗因の門に馳せ参じたりした。季吟は、當時萬葉集訓點注釋を續けてゐた時代で、芭蕉の助力をうけたといふ芭蕉談などの傳も、まづ信じて然るべきであらう。

かつ、季吟の藏書には、多くの古書があつたらう。芭蕉はそこで、未知の古歌集に接し、耽讀することも出来たであらう。芭蕉ほど、古人を拉して來て、それらに純眞の禮讚を捧げ得た人は珍らしい。歌人では西行、定家、實朝、詩人では樂天、李白、杜甫を最も私淑した。はるかに定家の骨をさぐり西行のすぢをたどり、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るべき族が、俳人の中でも最上のものと、

かれは言つてゐる。

かれが、西行に對する追慕には、ほとんど、狂的のものがあつた。素堂は、それを「此翁、年頃山家集にしたひておのづから粉骨のさも似たるをもつて、とりわけ心とめ云々」と書いてゐる（甲子吟行跋）。先づかれは西行の畫像を人にかゝせて持參してゐる（雪外老人の書翰）、書法も西行の跡を學び、山家集はこれを身から離さず愛誦した。また、西行の遺跡といへば、どこ迄も尋ね入るといふ風で、

露とくどく試に浮世すゝがばや

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

西行の庵もあらん花の庭

柴の戸の月やそのまゝ阿彌陀坊

蟻よりは海苔をば老の賣りもせて

西行の草鞋もかゝれ松の露

又越えむ小夜の中山初かつを

といふ如き、西行に關した發句も多い。後年の奥州旅行でもほとゝ西行の足跡を辿つていつたといふ風である。芭蕉談中惟然記によると死床にあつて喘ぎつゝも、なほ「西上人の道心をしたひ云々」と、繰更えしてゐる。しかも、われ／＼の氣付かれる兩聖の相違は、西行は歌人であり、芭蕉は俳人であ

つたといふことだ。その間には、嚴乎とした個性の差別、到底乗り越すことの出来難い障壁がある。芭蕉が如何に、西行の心境を憧憬しても、その境地は、俳句的リズムにこれを盛ることは不可能なのである。西行の心は單純、しかも芭蕉の賦性をもつと複雑だつた。芭蕉は元祿といふ環境を脊負つて、終生純一を目指して悶ゆべき人の運命にあつた。しかし、われ／＼は、西行を私淑した芭蕉の方に、西行以上の偉大さを認めずには居られないのである。

風になびく富士の三里に炙すゑて行方もしらずあゝく西行

この狂歌は、芭蕉自身が西行の「風になびく富士の煙の空に消えて行方も知れぬわが思ひかな」を疑つて作つたものであるが、こゝに愈々兩聖の特色が見えるではないか。芭蕉には、到底西行のもつ幻妖的奔放が存し得なかつた。芭蕉は、あまりに冷たかつた。かれの煽は、水の上のみ燃えた。かれの行脚は、決して西行のそのの様に、「行方もしらず」歩いたものではなかつた。

芭蕉は、歌學には興味を持たなかつたらしい。芭蕉の態度として、勿論さうあるべき筈である。

嵯峨日記によれば、その際持ち合はしてゐる書物に、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集等の名が見える。（尤も、これは、庵主去來の物かもしれない）「見て悪き書とはなし、儒佛より國書、其外、謠、淨瑠璃本もみるべし」（俳諧芭蕉談）と、かれ自ら北枝に言つてるやうな譯で、かれは暇にまかして手あたり書物をよんだものらしい。しかしまづ、その書が國文に縁の多かつたことは當然であ

らうし、徒然草や土佐日記を文章や乙州に講義したことも、俳諧芭蕉談に出てゐる。殊に、徒然草について支考と議論したことなどあつたらしく、支考がそれを「つれづれ草の讚」といふものの中に記してゐる。元來つれづれ草は、前述の徒然草野槌が出た頃から、急に普及したものであつて、その後汗牛も只ならぬ程注釋は出たが、芭蕉にもあまり愛讀されはしなかつたらしい。徒然草は詩味に乏しい。そこにその短所がある。

芭蕉が、當時、難波において宗因と會したかどうかは問題である。傳説としては、芭蕉が郷里出奔後、直ちに宗因を尋ねたともいひ、芭蕉は宗因と一緒に筑紫旅行をしたとも言はれてゐる。しかし、ともかく廿四五歳の一文藝青年が、宗因のもとに押しかけに尋ねてゆくやうなことは、ありがちなこととて、直ちにこれを虚傳として却けるのはどうかと思ふ。(一説には、蟬吟と宗因とは交際の間柄であつたとも云ふ)

宗因が談林派の主將として名をあげたのは、怖らく大阪獨吟集の判者となつた以後であらうから、當時は未が一介の連歌師と見る方が適當かもしれない。ともかく、かれが談林門を確立して以後の働き振りには目ざましいものがあつた。貞門の定めた規約を全然無視し、主として心附を以て、縦横無盡にかきなぐつた。一日四萬の句をよんで四萬堂の名を得た西鶴は、實に宗因配下の猛將であつたのである。しかも、芭蕉の江戸に下つていつた翌々年は、江戸談林の創始された年でもあつたが、その

頃の芭蕉の句は、甚しく談林調をおびてゐる。

お靜かに御産れ夕陽いまだ殘んの雪

といふのが、宗因自讚の句であるから、これで談林調の句の全般が推測されるであらう。未だ十四歳であつた其角が、芭蕉の弟子として最初に入門して來たのも、その延寶二年(芭蕉卅一歳)の事であつたが、其角の詠む句まで、ほとんどその談林調であつたのである。

なほ、芭蕉の初期の句を通じて注目される點は、漢學の影響である。その一つは、漢詩的表現法、その二は、老莊的思想。

かれが、樂天、李杜の輩を賞美したことは前述した通りであるが、かれは詩作を學ぶ機會を、始め田中桐江に、後には門入素堂に得ることが出來た。同じくこの兩唐詩人の中では、杜甫の詩をより多く愛してゐた。それは、旅人としての西行を追慕するかれの心持に一致する所である。(尤も、李白のことも、何かに言つてはゐる虚栗跋の芭蕉洞桃青といふ署名などに、全然異國趣味を知りうるけれど、その桃青といふ別號は、どうもその李白といふ號からの思ひつきらしい(室鳩巢の説))その虚栗といふ集は、天和三年(芭蕉四十歳)の年、其角が編輯したもので、芭蕉の初期、所謂次韻時代と呼ばれてゐる俳風を最もよく代表するものである。前掲の「李杜が心酒を嘗て云々」の跋文をなほ、迎つて見れば、「佗と風雅のその生にあらぬは西行の山家をたつねて人の拾はぬ餘栗也」とあり、署名の下

には「鼓舞書」とまで書き添へてある。芭蕉の氣概を思ふべきと共に、その俳風はこゝに一層注意を要する。

憂方知酒醒貧始覺鐘神

花にうき世我酒しろく食黒し

眠を盡す陽炎の瘦

鶴啼て青鷺夏を隣るらん

童子磔を手折る唐梅

月を濁す汀の蓼を芦かりて

浪のさゞれにたなご釣る影

芭蕉
一 品
嵐 雪
其 角
嵐 蘭
執 筆

かく連句の味は、ほとんど七部集第一の冬の日などと優劣を見ない程である。しからば、かれはどうして談林調から身を早く、かくも蟬脱せしめることが出来たのであらうか。

わたくしは、これを談林派の常用した佶屈な漢詩調と、晦澁な老莊思想の内化にあつたと言ひたい。一種磊落な調子で贅牙な漢語を並べることが、等しく談林派の用いた所であり、芭蕉の初期の句にも甚だ多い。しかし、それは必ずしも李杜の詩心に觸れ得た内容的のものではなかつた。いはば豪勢な時代精神を文の上に反映せしめた程度のものに過ぎなかつた。西鶴の筆致に見うるかの逸宕的氣分を

漂はしめる程度に過ぎなかつた。

しかるに芭蕉は、漢詩を心讀し得たがために、それらの詩心を俳諧の中に移植し得た。殊に、前述の杜子を愛誦したことは、虚粟の中に「老杜を懐うて」との題で、「髭風を吹て暮秋嘆ずるは誰が子ぞ」と詠んでゐることと全般が知り得られる。(これは、杜甫の詩の「杖藜嘆世者誰子」による)しかし今少し例をあげると、

あふみ路を通りぬける比日野山のほとりにて、胡麻といふものに上のきぬとられて

剥れたる身には砧のひびきかな

(これは、杜詩秋興八首の一、寒衣處處催三刀尺白帝城高急暮砧によるか) 借も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ

夏草や兵どもが夢の跡

(これは、勿論、かの春望の國破山河在、城春草木深かとつてゐる)

その他の文致に就て見ても、鹿島紀行の「頗る人をして深省を發せしむ」といふ句(これは、遊龍門奉先寺の令三人發深省に出づ)奥の細道紀行の「負へるあり、抱けるあり、兒孫愛するが如し」といふ松島の叙景(これには、諸峰羅立似兒孫の暗示見ゆ)等は、何れも杜詩に關係がある。芭蕉は奥州行脚の際にも杜子の詩集を携帶してゐたらしいが、この松島の叙景が杜詩に負ふ所あることを思

へば、奥の細道全部が持つ適勁簡結な妙趣を以て、漢文と縁の深いことは断言してよからう。「老杜は瘖せたり」(幻住庵記)「杜子が方寸に入る云々」(曲水への書)といふ様な芭蕉の片言をその他に求めるなら、なほ少くない。

さて、こゝに「枯枝に鳥とまりたりや秋の暮」(後に、とまりけりと改めた)の句が、寒鴉、枯木の熟語の鱗案であるか否かは、直ちに断じ難いが、わたくしはこれを、一片の談林調の句であると排し去る説には同意しかねる。芭蕉が、未だ、五七五といふリズムに落付き得ずに、止まりたりやとしたことは、必ずしも機智的遊戯的にこの句をなしたといふ理由にはならない。かれの十分治定し得ぬ粗剛な精神生活は、却て、止まりたりやといふ強い韻律を要求したのではあるまいか。こゝに若し、雪舟の硬く強い線を以て枯木に寒鴉が配せられた作があつたとするならば、それを、止まりけりと叙するより、止まりたりやと表現する方が、この場合適當ではあるまいか。

廿日餘の月かすかに見えて、山の根際いとくらきに馬上に鞭をたれて數里いまだ鷓鴣ならず。杜牧が早行の殘夢小夜の中山に至りて忽驚く

馬に寝て殘夢月遠し茶のけふり

これは、虚栗の出來た翌年、東海道を下つていつた紀行(甲子紀行)の中にある一節である。杜牧云々は、積翠抄にもあげられてある通り「垂鞭信馬行、數里未鷓鴣、林下帶殘夢、葉飛時忽驚、霜凝孤

鶴廻、月曉遠山横、僮僕休辭險、何時世路平」といふ詩を指したもので、馬に寝ての句は、なるほど殘夢、月遠しなど、ごつ／＼はしてゐるが、如何にも漢詩味を餘分に含んでゐる。われ／＼には、表現上から、(直觀内容は別として)この句に對し何等持ち出すべき抗議を有さない。こゝに、「馬に寝て朝日淡く茶のけふり」と改めた方がいゝといふ人があつたとしても、それはこの場合、論ずべき事柄ではない。見よ、「ひとり芳野のおくにたどりけるに、まことに、山深く白雲峯に重り、煙雨谷を埋て、山賤の家、處々にちひさく、西に木を伐音東にひびき、院々の鐘の聲心の底にこたふ云々」(甲子紀行)の吉野山の叙景、「高山奇峰頭の上におほひかさなりて、ひだりは大川ながれ、岸下の千尋のおもひをなし、尺地も平らかならざれば、鞍の上しづかならず云々」(更科紀行)といふ木曾路の描寫、さらに「江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸をせめ、酒田の湊より東北の方山をこえ磯を傳ひいさごを踏て其際十里、日影や、かたぶく頃、潮風眞砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。云々」(奥の細道)といふ象潟の眺望の文脈。しかも、誰かよくその漢文脈の存するものを嗤ひ去り得るであらうか。わたくしは、たゞ、顯然として芭蕉の持つ漢文漢詩の體驗を知るのみである。

そこで、「虚栗」の後に出了た「冬の日」を以て、芭蕉が漢詩的影響を洗ひすて、獨自性を開いたものであるといふ説は、餘り早合點したものであるまいか。かれが、歿した前年(元祿六年)かれは、弟子の荆口に次のやうな書を送つてゐる。

時鳥聲横ふや水の上

聲や横ふか

一聲の江に横ふやほととぎす

水光樓天白雲横江の字横句眼なるべしや、ふたつの作いづれにやと推敲難定所云々。

この一例は、かれが如何に晩年迄、漢詩的技巧、しかも文字の使用法に迄、緻密な注意をしたか分るではないか。そこにわれ／＼は、古文辭學的な修辭的用意と共に、かれが漢詩の持つ奇峭味を愛する一面を是認しても差支へはあるまい。

芭蕉と老莊道、次ぎに生ずるこの問題は、かなり複雑なものに相違ないが、これをも、わたくしは大膽に前同様な解決をしたい。なるほど次韻時代迄のかれの句は(發句にしても付句にしても)、隨分亂棒に生嚙りの故事漢語を並べた様に、老莊味を書きなぐつてゐる。たとへ、すでに芭蕉自身が、莊子の説に共鳴を見出だし得てゐたとしても、かれは、それを文學内容に移して、その味を出すことを考へてはゐない。其角が先頭に立つて、その奔放な態度と奇警な用語に基いて、吐き散らしたのが延寶時代全般の風調であつて、田舎の句合(延寶八年)の其角の序を見ると(この句合の判詞を芭蕉が書いてゐる)。

——章のふつゝかに、語路の巷のまがり曲れるをもつて、田舎とは名付たるなるべし。仍以これに翁の判を得たり。判詞莊周が腹中を吞て希逸が辨も口にふるす。遠くきく大江の千里は百首の

詠を詩の題にならひ、近所の其角は芭蕉に詩をのべたり。あゝ千里同腹中なることを知る。しるといへば我是をしるに似たり。しらずしてこゝに筆をとる、又是しらざる也。

とある。「判詞莊周が腹中を吞て」の句は、句評の最後が「栩栩齋桃青漫探毫判」となつてゐるその栩栩齋の號の意味を説明してくれてゐる。判詞はまして、老莊味たつぷりて、常盤屋之句合の一例をあげると、

第三番

左持

芹とる翁碧潭に望んでこはいかに

右

防風ゆるく吹て青酢漸く垂り

碧潭に望んで芹とる翁、薄氷をふむかと危きに、防風ゆるく吹て、青酢の水解初たるも、のどけしや。左右のけぢめいづれかと筆をかざして、はるかなる向うの岨道をみれば、髭むさ／＼と生たる老人、早わらびの杖にすがり、忽然と來たり、芹をあなどるべからずばうふうを捨べからず、我は是此山にかくれ住む野老先生と云ものなりと云て即うせぬ

これは必ずしも、老莊味の明瞭なものではないが、芭蕉自身の持つ幻想性を見るにこれに十分であらう。思ふに、未だ若いかれは、一種の妖怪趣味、惡魔趣味(強盜などの句が多い)などを抱いてゐて、

それが幻妖的老莊道と一致して、荐りに筆端に出たものと考へられる。

しかし、遂にかの老莊的共鳴は、一時的のものでなかつた。かれが田中桐江に莊子を學んだ機縁は、連綿として、かれが歿後、大津無名庵に遺した品の中に、莊子の一卷をさへ見出だすことが出来得た程となつた。

莊子の畫讚

もろこしの俳諧とはん飛ぶ小蝶

といふやうなかれの句も傳はつてゐる。嵐蘭の誄をかいては「老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間にあそばしむ」といひ、箋虫跋をかいては「其無能を感ずる事は、ふたゞ南華の心を見よとや」といひ、更に閉關說の中には「南華老仙の唯利害を破却し、老若を忘れて閑にならむこそ、老の樂とはいふべけれ」とも記してゐる。こゝに老莊思想はすでに、かれの完全な精神的糧かてとなりきつたのである。わたしは、なほ惟法に與へたかれの書簡中の逍遙游の文を参照して見たい。

逍遙游

道に逍遙の二字あることは、心に天游有て世におもしろがらんといふことなり、天はこれをえて月清く、地は是をえて花咲り、鳶と魚とはひらめきて遊ぶもの也、野馬は風にうかれて遊ぶものを、草くふ牛の飽てしづかなる、蛇は其の尾に遊んとすれば、うしのぬしはとまらせてうたん事を思ふ、

はたとうたれて悲しからんは、遊ぶ時の心にかへよ、其ぬしの牛にはぢかれて二なき鼻のかけたるためしもあらん、すべて遊ぶことは先にして、苦ぶことは後なり、誰か遊んでくるしまざらん、苦しまずして遊ぶ人は世にありて何人ぞや、世に實あり、虚あり、實に遊ぶ人は虚にくるしづ、誰か實なく虚にすゝむ人はある時のあるにぞ、いとど苦しむべき、虚に實あり、實に虚あらば虚實は虚にして自在なるべし、むかし莊周が夢に胡蝶と遊びしも、觀音の花によめ入せられしも、素より虚もて虚をとかねば、まして實をもて實をとかず、かゝる聖人の虚をさして、今の人もいうて遊ばざらんや、此故に春に成ては、川狩に遊ぶ、茸狩の時は浪人をあそばしめ、鷹狩の時には大名を遊ばしむ、寔よく天の遊ぶものにして、貴賤貧福は人の苦しむなり。

一、逍遙遊先書は反故に可被成候書直し進候我もこれに遊ぶものに候へば深く苦しみも候はず候故おもしろき事なくお約束の茶はいかに候哉まら申候以上

この文はいつの時代芭蕉の草したものか不明である上、自ら断つてゐるやうに草稿のまゝである。なほ、芭蕉論には誰も引用する一節であるが、わたくしは、今少し立ち入つてこれを考へて見たいのである。それは、この一文がまづ

花に遊ぶ蛇な喰ひそ友雀

起よ〜我友にせんぬる胡蝶

といふ様な芭蕉の句の聯想から出立する。それから、

はひ出てよ飼屋の下の墓の聲

むざんやな甲の下のきりくす

などいふ句の想起に及び、さらにかれが一般の遊樂的精神に考を及ぼす。この精神は、芭蕉が俳諧を遊んであるとか、俳諧は老後の樂しみてあるとかいふ俳論的方面からと、没我愛と幻住の實生活の方面からと兩面から見得られるけれど、これは、最後の項目に譲つてこゝには説かない。

なほ、今一つこの項目について、總括的に見ておきたい芭蕉の精神は、かれの歴史的興味である。

尙古癖は、怖らく文學者一般に共通した特色であると言つてもよいが、紫式部の古代めいた物に對する趣味、兼好の王朝時代の憧憬の如く芭蕉にはそれがはつきり現はれてはゐない。少くとも、かれは口に出して、末世觀を語つてはゐない。しかし、かれは古往の文學者を追慕したやうに、由緒ある事物には、殆んど骨董的態度を見せてゐる。かれの書簡集の中にある、

今宮村天神のまつり見申候、扱々古風成事に御座候右天神の由來貴庵に御座候由今承り少之内御かし可被下候以上、梅石へ

大松戸井戸がへに而、錢三百文ばかり出候と承、みな古錢のよしめづらしき事に御座候、先年も山

田にて左様な事御座候と承候、明日納所へ御かり、私にも御見せ願入候(梅石へ)

これらの文は、共に、兼好に見たかの考古癖を忍ばしてくれてはゐないか。しかし、芭蕉はその點に兼好程の熱心さを到底持つことは出来なかつた。芭蕉の旅行が、聖者の跡を辿り、伽藍建立の喜捨を受けに歩いた西行の旅と異なる點も、かゝる歴史的趣味にある。かれの紀行文は、海道記や東關紀行的の記録的なものではないが、しかも、かゝる芭蕉の癖は自ら、その文の行間に洩れ出てゐる。

まづ甲子吟行の旅であるが、その間伊勢神宮、西行谷、當麻寺、吉野藏王堂、西行草庵跡、後醍醐帝御廟、山中常盤の墳墓、熱田神宮、奈良二月堂等所謂名所舊蹟を歴訪し、すべて述懐を凝らしてゐる。

御廟年を経て忍は何をしのぶ草

義朝の心に似たり秋の風

しのぶさへ枯て餅かふやどり哉

水取や籠りの僧の沓のおと

何れもいゝ出来榮で、次韻時代に到底求め難い作ではないか。

かれには年とる丈、かうした癖が募つていつたのであるらしい。次の「笈の小文」の旅については、惣七に宛てた次の様な書簡さへ残つてゐる。

三月十九日伊賀上野を出て三十四日、道の程百三十里、此内船十三里駕籠四十里歩行路七十七里雨に逢ふこと十四日

瀧の數七ツ 龍門、西河、蜻蛉、蟬、布留、布引、箕面

古塚十三 兼好塚、歌塚、乙女塚、忠度塚、清盛石塔、敦盛塚、人丸塚、松風村雨塚、通盛塚、越中前司盛俊塚、河原太郎兄弟塚、良將楠塚、能因法師塚

峠 六ツ 琴引、躰峠、野路小佛峠、檜尾峠、クツカリ峠、當麻當屋

坂 七ツ 粧坂、西河上ちいか坂、うはかり坂、宇野坂、かふり坂、不動坂、生田小野坂

山峯 六ツ 國見山、安禪嶽、高野山、てつかいが峰、勝尾寺の山、金龍の山

此外橋の數、川の數、名もしらぬ山は書付にもらし候、

最後の「書付」といふ言葉によると（笈の小文には、すでに「其處々々の風景心に残り、山館野亭の苦しき愁も、且つは話の種となり、風雲の便りとも思ひなして、わすれぬ處々跡や先やと書侍るぞ、猶醉る者の妄語にひとしく云々」と言つてゐる）この紀行文は、全部の拔萃だけのものにすぎない。熱田神宮や伊勢神宮にも重ねて參詣してゐる。その他、伊良古崎（「いかなる故にや萬葉集には、伊勢の内にえらび入られたり」と考證してゐる）俊乘上人舊跡、初瀬、三輪、多武峰、吉野、高野、和歌沼、浦、唐提寺、須磨、木曾、娘捨山、善光寺なども江戸歸參迄に訪うた主要な名所古寺の數々であつた。

丈六に陽炎高し石の上（俊乘上人舊跡にて）

若葉して御目の滴ぬぐはゞ（唐招提寺鑑真和尚の像に）

須磨寺やふかぬ笛さく木下闇

これらは、多くの述懐句の中に光つてゐる句である。

おくの細道の紀行文は。三大紀行中第一位にあるが、また、芭蕉の古跡趣味が最もよく出てゐる。

俳人ながらも歌名所に對しては、また殊更の興趣を持つてゐた。途中尋ねた古跡の主なるものは、室ノ八島、犬追物跡、玉藻前古墳、那須八幡宮、殺生石、西行柳、白河關、かげ沼、安積沼、黒塚、もぢ摺石、佐藤庄司舊跡、武隈ノ松、宮城野、野田の玉川、沖の石、末の松山、鹽がま、松島、平泉、羽後の三山等なほ多い。

等射が宅を出て五里ばかり、楡皮の宿をはなれてあさか山あり。道よりちかし。此あたり沼おほし。かつみ刈ころもや、近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ぞと人々に尋ね侍れども、更にしる人なし。沼を尋ねて人にとひ、かつみくんと尋ねありきて日は山のはにかもりぬ。鹽摺白石の城を過、笠島の郡に入ば、藤中將實方の塚はいづくのほどならんとへば、これよりはるか右に見ゆる山際の里を、みのわ笠島と云、道祖神の社かたみのすゝき今にあり、とをしゆ。此頃のさみだれに道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながらながめやりて過る、袋輪笠島もさみだれの折にふれたり。

笠じまはいづこ五月のぬかり道

壺 碑

市川村多賀城に有

四國國界の數里を記す。此城神龜元年按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所里也天平寶字六年參議東海東山節度使鎮守府將軍惠美朝臣朝德修造也十二月朔日と有り。聖武皇帝の御時に當れり。昔よりよみおける歌枕おほくかたり傳ふといへども、山崩れ川落て道あらたまり、石を埋て土にかくれ、木は老てわか木にかはれば、時うつり代變じて其跡たしかならぬ事のみを、こゝに至て疑ひなき、千載のかたみ今眼前に古人の心を聞す。行脚の一徳存命の悦び羈旅の勞をわすれて涙も落るばかりなり。

この最後の古跡を尋ねることを以て、「行脚の一徳存命の悦び羈旅の勞をわすれて涙も落るばかり」と迄叙した芭蕉の心持——そこには寸分の誇張すら混つてゐない。

夏山に足駄ををがむ首途かな (修驗光明寺行者堂にく)

早苗とる手もとや昔しのぶ摺 (忍もち摺石を見て)

さみだれの降殘してや光堂 (中尊寺金色堂にて)

ひざんやなかぶとの下のきりくす (齋藤實盛の遺物を見て)

月清し遊行のもてる砂の上 (氣比明神にて)

これら各所における述懐の句もその一例證となるであらう。

殊に、細道の讀者をして感ぜしめるものは、かれがこの大旅行をおへて大垣に入り、多くの弟子に迎へられた時のことである。かれは、ある人から近日伊勢神宮の遷宮式の行はれることを聞いた。そこでそのまゝ、

旅のものうさもいまだ止ざるに長月六日になれば伊勢の遷宮拜まんと又舟にのりて

蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ

と句を残して、いそぐと出立した。これは宛ら忘水に記された話と好一對であらう。それは、

一年大和法隆寺にて太子の開帳あり、其比太子の冠見落し侍るとて後の開帳にまた趣かれしなり。かゝる古代のものを心にかけて旅立たれし師の心の程、思ひやるべし。

といふので、これらから、われ／＼は、芭蕉が歿年西下した理由は、「長崎にしばし足をとめて、唐土からの舟の往來を見つ聞馴れぬ人の詞も聞んなど、遠き末をちかひ、首途せらける云々」といふ陸奥衛の一節をも信じたくなる。全く、かれは幾度か旅中遭遇すべき危険をも物とせず、多病頹齡の身ながら、更に、九州路を辿うとして、その途中、難浪て遂にあへなくなつたのであつた。

兼好が、一寸した民謡の原義といふやうなことに、注目してゐたこと兼好論中に述べた通りであるが、この傾向は芭蕉には殊に著しかつた。その一二例をあげて見ると、

風流の始めや奥の田植歌 (おくの細道)

これは奥州における特殊の田植風俗について述べたもの。

其夜(注、芭蕉の鹽竈に宿つた夜)目盲法師の琵琶ならして、おく淨るりと云ものかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うちあげて枕ちかうかしがましけれど、さすが邊土の遺風、わすれざるものから殊勝に覺らる。(おくの細道)

最後の一句よく芭蕉の好尚を語つてゐるではないか。かれは、また、鉢叩きをきくのを非常に喜んだ。かれの俳句の中にも鉢叩きについての句が二三出てゐたと思ふ。これはその一つ。

鉢叩き聞にとて翁のやどり申されしに、はちたゞきまいらざりければ、「箒こせまねてもみせん鉢叩」去來、明けてま
いりければ、

長嘯の墓もめぐるかはち敲たき

諸君は、本論の始め、わたくしが芭蕉に潜む武士的精神を説明した時、第二節のために言ひ残した方面を思ひ出されるであらう。これについては、本節でも多少觸れて来たことであるが、なほ、かれが古戦場において如何に武士的な感慨を抱いたか、また、いかに義仲に對して追慕の情を持つてゐたかについて述べ、以て、本節を結ぶことしよう。これは必ずしも、かれが古往を謳歌したとか憧憬したといふ意味でなく、むしろ、悲劇的美への陶醉であると解釋される。生の格闘において一は勝ち一は負け、かくして繰更される流轉相に對し、感懐の涙を濺ぐといふ詩人の心がそこにある。「笈の小文」中の鐘掛松より一の谷内裏やしきを瞰下して叙した文、「奥の細道」中の高館の上から眺めた平泉の描寫の如き、いかに短かい詞藻の中によく全景が躍如として出てゐることか。平泉の文は誰も知る處であらうが、この機會に今一度こゝで默讀して貰はう。

三代の榮耀一睡の中にして大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成て、金雞山のみかた

ちを残す。先、高館にのぼれば、北上川南部よりながる大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入る。康衡等が舊跡は、衣が關を隔て南部口をさしかため、夷を防ぐと見えたり。さても義臣めぐりて此城に籠り、功名一時の草むらとなる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢のあと

「笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ。」芭蕉は、ほんとうに、こんな場合に泣きえた男であつた。なほ思ふ、かゝる素諄な文章を、式部、西行、兼好の誰が果して書き得たであらうか。やはりそこは芭蕉独自の境ではあるまいか。それは時代的影響からのみではない。よく芭蕉の個性の然らしめたものである。芭蕉には、西行程の決斷力と情熱性はなかつた。しかし、兼好のやうなおちつきに籠りつゞけることも出来なかつた。かれの胸中は、靜平のやうで、いつも、ざはくくと小波が立つてゐた。

芭蕉は、遺言して遺骸を義仲寺に葬らしめた。かれが義仲寺を選んだことには、少くとも二つの理由が考へられる。琵琶湖の眺望を愛したこと、今一つは、義仲に對する追慕の情とである。所謂凡兆日記といふものは、眞偽の疑はしいものであるが、その中に、芭蕉は幻住庵の閑寂眺望この上ないことを弟子に語つた後、

我歿後、魂の休處は木曾寺と兼て各に申置侍る。人生不定なれば明日にても鬼録につかば、此事は

違へ給ふな、去來、丈草別て大津の若き人々、能く聞置給へかし。

と言つてゐる。凡兆もこれを評して「幻住庵と木曾寺と咫尺同席の間、魂魄うつる間もあらし。嬉はしと給ひけり」と言つたが、芭蕉の口吻にも大津附近の地に、江戸の地とまた特別なおちつきを見出し得たことが窺はれる。義仲寺の所在は、殆ど湖畔と言つてよい、その附近は芭蕉がそれ迄佳句を得た思ひ出の多い地である。また、元祿三年の七八月頃から同四年三月頃までゐた庵も木曾塚無名庵と言はれるやうに、その寺の境内にある。しかし、わたくしは、芭蕉の胸中になほも、ある義仲を求めてやまないのである。たゞ、こゝに便るべき資料の乏しいのは、何にして遺憾と言はねばならぬ。例の「木曾殿と背仲合せの寒さ哉」の句が、芭蕉の作でないことは言ふ迄もない。敢て他に求めるなら

義仲の寢覺の山か月悲し

これは、おくの細道の旅で芭蕉が、嵯山の義仲の遺跡をよんだものである。それには、殊に深い感慨も出てゐない。元來、義仲は武人中でも殊更無風流者とされてゐるやうに、その意味では、俳人の同情を得る筈もないが、それ丈一面かれの心はシムブルであつた。まるで子供のやうな可愛さがあつた。結極そのためかれも敵の術策におちたわけて、その點、頼朝など、比して、芭蕉のやうな人間に一掬の涙を濺がれる値があらう。かれは、全然山出しの武士を代表して生れたかの様に思はれる。後節でいふが、六祖五平や佛五左衛門の無知を愛した芭蕉が、かゝる義仲と同じ地に葬られることを、床し

く思つたといふことは、極めて自然な事ではあるまいか。

以上、わたくしは、過去の世界が芭蕉を作り出した領分について、大體これを纏めて述べ得たつもりである。その芭蕉の俳句に現はれ出た點は、これを、官覺とか強い情緒とかいふより、むしろ、情操的ともいひたい世界であらう。しかし芭蕉が若しそれだけの世界に止まつてゐたら、遂にかれも俳聖と呼ばれるに至らなかつたであらう。わたくしは、なほ、かれの他の境地について進んでこれを述べなければならぬ。

第三、官能的及情緒的環境について。

ベエターが云ふ。文藝復興の精神は、古典研究の念と同時に、現實尊重の念があつて、始めてその運動が完結され得たのであると。わが元祿文化の特色もその通りであつて、古典尊重の精神と共に實證的精神の浸潤が、いかにも鮮かであつた。平家の没落後、程遠からぬ内に、その榮枯盛衰を詠つた叙事詩平家物語が世に現はれ出た。夢の様に權力が崩壊したといふ點に、秀吉の一生はまたかの清盛に比較すべきである。しかも、大阪城の餘燼を見ながら、その人々には、すでに平家の興亡を目にした人々の様に、かくも詠嘆的な詩心が涌かなかつたのである。特に新興階級の人々にとつてさうだつ

た。それは、結極、かれらにとつて過去よりも、現實の方がいかに興味多いものだったからである。これには、經濟界の變動といふことが大きに關係を持つてゐる。

群雄割據、小國分立の時代の國家經濟は、殆んど地方的であつた。しかるに元和偃武以後、殊に參覲交代制の設けられてより、經濟狀態は地方的から益々國家的に移つていつた。かくて色々の關係から、大阪北濱には米相場所が成立し、それが全國の相場の中心をなすに及んだ。この物資融通の發達といふことは、諸物價の騰貴を來し、殊更見る／＼米價の高騰を見るに到つた。さうしてかゝる時世に實力を十分發揮し得るのが、實業階級(町人)であり、最も打撃をうけるものは、俸給生活者でなければならなかつた。この理は、明治維新開港後のわが國狀においても認め得られる。徳川時代の俸給生活者の大部はいふ迄もなく武家である。矢叫びのきかれる戰亂の世こそ武を以てかれらは立ち得たれ、偃武時代には立つ瀬を知らない。そこに、武を以て天下をとつた徳川幕府の政策は、われ自ら己が入る墓を掘つてゐるやうな矛盾を内包してゐた。武士の中には、鎧を質入れて貧乏をしのぎ、漸く軍談物や江戸淨瑠璃に昔を忍び慰安を得てゐるものも多かつた。かの仙臺藩が貧困のため參覲交代の費用にさへ窮してゐたといふことは、いかに武家が町人の術策の中におちてゐたかを想見せしめる。町人にとつては貨幣が萬能なのである。かれらは、漸く「手習指南所」的の處に入り、數字と算盤の術を知つてゐる程度の文盲であつたけれど、貯蓄の術にはどの階級よりもたけてゐた。一家にありたきは、梅櫻松楓それよ

り金銀米錢ぞかし(永代藏)といふ一節は、よく町人の生活振を語つてゐるではないか。大阪が、殷盛を極めた様はこれらで思ひやられるであらう。「總じて北濱の米市は、日本第一の津なればこそ一刻の間に五萬貫目のたてり商もある事なり(永代藏)」といふ風で、おさむらひそのけの豪勢であつた。さればかれら町人に、歴史も傳統もあつたものではない。追慕も尙古もあつたものではない。裸物語といふ名の物語のある如く、かれらは何等のためらひもなく身を赤裸になし得た。(この氣合には、禪の力も加はつてゐる)。また、當時の物語の表題を見よ。いかに、當世、浮世、世間、今様等の冠辭がそれ／＼についてゐるか。悉てが現代的でなければ、町人階級には通じなかつたのである。

しかし、貯へただけではその金のはけ場がない。かれらは貯蓄と共に、これを使用した。その使用にかれらは、如何なる方法をとつてゐたか。かれらは、それを盡く自分の享樂のために用ひた。特にわが官能欲の満足のために使つた。しからば、そこに顯現される世界は如何なる社會であつたであらうか。いふ迄もなく、放逸無頼な歡樂的修羅場で、すべてが「好きなこととして遊ぶに若かず(阿蘭陀二番船序)」といふことをモットーとする。たとへば、蓮如上人が、世人に無常を悟らしめるために、「朝は紅顏あれど夕は白骨」と戒め給うたものを、當時の人々は、かくも短かい人生なればこそ、刹那も惜んで享樂せずに居られようといふ考へを、それから導き出したのである。そこには、これ迄あまりに虐げられて來た平民階級の反動的態度も勿論ある。幕府は、慶安二年、延寶二年といふやうに

幾度も儉約令や奢侈禁止令を發布してゐる。しかし、それらの効果は、殆んどなかつた。「内裏様にも見せたし」といふのが、難波江の豪奢な舟遊びで、京の難波屋十右衛門妻と、江戸の石川六兵衛妻との衣裳較べの贅美な様は、武家を始め一般庶民をしてその舌を巻かした。その他、紀文、奈良茂といひ(以上江戸)、中村屋といひ(京都)、或ひは茨木屋といひ淀屋といひ(以上大阪)大名に大金を融通する大富豪が三都の界に澤山あつた。

しからば、かれらの享樂の世界は、如何なる種類のものであつたか。文學に遠い町人に、兼好のいふ讀書の趣味など分りやうがない。結極、手取り早いものは、肉的の快樂であつた。西鶴の書いた一代男の主人公は、浮世之介の名通り肉的享樂者であつた。「我は後家を靡ける事度々なり」といふ様な點に、淫靡極りのない風が熾り切つた事實が想像されるが、「今時の娘さかしくなりて、仲人を悶かしく、身拵取り急ぎ駕籠待ちかね、尻輕に乗り移りて悦喜鼻の先にあらはなり」と一代女にも書かれてゐる。その通り、女性自らの貞操觀がすでに變つてしまつたのである。これでは、男性の方からまづ三舍を避けなければならなかつたらう。

しかし、町人の一般的享樂といへば、かうした戀愛でなくて、一つは遊里の中にあり、二には歌舞伎並に淨瑠璃等の演藝の上にあつた。遊女を以て女郎様と様づけて呼ぶのが當時普通であつたが、これは遊里の世界の權威あつたことをよく現はしてゐる。さうして、遊蕩の果ては、「島原通ひすぎて家

賃流るゝ(男色大鑑)で、商ひて利した財や親譲りの富も、二三月の間にはたき出す者も少なくなつた。どこ迄も、當時の人々は「人間遊山のうはもり色里に増すことなし(好色二代男)」といふ調子であつた。これには、一般庶民の貞操觀が弛んだとはいへ、なほ現代などと異り、男性は容易に戀の機會が與へられなかつたに反し、遊里が甚だ自由寛大にその機會を提供したといふ理由も存してゐる。しかも、經濟界の變動は、昨日の大商店も今日は炊煙をさへ立てかねるといふやうな様々な悲劇を生むに到つたため、身賣女も増して來た。しかも、朝に大阪新町の後朝を惜しみ、夕には、京島原の夕月を眺めるやうなことは、西行も知り得ない娛しみなど、遊客はしやれてゐたのである。遊里に出入するものの大部分は、致富の町人であつたが、武家にも地領を持ち富有な者は、豊後節をも口荒み、投節の一鎖でも歌ふといふやうになり、やがて遊里に通ふものすら出來た。遊里においては町人と雖も武士とよく平等の地位を保ち得た。そこは、金と戀の世界で、階級といふやうな儀禮は役立ち得なかつた。柳原侯や尾張侯の如き大名さへかゝる廓内に入出したと噂されたが、その實否の問題は別として、これらで遊里が如何に享樂的別天地を形成してゐたか推測され得るだらう。

歌舞伎並に淨瑠璃も、かゝる世相を背景にして始めて發達し得たものである。歌舞伎は最初専ら女歌舞伎と言つて女役者のしたものであつたが、ために劇場は變態的遊里となり、尠からぬ餘弊を生じたために禁止の厄に遭つた。しかし、それに代つて出た野郎歌舞伎にも、かなりの弊害は伴つて來

た。ともかく、芝居は享樂的世相に投じていよ／＼熾になり、江戸の市川團十郎に對し、上方では坂田藤十郎が出るといふ風で、殊に難波では道頓堀三座といつて、互ひに出し物を相争つた。しかし、淫蕩の思潮には所謂ぬれ事が歓迎されて、傾城買ひの場面のある戯曲が多く演出された。観客は、舞臺上の遊治郎を見てやんやと喜んだのである。淨瑠璃といへば、誰しも大近松を連想する。近松が作物において重きを置いたものが、時代物であつたことと言ふ迄もない。しかし、その時代物がやはり元祿時代を環境として生れ出たものであることは、その一曲を點檢した者の直ちに首肯する所である。かれの作中の時代的人物には、殆んど、時代的心理が出てゐない。元祿時代人が、王朝時代や鎌倉時代の服装をつけたまてのものが多し。かくて、かれが一度世話物、情死物、すなはち巷説を脚色化してこれを世に出すや、忽ち沸騰するやうな大好評を博した。かゝる結果の生ずることについては世相を考察すれば、分りすぎた程自明な理であらう。

さて、元祿藝術の第一特色を、寫實的にあるとする論は、異論のないことであるやうに思はれる。わたくしもこれを否定するものではない。例へば、歌舞伎における貞享以後の寫實風（坂田藤十郎の所作の如き）繪畫における浮世繪風の隆盛（菱川師宣や鳥井清忠の作の如き）、俳諧における談林派の寫生的態度、浮世双子に見る寫實的筆致——何れとして、寫實的といふ提案の實例とならないものはない。しかし、寫實の眞義が、沒主觀的に存することは言ふ迄もない、その態度は、先づ冷靜を要し、

凝視の力を大切とする。われ／＼は、寫實の態度におけるかのフロオベルの如き嚴肅さを思ふ。しかしらば、元祿の諸藝術家に果してかゝる銳利さと嚴肅さがあつたか。遺憾ながら、描寫のための描寫といふやうな態度は、未だ、かれらには考へ得られなかつた。

談林派についても、前節で數言を費した所であつた。貞門派あつて談林派の出來たことと言ふ迄もないが、もと／＼俳諧と稱するものは、近々、貞徳が犬子集を出した寛永十年からのものである。かつその俳諧の主眼となるものは、自由に、滑稽機智を詠むといふことにあつた。貞門の勢ひが談林に奪はれた理由も、結極、この主眼が不徹底だつたからである。貞門の俳諧は、未だ連歌の影響を蟬脱せず、法式めいたものに拘泥して、俳諧の主旨に戻るものがあつた。しかるに、談林派は、殆んど心附的の連ね方で、専ら奇抜、滑稽で人の度膽を貫かうとした。かうした態度のもとに、喜ばれる材料が現代のものであるべきことは述べる迄もない。元來、貞室は益屋某であり、西武は綿屋某であり、未得は兩替屋、玄甫は人形細工師といふやうに、相ついで町人生えぬきの俳人も出たからでもあるが平民階級を題材にして詠み出す者も多くなつた。西鶴などは、遊女などをも俳諧の材料にとり入れてゐる。遊女を詠めば、所詮、遊里の生活の一端を叙することになる。しかし、それはどこ迄も俳諧を詠む上の餘沫として寫された迄で、寫生のための寫生ではない、寫實のための寫實ではない。この點は十分省慮すべき事項ではあるまいか。かつこの事は押して、西鶴の人情本や、近松の世話物の本質を

考へる上にも参考になる。時代々々の人情風俗が説明された書、また遊里や劇場についての案内的な本を以て、直ちに寫實的のものとするのは大きい謬見ではあるまいか。西鶴以外の人情本作家で、その著書から世相の説明文と、拙らぬ話の筋を取除けば、後に何物も残らぬものが多い。要するに、元祿文學の寫實性には、基礎が無い。ぐらつゝいてゐる。嚴肅な文學者には、満足し難い遊戯性が溢れてゐる。

さて、かゝる環境の中に、わが芭蕉は如何やうに生ひ立つたてであらうか。これは、頗る興味ある問題である。紫式部を庭園に、西行を河流に、兼好を野原に譬へるならば、芭蕉は崇高な山岳乃至茫洋たる大海である。かれが如何に、動きのない山の様な個性を築き得たかは、次節で述べるとして、その資料といふものは、この元祿時代の雰圍氣からてなければならぬ。また、かれの素質の持つ力でのなければならぬ。

世に多く、藝術的才能は天稟であると考へられてゐる。全く、その適例は尠くない。しかし、わたくしは天稟と共に、努力が如何ばかり人にとつて重大であるかを忘れたくない。芭蕉の藝術は、その大部が努力精進の結果であるかの如く考へられる。かれは珍らしいほどに、晩成的の文學者であつた。一般に西行のやうな韻文作家は早成的、式部や兼好のやうに散文作家は晩成的と言はれてゐるが、芭蕉は例外で、かれの青年時代における文學的効績はほとんど無いと言つてよい。かれは、ひたすらに

遅々としてその歩を運んで向上を謀つた。

假に廿三歳の出奔の年から、俳諧文學に多少とも心身を傾けたと推定しても、七部集の初集を編み得た貞享元年(四十一歳)まで、その間十八年間の歲月がある。この十數ヶ年をかれは、「寢たる萩や容顏無禮花の顔」(續山井——廿六歳)「さても見よ甚べが羽織花ごろも」(貝おほひ——廿九歳)「行雲や犬の欠尿むらしぐれ」(六百番發句合——卅四歳)「愚にくらく棘をつかむ螢哉」(東日記——卅七歳)など、貞門風や談林風の句を得々として詠んでゐたものである。しかもかれの幻住庵の記に「つらく年月のうつりこしつたなき身の科をおもふに、或時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯のはかりごとさへなれば、終に無能無才にして此一すちにつながる」と懺悔してゐるやうに、かれの最初の目的は文筆をとる身になるのではなかつた。仕官懸命の地を羨望して止まない時もあり、その到底求めて與へられないことを知ると、また佛籬祖室の扉に入らうかとも考へたかれであつた。郷里亡命後十年間の消息は、杳として殆んど推知し難いが、要するにかれにとつて迷ひの時代であつたのである。あるひは言ふ者があるであらう。寛文十二年(廿九歳)かれが郷里伊賀にあつて、かれ自身の序及び判詞を以て「貝おほひ」集を上梓してゐるのは、俳諧宗匠を以て自任してゐたのではないかと。また、その年江戸に下つたのも、必ず、俳諧革命に大抱負をもつてゐたためであらうと。しかし、これらは當時の俳人生活の

性質を熟知しないものの考へて、詠句といふことは、いまだ生活の餘業餘事遊び事だけのものであつて、正業とは考へられて居なかつた。貞徳や宗因さへ、なほ自ら連歌師を以て任じ、俳諧を輕視してゐた理由もそこにあるし、難波あたりに俳諧宗匠は多かつたけれど、それ／＼本業は別に持つてゐるといふ有様で、點者の點料などいふものは、なほ些細なものであつたらしく思はれる。

芭蕉の江戸に下つた理由、これらも、季吟門關係、藤堂家關係の者が多く江戸にゐて、かれを招いた程度のもてはなかつたらうか。もちろん、江戸の文化も家康の施策以來、頓に發達して、特に民衆的の俳句も目に／＼隆盛に赴かうとしてゐる。いよ／＼江戸に下る迄には、かれ芭蕉も、さうした點に着眼を怠らなかつたであらう。

かれが江戸に下つた翌々年(延寶二年)、かれは最初の入門者を見た。それが後年の其角であるが、その入門者は僅かに十四歳の子供ぶとりの者であつた。そのまた翌々年、杉倉嵐蘭が入門してゐるが入門といふことが果してどの程度の師事であるか、思ふに晩年芭蕉の俳名が高くなつて、「自分こそ早く師の偉大を見ぬいたのだ」と慢りがに、入門々と自稱した者も多かつたことと思ふ。ともかく、芭蕉は些少の點料や、二三の入門者を以て、糊口して行くことは出來得なかつた。江戸に下着した當座こそ、杉山杉風や小澤卜尺乃至、默宗和尚の許にも寄寓したれ、その事情は何時迄も許されることではなかつた。(殊に、遠慮深いかれの性格上からみても)。こゝに、芭蕉の傳記者は、かれがその後駿

河臺の中の坊家(藤堂氏の家臣と云)の文庫番をしたといひ、高野幽山(貞門流の重鎮の門人)の執筆になつたといひ、あるは、關口水道工事の吏員をしたといひ、市兒に手習讀本を教へてゐたと傳へてゐる。なほ、かれが乞食をしたと記された書もあり、水道工事では勞働者であつたと傳した本もある。今、この場合、これらに就いて一々詮議立てする餘裕はないが、わたくしは、その何れをも、虚傳ではあるまいと思ふ。かれ自らが告白してゐるやうに、俳句の一筋以外にこれといふ俗才を持ち合はさない、身を以て、單身江戸の真中に、どうして、易々と生活の資を勝ち得られるであらう。現今でも憧憬を抱いて上京した文學青年が、直ちに幻滅の悲哀を経験し、一寸會社に腰を据ゑ、つぎは新聞の廣告取りになり、さて一方では雜文をかいいてパンの足しにし、切齒きさばつまつては植字工をもして見るといふ悶えを重ねること、それはそのまゝに芭蕉の姿ではなかつたらうか。三十四五歳の交から、「春二百韻」「江戸三百韻」と連句集を出し得て、やゝ俳壇に認められるに及んできたが、かれにとつて、俳諧の中に眞に自己の生命を見出だし得ることは、それからなほ容易なことではなかつた。未だ、かれは貞門談林の一亞流にすぎなかつた。宗因輩の足跡を嘗めるものにすぎなかつたのである。

世に、蕉風開眼を、貞享三年(四十三歳)春の「古池や」の句を以て劃するものがある。その取るに足らぬ妄説であることはいふ迄もないが、もと／＼作風の轉向を、明確に某年、某作といふやうに定めることそれ自身が不可能事である。しかし、敢てこれを芭蕉の生長の中に求めるならば、上述

もしたやうに、貞享元年（四十一歳）甲子旅行を以て劃するのが、もつとも適宜ではあるまいか。かれは、江戸を後ろにすると同時に、江戸俳壇がかれを捉へてゐた東縛の手を脱し得て、始めて、かれの素質かれの本性を透視し得たやうに思はれる。試みにこの旅行で得た多くの句を、前年の天和三年の收穫と比較して見よ。兩者の間には、何といふギャップがあるであらう。一躍してといふやうな言葉は無論用ひられないとしても、この旅で蕉風確立の基礎が据えられたことは明言すべきである。わたくしはこゝに、古く西行、新しく石川啄水の如き早熟的天才歌人を思ふ、しかも、四十餘歳にして自我を見出だし得た芭蕉を以て、どうして非天才呼ばはりをすることが出来得よう。これを思ふ時、わたくしは、芭蕉が運命的に背負はされて來た時代環境にいよ／＼思ひ至るのである。

「環境にからまつた人間の運命、わたくしはそれを、本書の始めから幾度か繰更えして來た。時代に對し終生反響を續けるもの、時代の醜惡を指的しつゝ、その救済を信じてゐるもの、時代を超越し、宗教や諄美の境に生命を見出ださうとするもの——われ／＼はこの場合様々の人を考へ得るけれど、あらゆる場合において、不斷に自己を凝視するといふことが、最も肝要ではあるまいか。たとひ、無私の境地を志しつゝも、自照の刹那を抜け／＼して、始めてそこに辿り得られるのではあるまいか。かつその自己の中における自分と社會は、一枚の紙の表裏であつて、自省は結極、自餘の他を考へることになるのではあるまいか。

芭蕉の享樂本位の時代相は、芭蕉の素質と對角線上にあつた。こゝにかく斷言するのを、諸君は餘り唐突と思はれるかも知れない。若しさうであつたなら、何故に、かれの反抗はもつと早く現はれなかつたか——。この疑惑は一應正しいけれど、これには、芭蕉の素質における反抗的要素の有無を考へて見なければならぬ。かれは如何に、天賦的に佗びを持ち合はしたとしても、かれに強い抗爭的意力が無かつたなら、それもそれ迄である。否、眩惑的世相の蠱妖が、かれの弱いいたいけな心を捕へてしまへば、結極かれの天性も蓋はれる迄である。しかし、その天性が根強く巢喰つて居れば居るほど、ともすれば間隙を求めて突き出てくる、最後には曝露されないと限らない。

まことに芭蕉は晩成的であつた。蕉風開眼までの道程は苦しく惱しいものであつた。しかし、かれが時代の波の中に浮沈して、遅々としてその道程を辿つていつたことは、かれにとつて決して無意味なことではなかつた。偏狹になり得ない、温順で理知的な性格は、すべてその特色を見出だし、そのすべてに隨順することが出来た。しかし、多包的といふことは、一事に邁進し難いことを語る。そこに多包性の人の悩みがなければならぬ。芭蕉は、妥協がちな自分の生活を回顧する時、西行の純一的態度を追慕し、それを求めてやまなかつたのである。かれは、佛籬祖室の扉に入らうとも志したが、そこにもかれは到底西行の如き殉教的的精神を持ち得なかつた。

かれは、甲子吟行にも伊勢詣の際の旅姿を記して、

腰間に寸鐵をちびず、襟に一囊をかけて手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵有り、俗にて髪なし。

我レ僧にあらずといへども、(鬢なきものは)浮屠の屬にたぐへて神前に入事をゆるさず云々。

と言つてゐる。所謂「僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうふり(蝙蝠)の」で、一種の不即不離的不徹底さがそこにも出てゐるではないか。

これも世相の一つの現はれてもあつたらうが。儒佛神の三教一致論といふやうなものが、當時一思想となつて現はれた。その反映は、大佛物語など物語の中にも見られ、また可笑記や他我身の上(この二書は多少禪味を重んじてゐるが)にもその三教融和の説が叙述されてある。さて神道は、その成立上多包的融合的の特色を持つてゐる。それかあらぬか、芭蕉の敬神思想は、かの西行以上に顯著である。俳諧世説に芭蕉の文として、

貞亨五年きさらぎの末伊勢に詣づ。我レ白州の土踏こと既に五度に及び侍りぬ。一つ／＼年の加はるに従ひて、畏くもおほん光りも思ひ優れる心地して、かの西行の跡を慕ひ、増賀の誠を悲しびて内外の御前に額き乍ら袂をしぼる許になん侍り。

何の木の花ともしらず勾ひ哉

かういふのもある。かれが、西行の崇敬厚かつた伊勢神宮に詣て、そこで西行を追懐し、「何事のおは

しますかは知らねともかたじけなさに涙こぼる」といふ西行の歌から、「何の木」と詠んでゐるところ、芭蕉が西行を追うてゆく心持が見えると共に、かれが、西行を乗越さうとする態度すら見うけられる。その一節中の「増賀の誠云々」については、その機会に、

裸にはまだきさらぎのあらし哉 (笈の小文)

の句を得てゐること一層證せられる。かれは四十歳から五十歳の間に前後七回の參詣を遂げてゐるのみか、筑紫を志したといふ元祿七年の旅行にも、難波から引返し今一度伊勢に詣てたいことを弟子に言ひやつてゐる。(杉風への書簡)

早朝鹽がまの明神に詣づ。國守再興せられて宮柱ふとしく、彩椽さらびやかに石の階九仞に重り、

朝日朱の玉がきをかじやかす、斯る道の果テ塵土のさかひまで、神靈あらたにましますこそ吾國の

風俗なれと、いと尊けれ。(奥の細道)

これ奥州の旅で鹽竈神社に詣てた感想の一片である。また以てかれの敬神思想を見るに足る好材料ではないか。敬神といふことは、既述の武士的尙古的精神などとも相通ふもので、かれの心裡を敬神の一事を以て解決することは不可能であるが、かれが儒教とか浄土宗とか天台宗とかいふやうに一教に偏し得なかつた態度と、この事實との間には共鳴する點が存するやうに思ふ。

甲子吟行の中に、つぎの一節がある。

富士川のほとりをゆくに三つばかりなる捨子のあはれげに泣くあり。此川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨テ置きけん、小萩がもとの秋の風、こよひやちるらんあすやしをれんと、袂よりくひ物なげて通るに、

猿を聞ク人捨子に秋の風いかに

いかにぞや汝ちゝに憎まれたるか、母にうとまれたるか、ちゝは汝を悪ムにあらじ、母は汝をうとむにあらじ、只これ天にして汝が性のつたなきをなけ。

この態度こそ、世相に對する芭蕉の態度の全幅を語るものではあるまいか。かれは、醜い世相に對しても、直ちにむきになつて憤り得なかつた。かれは、人力以上の天命の力を深く觀照した。その他に「霜を着て風を旅寝の捨子哉」といふ句の味などもこれと同一である。しかるに、この場合、かの天龍川で弟子の西住を京に追ひ返したかの一徹の西行を、この捨兒の側にあらしめたらどうだらう。かれには到底、「ちゝは汝を悪むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。只これ天にして汝が性のつたなきを泣け」など、「袂からくひ物なげて通る」餘裕は持ち得なかつたであらう。あるひは、かれは哀れさのあまりに捨兒を抱きとつたかも知れない。しかもこの芭蕉の冷靜な態度には、西行の情熱と異つた意味に、博大な愛憐の情が潜んでゐるのである。

またかれが古人を敬慕して止まなかつた心も、かゝる心理の現はれと見得られよう。かつ、かれは

西行宗祇竹齊と共に、宗鑑守武の如き遊戯的俳人をも敬した。

宗祇宗鑑守武三聖人ノ圖

月花のこれやまことのあるじたち

山崎宗鑑舊跡

ありがたき姿拜まん饑鬼つばた

同時代の貞徳、宗因に對しても、かれは心からの尊敬を表してゐるではないか。

貞徳翁の姿に發して

あさな名やしらぬ翁の丸頭巾

宗因に對するつぎの追慕を見よ。それは、去來抄の一節であるが、

先師常曰、宗因なくんば、我々の俳諧今以て貞徳の涎をねぶるべし。宗因はこの道の中興開山なりとすへり。

かれは言ふ迄もなく、談林門の一異端者であつた、しかし、萬物をそのありのままの姿、その本性の上に認めたかれは、他門と雖もこれを惡むことは出来なかつた。卯七が師に、「他門と交りて苦しからずや」と尋ねた時、かれは直ちに、

苦しからず。交りて惡き物は、博奕と盗人なるべし。(俳諧芭蕉談)

と答へてゐるが、全く、かれ自身の言行はその主張と一致してゐる。同じく卯七が「見てよき書は何ならん」と尋ねた時も、また芭蕉は、

見て悪き書としてはなし。儒佛より國書、其外、謠、淨瑠璃本も見るべし。(俳諧芭蕉談)

と明言した。尤も、この芭蕉談は、その盡くを信じてゐることの出来ない書であることは附記しておく。徒然草の持つ氣分には、達觀的超世的のものがあつて、一面元祿時代に迎合される點があつた。しかし、さすが兼好も、芭蕉ほど大膽に言ひ切ることとは不可能だつたらう。かれに淨瑠璃本を讀ませたら恐らくその顔を鬱蹙せしめたに相違ない。ましてや、芭蕉に多い盜賊を詠じた句などを讀ましたら、それを非文學呼ばりをしたかもしれない。芭蕉の座右の銘と稱せられるものの中、「人の短を言ふ事勿れ。己が長を説く事勿れ」とある一節は、かれが葬儀の引導の中に「五十一年一字不説」とある句とよく一致してゐる。(銘なるものが偽作だとしても)かれの胸は宛ら大海のやうな寛裕さであり、かれはたゞ黙々と實行を以て衆を導いていつたのであつた。

従つて芭蕉の歿後、其角、嵐雪、杉風、去來、許六、支考、文章、野坡などが、各自の特色を延ばし、江戸座(其角)雪中庵(嵐雪)美濃派(支考)など、流派を立て、角逐するに到つたことも止み難かつた。特に其角の如きその當初から、芭蕉の本性と別途の行方をしてゐるもので、芭蕉は生前、すでにそれを認容してゐた。芭蕉歿後の亂脈について、かの俳諧談に、次のやうにある、

佛教さへ一宗くと分てば、其宗に執して他を誘す。まして俳諧の小岐をや。一道をたて候へば、無學の人の習ひ、名をなさんとおもひて、しかともなき事にほこり、他をなみし、我レ發句したり、集作りたりなど、人にほこるは、眼前に聞クが如し。路通を遠ざけし一つは此ノ謂れなり。爰に嘆かしきは、其角也。百日とたぬうちに、句に少し變風をきく云々。
しかし、これも生前の芭蕉の寛大な態度に對し當然の結果と言はなければならぬ。許六の賞してゐる、

師は諸門弟の得たる所々も缺きたる所なし。師に得たる所は、一所も虚なき故に、鐵壁を立てたる如し。(俳諧問答)

といふ俊嶽の異彩こそ、芭蕉を芭蕉たらしめ得る。に充分な點ではないか。されば佛門の各流は、異を立て、争ふけれども、釋尊を崇める點にすべて一致してゐるやうに、芭蕉は歿後と雖もよく、各流各座から一様の敬慕と尊崇とを受けることが出來た。俳聖芭蕉の偉大さ、また思ふべきである。

さて、われ／＼は、芭蕉のかゝる延び方と、環境とを區別して考へることはこゝに到底出來得ない。芭蕉は、西鶴や近松と同じくやはり元祿時代の人であつた。

すてはて、身はなきものと思へども雪のふる日は寒くこそあれ花のふる日は浮かれこそすれ

この狂句は、芭蕉自身が西行の畫像に讀として作ったものである。これ西行が緇衣の身ながら終生自然の魅力を脱し得なかつたその愛着心に、芭蕉自らか共感したのである。しかし、なほ芭蕉の實生活を顧るとその洒々落落とした天地は、西行のそれと比較すべくもない。かれの一生はむろん貧賤なものであつたが、佛徒に倣つて無所有の生活味を主張するやうなことはしなかつた。嵯峨の落柿舎にゐた時も、

机一、硯、文庫、白氏文集、本朝一人一首、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集を置ク。唐の詩繪書きたる五重の器にさまゝの菓子をもり、名酒一壺盃をそへたり。夜のふすま調菜の物ども京より持來てまづしからず。我貧賤をわすれて清閑をたのしむ。(嵯峨日記)

と、普遍流通の心持を見せてゐる。堀立小屋の芭蕉庵に住めばそれでよし、落柿舎にあればそこに又清閑を楽しみうるのがかれてあつた。芭蕉の

和三角參盤句一

あさがほに我は食くふをとこ哉

の句は、其角の美酒を諷諫したものと稱せられてゐる。しかし、芭蕉は自ら禁酒したり節食したりすることはしなかつた。酒に關する句も多い。

花にうき世我が酒白く食黒し

乙州が一椀をたづさへ來りけるに

草の戸や日暮てくれし菊の酒

雪をまつ上戸の顔やいなびかり

夕顔や酔て顔出す窓の穴

これらは未だ平淡であるが、

戲書の句

頼むぞと寝酒なき夜の紙衾

尾張の人より淡酒一椀木曾の獨活茶一種送りしを門人にひろむとて

飲明けて花生ケにせむ二升樽

「——」。物をもいはず、ひとり酒のみて、心にとひ心にかたる。庵の戸おしあけて雪をながめ、又は盃をとりて筆をそめ筆をすつ。あら物ぐるほしの翁や(閑居箴)

酒のめばいとど寝られぬ夜の雪

かうなると大分かれ自らの好酒家の癖が出てゐる。その他、芭蕉書簡集を見れば、「——油のやうな酒五升といふは富貴の沙汰なり云々(素堂へ)」、「酒二升御こし頼入候(茂作へ)」などいふ節があり、更科紀行、既望賦、奥の細道 嵯峨日記などつき／＼に思ひ浮べられるかれの文中にも宴飲のことがあ

り、かれが酒を好んだことは確かである、かれには、また、

川舟やよい茶よい酒よい月夜

といふ如き、元祿氣分の享樂味を詠んだ句もあり、事實、茶も愛し、煙草も喫んでゐた。食物に關しては、

あら何ともな昨日は過ぎて河豚汁

の句を始め河豚を食した句や文が、數ヶ所見えるがさうした嗜好もあつたものらしい。鳴雪氏は、芭蕉は大食のため胃病を發したものと疑ひ、子規は、芭蕉は多情的で、しかも獨身であるから肉體の慾を他に伸ばし得ず、食に充たしたのだらうと想像してゐるが、それ迄の臆斷は如何かと思ふ。かれの青年時代はいざ知らず、かれの四十歳後はむしろ早老の人で、さして肉慾の旺盛の人だつたと思はれない。要するに、鳴雪氏や子規の想像の起因する所も、芭蕉がピウリタンでないことを傍證する。かれには、來りよるものを盡く攝取してゆく一面があつたのである。その他、食物に關しては、

蒟蒻と柿とうれしき草の庵

といふやうな句もあつて、蒟蒻、ふろふき大根、にうめんなどの嗜好も強かつた。やはり、かれは、濱はわづかなる海士の小家にて、佗しき法華寺あり。爰に茶を飲ミ酒をあたいめ、夕ぐれのみさびしき感に堪へたり、

さびしさや須磨にかちたる濱の秋

などといふ一文でも分るやうに、味覺そのものに訴へる茶や酒でなく、茶を喫み酒を飲む氣分を味はふ興味につながる所が多かつたのではなからうか。

しかし、かういふ疑問も、ある年代のみを以て解決するのは拙い。由來、芭蕉を聖賢の列に祀りこめて、亡命を以て釋尊の入山の如く麗々しく神祕化するものがある。否、かれが亡命後少くとも十ヶ年は、時代の波と共に浮沈した期間であつたのであらう。支考が例の調子で、「むかし西行、宗祇など兼好も長明も、今日の芭蕉も、酒色の間に身を觀じ風雅の道心とはなし給へり（露川責）」と言つてゐるが、酒色の間といふ表はし方は別としても、この事實は誰より最も芭蕉にあてはまつてゐるやうに思ふ。同じくかれの書簡と稱へせられる木子に宛てたものに、

御手紙被下候昨日は知人に誘はれて四條の芝居見物にまゐり一日遊び申候又々氣も晴候而おもしろ

く御座候俳諧などはちがひ是にては俳諧もやめにして遊興斗がよく候（沼波氏校訂芭蕉全集）

「俳諧もやめ」は一座の戯言にすぎないが、宗匠連の芭蕉觀には多少參考にならう。何故に、われ／＼は歌聖や俳聖その他君子迄も、生れおちたその時から、並の人で無いものであるかのやうに考へがちなのであらうか。たとひ、弘法大師が襤褸の中で文字をかき得た聖者であつたとしても、われ／＼はむしろ、かれを以て、少年時代には偉彩はなかつたが努力精進の結果、悟脱を得た大師として考へたのである。一般に傳記の不明な時代ほど、それを神祕化し朦朧化して仕舞つたものが多い。芭蕉が

伊賀を出奔後暫らくの間は、怖らく一般青年並みに（特に元祿時代を背景にし）、酒も飲めば小唄も歌ひ芝居見にも出かけたであらう。それが自然なのだ、そこに芭蕉の人間味がある。

あたかも芭蕉が、奥の細道の旅を無事におへ、江戸に歸つてきた年であつた。かれは暫らく庭の扉を閉めて閑居を味はつたことがある。その時に書いた閑關説といふ文に、

色は君子のにくむ所にして、佛も五戒のはじめにおくといへども、さすがに捨テがたき情のあやにくに、あはれなるかたぐいもおほかるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人めの關ももる人なくば、いかなるあやまちをか仕出てむ。あまの子の波の枕に袖しをれて、家をうり身をうしなふためしもおほかれど、老の身の行末をむさぶり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、遙にまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、わづかに二十餘年也。

といふ一節がある。誰しもこの文の調子が、芭蕉の一般のものと變つてゐるのに氣付かされる。かつそれは、どことなく徒然草の文脈を傳へてゐるやうには、思はれないであらうか。もとこの閑關説といふのは、老後なほ實利のために使はれてゐる知人に、閑居の趣を述べたものであるといふに「色は君子云々」と筆を立てた所もけんてである。しかし、ともあれかれは戀愛の中にある諄眞さを認め得てゐたことが分る。この事實を知るにはかれの連句を見るのが一番近道であらう。そこには、源氏

物語や徒然草中の戀愛描寫、山家集中の戀歌的場面に劣らぬ、當時世態の詠出もあつて、まことに閑達自在の詠みぶりである。一寸「冬の日」を繕いて、その中から、多少とも愛に關はつてゐるかれの連句を求めても、それはかなり多い。

我庵は鶯に宿かすあたりにて

髪はやす間をしのお身のほど

床更て語ればいとこなる男

縁さまたげのうらみ残りし

月にたてる唐輪の髪の赤かれて

戀せぬ碓臨濟をまつ

雪の狂吳の國の笠珍らしき

襟に高雄が片袖をとく

かれが、どんな風に戀の連句をつけてゐるか、そこを、全般にわたつて、まだわたくしも檢べてゐない。しかし、この四つの例だけでもそれぐい特色があつて面白いではないか。その他なほ、他の集には、

宮に召されしうき名はづかし

手枕に細きかひなをさし入て

(奥の細道拾遺)

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ

兀げたる眉を隠すきぬく

(初懐紙)

細き筋より懸つのりつゝ

もの思ふ身にももの食へとせつかれて (ひま)

あや憎に患ふ妹が多ながめ

あの雲は誰が涙包むぞ

(曠野)

足駄はかせぬ雨のあけぼの

きぬくやあまりか細くあてやかに (曠野)

と、きわどいものも見える。かうした奇抜な連ね方を芭蕉のものから求めるなら、他にもかなり多からうと思ふ。

貝おほひの判詞の中に「今こそあれ我も昔は衆道好きのひが耳にや」とある。それも戯談だけの言葉ではないやうである。

前髪もまだ若草の匂ひかな

梅櫻さぞ若衆哉女かな

こんなかれの句作さへも傳はつてゐるから。

全く、かの甲子吟行にある、

其日のかへるさある茶店に立ちよりけるに、蝶と云ける女あが名に發句せよといひて、しろき絹出しけるに書つけ侍る、

蘭の香や蝶のつばさに薫す

或は、月見する座に美しき顔もなし「團扇もてあふがん人の後ろつき」等の句を以て、芭蕉に關する珍らしい艶話位に考へてゐるものは、七部集中の連句や、貝おほひの判詞によつて歴然たらしめらるべきであらう。

以上で、ほど元祿を環境としての芭蕉の態度を見て來たが、われ／＼はこれから更に環境を絶したかれの天賦的方面にも入つてゆかなければならない。

さて、芭蕉の最後十ヶ年、即ち蕉風確立後のかれの生活を考へてみるに、われ／＼は、それを全く「閑居か、旅か」と言ひたい。かれは、その間よく最小の生活に満足し、弟子と俳諧をよみ、弟子を愛しうることに無上の生活を見出だして行つた。この場合女性觀とか宗教觀とか、乃至道德觀社會觀などを、はつきりかれから索めがたい點も、芭蕉型と兼好型の差別の存するところである。

しかし、史を案ずると、かの五代將軍綱吉の現はれたのが延寶八年(芭蕉三十七歳)で、西鶴が好色

一代男を書きあげたのは、正にその翌々年に相當してゐる。時世の奢侈に向つていつたことは勿論で、和蘭陀船の舶載してくる珍品を購ふことの禁令發布(天和三年)、諸大名旗下の遊女町に遊ぶことの禁止(元祿六年)などは、一層浮世双子物の内容の事實であることを確めてくれる。もつとも、綱吉は始めから晩年の如く秕政を行つたわけではなく、當座は生母桂昌院に對する孝養から、護國寺などを建立し(天和元)、生類憐みの令を發する(貞享四)等、まづ善政をなしたのであつたが、柳澤吉保の權勢を擅にすると共に、綱吉の豪華は増して、はては幕府自らをさへ困窮に陥らしむるほどに到つた。犬を愛するあまりに十萬餘頭の犬を飼養したなど沙汰の限りである。それらが民心に、如何ばかり悪い影響を與へたかは想像外であらう。

かゝる時世に、深川の場合に、わづかに膝を入れ得る草庵を與へられ、そこに満足してゐた芭蕉を思へ。しかも炊事においても、淨求とか曾良とかと時折、手をかしくのみで、多くは獨り暮して、只淋しく茅屋から富士を遠望して足れりとしてゐたかれを思へ。正にかれは、大陰朝市に存するといふ語の實例を示した人のやうに思はれる。かれが、佛頂和尚に「道心を求めんとする者、若し市中の喧忙に飽きて幽谷に隠れむ。其初に飽くものは、又其終に寂寞に飽かむ云々」と言つたとも言はれてゐるが、結果から見れば正にそれに相違ない。芭蕉が古往の隱者生活を尠からず憧憬したことも想像されるけれど、かれが輕卒にその眞似をしなかつたところに、かれの偉大さがある。

芭蕉野分して盟に雨をきく夜かな

を始めとして、芭蕉庵閑栖中の句作は少なくない。かれは茅舎の縁からよく月を眺め得たやうに、かくこの庵中にあつて至妙の天籟をことごとく聴取し得たのであつた。

こゝに思ひ至ると、芭蕉はついに元祿の一賢子で無かつたことが分るであらう。たとひ、かれが判詞の中に「伊勢のお玉はあぶみかくら、かと云へる小歌なれば、たれも乗りたがるはことわりなるべし」といふやうなことを言ひ、「川舟やよい茶よい酒よい月夜」の句を詠むほど享樂的であつたとはいへ、かれはそれがために、己が素質を害なふことはしなかつた。かれの庵には、へつづい、二つあつて、その上に二升四合入の瓢がかけてあつたさうである。杉風など門弟が庵を尋ねる時、それく、いづくかの米を持參してはそれに入れておくのが常であつた。芭蕉の「瓢の銘の後に」と題した句に、

物ひとつ瓢はかるきわが世かな

といふのがあり、また、

乞うて食ひ貰うて食ひ年の暮れければ

めてたき人の數にも入らん老の暮

米くるゝ友を今宵の月の客

などいふ句もあるが、何れも事實を詠んだものであらう。しかも、弟子が來て多く食つていつたりし

て、誰も米を持つて来ない内に、米が拂底することもあつた。そんな時は、芭蕉自身で米を貰ひに出かけたことであらう。それは何といふ懐しい生活ではないか。

皆々近く圓居し給へとて、茶漬一二杯さら／＼と打ちしたため、風雅はかくこそあらまほしけれ云々(俳諧世説)

萬事、庵に集まつた連中のやり方は、かう言ふ風だつたのだらう。あらば食ひ、なければすすすといふあつさりしたやり方なのである。ここに、

白露にさびしき味を忘るゝな

の句の味もはじめて生かされてくるわけてある。

しかし、芭蕉にとつて閑靜の場所は深川の地のみでなかつた。かれは如何なる地、如何なる家にも閑寂を見出だし得た。そこがこの上もなく尊い。

蔦植ゑて竹四五本の嵐かな

芋植ゑて門は葎の若葉哉

三尺の庭も嵐の木の葉かな

我が宿を蚊の小さき馳走哉

注にいふ、我が宿とあるのは幻住庵にての句のためである

といふやうな句も残つてをれば、題落柿舎の「深對峨峰伴魚鳥、就荒喜似野人居、枝頭今缺赤虬卵、青葉葉頭堪學者」といふやうな詩作も残つてゐる。つぎの數句の如き、明瞭に閑居を詠んではゐないけれど、閑棲を楽しむものにして、始めて詠みうる世界ではあるまいか。

折り／＼に伊吹をみては冬籠り

秋近き心のよるや四疊半

冬ごもり又よりそはむこの柱

朝顔や晝は鎖あるす門の鍵

惟ふに、芭蕉の幼時、生家の松尾家は不幸つゞきてあつた。かつ、極めて貧しかつたらしい。これらに對するかれの追憶は、いつまでもその胸裏から消えなかつたであらう。かれが二十五歳頃の句に、

武脂守奉時、仁愛を先とし政以て去れ欲爲れ先

明月の出るや五十一ヶ條

などいふのがあるが、年々歳々奮りに向ふ世相を見て、はるかに泰時の節度の上に立つた善政を追慕したのが、この句の心ではあるまいか。深川生活にあつても、八貧の句あるほど赤貧であつたが、かれはどこ迄も洒々落々としてゐる。

米買ひに雪の袋や投頭巾

これは、八貧の一、米買の題で傳はつてゐるものである。もちろんそこには、杉風の如き、弟子にして保護者があつたからでも分るが、それに係らず餘分の物資や金員を持たうとしなかつたことは、どこ迄も清廉潔白の士であつた。かれの書簡集は、何れを繕いても愛讀さるべきものであるが、つぎに摘載した如き清淡な態度の窺はれる一節には、誰しも敬伏せしめられずには居れないたらう。

覺

一、もち米 一升

一、黒豆 一升

一、あられ 見合セ

右今夕會之夜食に成申候間御いらせ、傳吉にもたせ御こし可被下候、茶は一森三井寺より澤山もらひ申候云々。(喜入へ)

昨日は渡紙澤山御惠存候、然處昨夜惟然一宿例之むだ書、剩へ筆の先棒になし困入申候、今四五枚申請度候、此人に御こし可被下候。(杉風へ)

一 近日は芳野行脚立候間金子二分御かし可給候、押付もらひため返濟可申候、されど我等事に候へ

ば、えなすまじくも候以上。(去來へ)

芭蕉が、奥の細道から北陸道に出て來た時、加賀の萬子が僂した金子をかれの受けなかつたといふ逸話は、廣く喧傳されてゐるが、かゝる態度はこの時に限らなかつた。江戸を立つて上方に上る時にも、かゝる餘分の旅費を僂者に返してゐるので、そこにかれのかれたる面目がある。ある意味で、かれは黙しながら只實行を以て、時代相に反逆した佗人なのであつた。

しかし、わたくしは、そこに淋しいかれの姿を思ひ見ずには居られない。晩年に及び、かれの個性が出てくればくるほど、孤寥の中にのみ存する純一の自我の相が盛りあがつて出てゐる。「訪ふ人も思ひ絶えたる山里の寂しさなくば住みうからまし」と詠じたのは西行だつた。抱愛の情と、寂寥の心が隣り合つて住む不可思議なわれの胸よ。

獨りすむ程面白きはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失ふと。素堂常に此言葉を憐れむ。予も又、

うき我を淋しからせよ閑古鳥 (嵯峨日記)

何と愛誦してやみがたい一節ではないか。そこには芭蕉の素質の一端がそのまま裸出してゐる。しかし「獨りすむ程面白きはなし」で、芭蕉が孤獨の世界に安住しえたものと考へ、「主は半日の閑を失ふ」の語で、かれが全然客を却けたとのみ考へるのは輕卒である。雲竹の後ろ向の自畫像に、かれが讚し

下

こちらむけ我も寂しき秋の暮

と、嵯峨にゐた前年詠んでゐるが、誰人か静かに自己を省る時、かゝる寂しさをわが胸底に認めずに居られようか。

此道や行く人なしに秋の暮

此秋は何て年よる雲に鳥

この二句はいふ迄もなく、最後の旅で奈良から臨終の地難波にゆく途中で出来たものである。わたくしはこの句によつて、眼前に髣髴と俳聖の姿をさへ思ひ浮べることが出来る。「憂き我を淋しがらせよ——」といふ如く、鋭角的の主観は出てゐないが、何といふ大自然の波打つ寂寞さが、句の全面に波打つてゐることであらう。

此道や行く人なしに秋の暮

此秋は何て年よる雲に鳥

その平淡な語彙の中にいかに人間の本能的に持つ呼吸がそのままに蝕ひ込んでゐることであらう。

なほ、つぎに、訪客にしても、かれは、必ずしもそれを好まないわけてはなかつた。これは貞享三年の文ではあるが、閑居箴と題したものの中に、

あら物ぐさの翁や、日此は人のとひ来るもうるさく、人にもまみえじ、人をもまねかじと、あまた
ゝび心にちかふなれど、月の夜雪のあしたのみ友のしたはるゝもわりなしや。(下略)

といふ一節が見える。これぞ雲竹自畫像への讃と同じく、人々の一様に持つ心ではなからうか。同じく芭蕉書簡集の中に、

「草庵朝顔盛りに候間只今御入來まぢ入候」(梅石へ)

「五月雨うち降り殊の外淋しく御座候間青山御誘ひ御出待入候」(新六へ)

などとある。詳しい時や所をこゝに知り得る由はないが、かれの閑居は嫌人病や遁世的性質のもてはなかつた。かれは、語りたければいつても、自分からも出かけ、また弟子をも招くほどの自由な態度を持つてゐた。かの嵯峨で「うき我を——」の句を詠んだ日の日記の書出してある。

二十二日、朝の間雨降。今日は人もなくさびしきまゝに、むだ書して遊ぶ。其詞

喪に居るものは悲しみをあるじとし

酒を飲むものはたのしみをあるじとし

愁に住するものは愁をあるじとし

徒然に住するものは徒然を主とす

云々と、まことにかれ芭蕉も、その刹那つれづれに住してゐたものに相違ない。いな、かれは人生の煩

鎖の中に、いかに徒然の時間の尊ぶべきかを知り得た大偉人であつた。かれは元祿時代を環境にもつて、人一倍切實にこの念を抱いて、そのために闘つた人でなければならぬ。

これから、わたくしは少し筆を轉じて、芭蕉と旅といふ問題に言ひ及ぼして行かう。

記録の残らない四十歳以前のことはまづ論外におく。芭蕉の晩年十ヶ年の生活は、その半ば、旅泊においてあつたといふことは、決して過言ではない。もつとも、その他の半ばを暮らした筈の江戸深川が果して、かれの住居であつたかといふにそれすら怪しい。そも／＼その深川の草庵に尻のちついたのが天和元年冬(三十八歳)、乃至その前年の冬に屬してゐる。しかるに、その翌年、天和二年十二月には、隣火のためかれの草庵も烏有に歸し、一時甲斐の知邊に身を寄せざるを得なくなつた。世の傳者が、この火災によつて、かれが一處無住の念をおこしたやうにいふのはをかしい。もちろん、其角が枯尾花に叙べた程度のショックはうけたであらうが、元來、芭蕉庵などと言つてもその規模は少さく一時的建築であつたことは、芭蕉の旅から歸つてくる度毎に、修築を要してゐることも分る。天和二年草庵が焼け亡びた時、弟子たちにより、特に芭蕉のため再興されようなどは、かれの意外とした點に相違ない。ともかく、その後草庵は、度々改築されたが、つねに深川であつたがため

に、この地が、芭蕉にとつて第二の故郷になつてしまつたのであつた。

しかしその頃、ある革命がかれの心に萌し始めてゐた。それは、漸く江戸に安居されようとする事實への、反逆心である。生活革命の要求である。かくてかれが旅の心に文學の本質を索め出すまでは、多少の時間を要したけれど、かれは、とりあへず行脚の身となつて、第二の西行たらうとしたのであつた。われ／＼は、かれが甲子吟行の旅に出る前、物した笠張の説といふ一文を見ることが出来る。かれが初期の文中、わたくしのもつとも愛讀する一つである。

草扉にひとりわびて、秋風さびしき折々、竹取のたくみにならひ、妙觀が刀をかりて、みづからもをわり、竹を削りて笠づくりの翁となれる。心しづかならざれば、目を經るに物うく、工たくみつたなれば、夜をつくしてならず。あしたに紙をかさね、夕にほして、又かさね／＼澁といふものをもて色をさはし、ます／＼かたからんことを思ふ。廿日過ぐるほどにこそや／＼いてきにけれ。其かたちうらのかたにまき入り、外さまに吹かへりなど、荷葉のなかばひらくるに似て、なか／＼をかきさすがたなり。さらばすみがねのいみじからんより「ゆがみながらに愛しつべし。西行法師のふじみ笠か、東坡居士が雪見笠か、宮城野の露に供つれねば、吳天の雪に杖をやひかん、あられにさそひ時雨にかたぶけ、そとろにめて、殊に興ず。興のうちにして俄に感ずることあり、ふた／＼び宗祇の時雨ならでもかりのやどりに袂をうるほして、みづから笠のうらに書きつけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

(注にいふ、この句は、宗祇の世にふるはさらに時雨のやどり哉をもちつたもの)

かくて出来上つたのが、人も知るかれの檜笠であつた。この文致はユーモアの中に、いかにも争はれぬ真面目さがあるではないか。そこには將來、芭蕉のとらうとした方角さへ暗示されてゐる。この檜笠は、まことに、芭蕉の葉と共に、この俳聖のシムボルと言つていい。かくて甲子吟行の出發は、それが再築の草庵に歸つて後一年足らずで實現された。

千里に旅立つて路糧を包まず。三更月下無何に入るといひけんむかしの人の杖にすがり、貞享甲子秋月、江上の破屋を立いづる程、風の聲をこゝろ寒げなり。

野ざらしをこゝろに風のしむ身かな

これ言ふ迄もなく甲子吟行の冒頭である。現代の旅行を以て、三百年前の旅状を想像することは、ほとんど不可能に屬する。それも、豊富な旅費と健康をかねての旅行であれば、面白をかしくも終へられたかもしれない。鬢髪すてに白毛を交へ、むしろ老衰の芭蕉にとつて、たゞ弟子千里一人同伴の徒歩旅は、決して容易のものではなかつた。かれが「野ざらしを——」と、旅途においての死を覺悟して出發したことも、當然のことであつたらう。吟行の中に、

死もせぬ旅ねのはてよ秋のくれ

狂句木からしの身 竹齋に似たる哉

草枕犬もしぐるゝか夜の聲

年くれぬ笠きて草鞋はきながら

といふやうな流浪の旅の體験が詠まれてゐる。しかし別に、野ざらしともならず、無事翌夏四月、江戸に歸着することが出来た。

蕉風確立後の芭蕉の俳名は、頓に流布した。大抵の文人なら、多くの場合周囲の賞讃に甘やかされると、生活上の安定をのみ計らうとする。しかるに、わが芭蕉はその翌々年の貞享四年(四十四歳)、又もや、とぼくゝと上方へ乞食旅行に出て立つた。(その際、送別の詩文を分類すると、詩九、和歌三百二、俳句三十五以て芭蕉の俳名のあつたほどが想像されよう)

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して

旅人とわが名よばれん初しぐれ

この出立の句には、かの甲子吟行のそのやうに、すでに悲壯な感じはないが、芭蕉が旅心の中に眞實諄粹なものを求めたプロセスを語るに十分であらう。かれには。漸次に、旅心を味到しうる餘裕を持つことが出来た。

旅人とわが名よばれん初しぐれ

そこには苦痛多き旅路も既に非人情化されてゐる。客観化されてゐる。なほさら某長太郎のつけた脇句
また山茶花を宿くにして

と読み合はしてゆけば、そこに一幅の畫面が現はれてくるではないか。

旅ねして見しや浮世の煤はらひ

旅の具おほきは道のさはりなりと、物みなはらひ捨たれども、よるの料にと紙衣ひとつ、合羽かっぱやうの物、硯筆紙墨等
書簡など、物に包てうしろにせおひたればいと、歸かへよわく力なき身の跡さまにひかふるやうにて、道なほすま
只ものうき事のみ多し。

草臥れて宿かるころや藤のはな

送られつ送りつはては木曾の秋

かくかれの旅情の一端を語る句が、その旅で詠まれた。この旅の紀行は、笈の小文と更科紀行との二
部に跨り、旅の期間はほとんど一ヶ年に垂んとしてゐる。

かくて、八九月の交（元祿元年）歸庵した芭蕉は、すでに翌年三月出立した奥羽北陸にわたる六百
餘里、百六十餘日の長旅の門出に立つてゐた。なほ里程は六百といへ、未開の僻地を東海近畿のもの
に比較すれば、六百は千里にも相當するであらう。かつ、芭蕉の最も不安に感じたものは、近畿への
旅と異り知己朋友のゐない點であつたらう。しかし、そこは西行がすてに行脚した地方であるといふ

ことが、どんなにかれには頼母しかつたことか。かれは、西行が「道の邊の清水流るゝ柳影しばしと
てこそ立ちとまりつれ」と詠んだ芦野の宿の柳、「とりわきて心もしみて冴えぞわたる衣川みにきた
る今日しも」と詠んだ衣川戦跡、「松島や雄島の磯も何ならずたゞ象潟の秋の夜の月」と詠んだ象潟の
風光、「夜もすがら嵐に波をはこばせて月をたれたる汐ごしの松」と詠んだ汐越松等の趣を、まづ忍ん
で見た。かれはそしてそこに西行そのもののつよい香りをかがうとした。それにしても、この大旅行
には十二分の決意が必要であつた。

月日は百代の過客にして、ゆきかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへ、老
をむかふるものは日々旅にして旅を栖すまとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片
雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を
はらひ、やゝ年もくれ、春立つる霞の空にしら川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心くるは
せ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず。股引の破れをつゞり、笠の緒付けかへて、三
里に灸するより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人にゆづり、杉風が別墅にうつるに、

草の戸も住替る代ぞひなの家

これ言ふ迄もなく、大紀行「ちくの細道」の冒頭である。「古人も多く旅に死せるあり。予も云々」にか
れの大決意が見られるではないか。「そゞろ神の物につきて心くるはせ——」も面白い。自然を愛